

庫

文

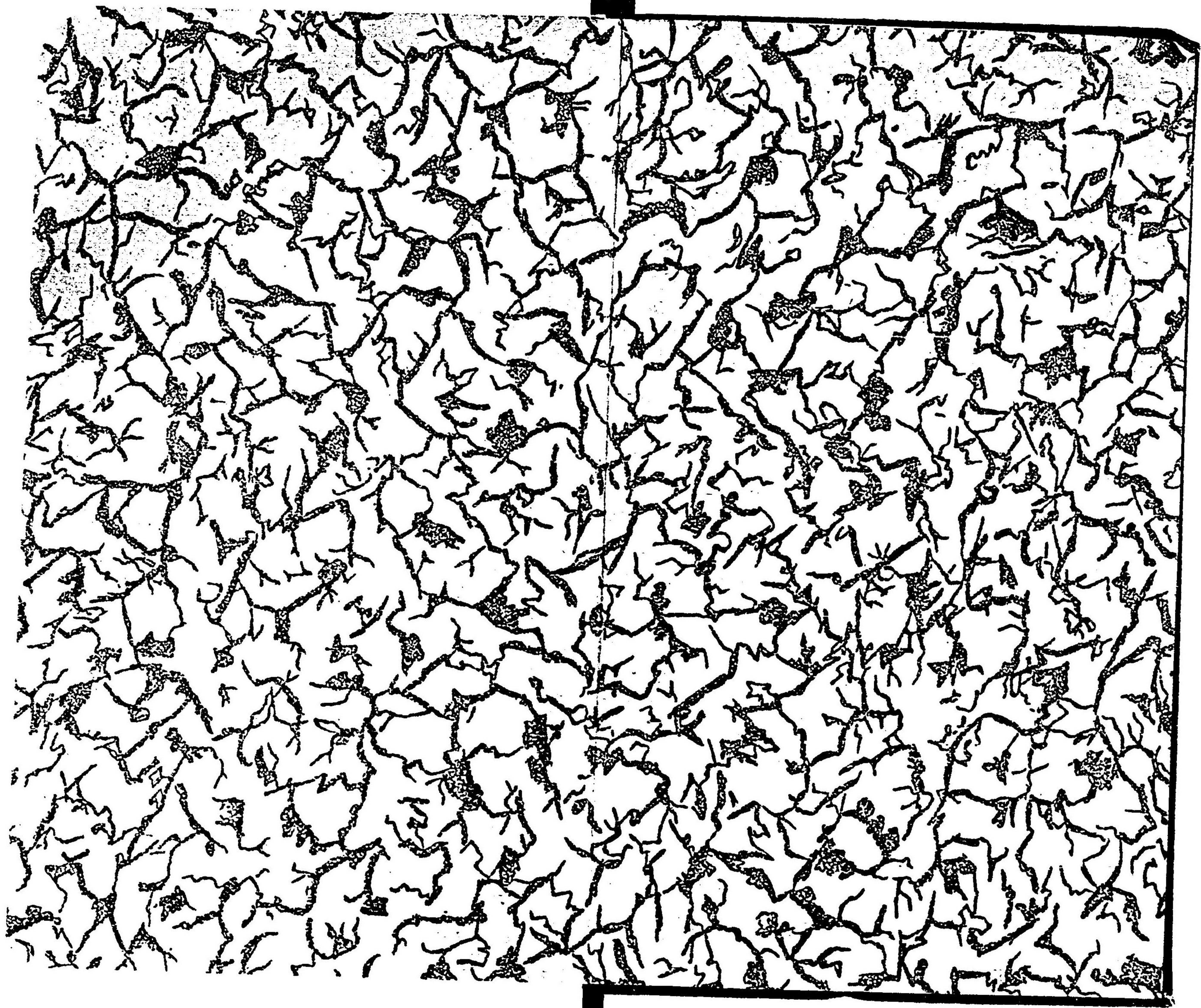
田

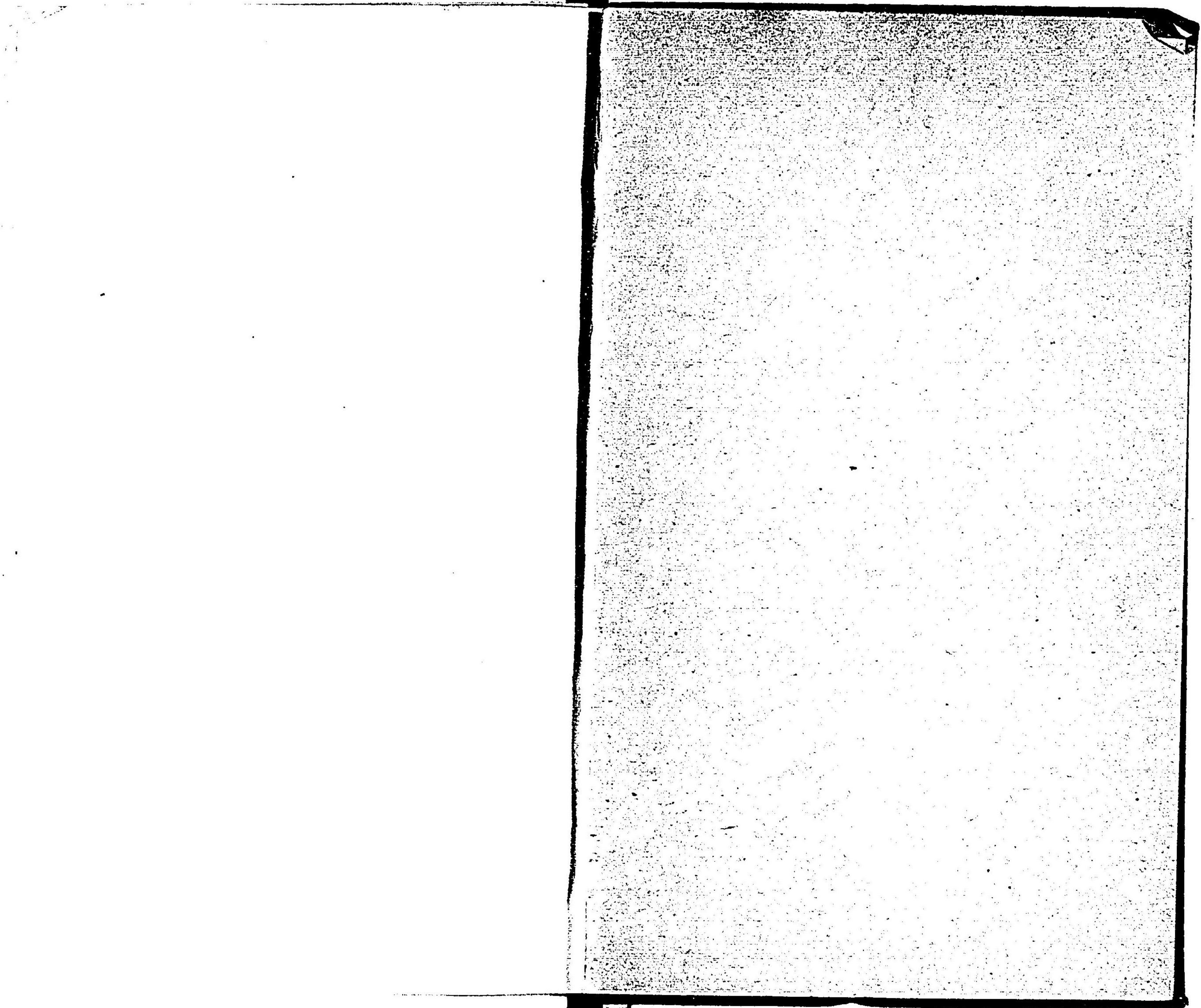
代

子

語物國諸休一

1911





特65  
105

千代田文庫

一休諸國物語

明治

44. 3. 11



一休諸國物語

卷之一

千代田書房編輯局校訂

○和尙おしやう年若としわかにおほせしより才智さいち衆しゆうに勝すぐれ、よく人を導みちびかせ給たまふ、或人あるひと問とていほく、如何いかに小僧こそうそれ地獄ぢごく樹樂じらくと申まをす事ことありげに候さうらふ、しかし地獄ぢごくは死後しごならでは證據しやうこなきより承うけたまはる、さもありぬべし、若人わしひとありて惡事あくじをなせば死して三途さんづの大河たいが、死出しだの山やまなどいふ難所なんじよを越こしてやうく、地獄ぢごくに入いると申まをすなり、さて又極樂ごくらく淨土じやうとと申まをすは是これより十萬億じふまんおくど土まをと申まをせば、遙はるかの道みちを経て參まゐるとなれば、我等われらかやうなる不達ふたつしや者ものは極樂ごくらくの事ことはさておき、地ちごくへも行ゆきかたかるべし、此儀このぎいかに、一休きゆうたへて、夫それ地獄ぢごく遠とほきにあらず、眼前がんぜんの境やう

界かい外がいになし、淨じやう土とといふは爰こゝをさる事こと違ちがひらず、とのたまへば、この香か申まをやう、いやく左さ標ひらに目めの前まへに地ぢ獄ごくこくらくありとのたまふとも、顯あらはれて見みへれば合あ點てんゆかす、小こ法ほふ師しの分ぶんとしては委くはしくしめし給たまふ事こと成なるまじと、あざ笑わらふて申まをける。一きう休くわ繩なわをたて、扱さてて其その方はうは我われを若じやく年ねんものとあなどり給たまふかと、頓つがて一きう休くわ繩なわをもちて後うしろへまほり、かの者ものの首くびに引ひかけ思おもふさまにしめ付け、汝なじ是これはいかにと申まをさるゝとき、此このもの合あ點てんして、尤もつとこれ地ぢ獄ごくなり、其そのときまた繩なわをとき給たまひて、汝なぢあるときははいかんと給たまへば、淨じやく土となりとこたへ、其そのまゝ合あ點てんして、さても、此この法ほふ師しは何なんのわきまへも有あるまじきやうにおもひあなどりしに、幼えう稚ぢなれどもかくのごとく智ち恵えある事こと、わたくしならぬ事ことなりとぞかんじける。

○一きう休くわ十一さい歳さいのときことの事ことなりしが、師しの房ぼう他た行ぎやうしたまひける留る守すの處ところへ、餘よ所そより餅もち一つひとつきたりければ、一きう休くわすこし割わりて、師し匠じやくのかへり給たまふに取とり出いだして奉たてまつる、師しもだうけ人ひと

にて、滿まん月げつ無む片ぺ破は缺けつは何なん地ぢにかあるとつたまへば、一きう休くわそのころより智ち恵えさかしくましませば、直たちへんに返へん答たうに雲うん隱いん有う是ぜとはかの陰かげを出いだされける、此この心こころは滿まん月げつはみくみちて、かけたる處ところなし、此この餅もちも滿まん月げつのごとく、まん丸まるにてあるべきに、かけたるはいかにと問とひたまへば、雲くもに隠かくれてこゝありに有ありこたへたる也なり、師しうち笑わらひてさても小こ賢けんき小こ僧そうかなとて、はなをみなたび給たまひけるなり。

○一きう休くわ御おん諱いみなを宗そう純じゆんと申まをせしが、別べつ號ごうを一きう休くわと名な付つけたまひける、或ある人ひときたりて、一きう休くわと名な付つけ給たまふ御おん心こころは、いかなる御おん心こころ得えにて侍はべるやと尋たづねれば、よくこそたづねめされける、さりながら一きう休くわにふかき心こころもあらざれば、かたりて聞きくべきやうもなしとてかく、

有う漏ろう路じより無む漏ろう路じへかへる一きう休くわあめらふばふれ風かぜふかばふけと遊あそばしければ、彼かのものきよて扱さてもおろしさうなる御おん歌うたや、有う漏ろう無む漏ろうとはいかなる事ことにておはしけるぞと尋たづねれば、そばなる御おん佛ぶつ子すをとつて彼かの者ものの顔かほをなでたまへば、いや何なん事こと

なかなきるゝとおどろきたるばかりにて何とも心得ずと申す、一休が曰く、その何とも心得ぬところが無漏路なり、はつとおどろきし處が有漏路なりと仰せられければ、彼俗肝を冷して、有がたや即時に大事をさづかりけるとよろこびて、扱御歌の一やすみとは心得申候、雨ふらばふれ風吹ばふけとは何なる御心にて侍りけるぞ、さればよわづかの道のことなれば、雨も風もいとふ事侍らすと仰られければ、扱も有がたき御歌かな、おそれながら只今さづかり申せし心を、一首申てみんと申しければ、夫はきとくなる心さしやとのたまへり、かのものゝよめるは

うるじむろじ一休ぞとまくときは十萬億士んさきとしる

と仕りければ一休きこしめし、善哉くとして尻餅ついてよろこび給ひて、かゝる例しもあるこしにも侍りし事ぞ、四休居士といふ人ありけるに、山谷といふ人、その四休の心を聞ければ、四休わらひて、答ていはく、

廉茶淡飯飽即休

和破遮寒暖即休

三平三滿過即休

不食不妬老即休

と申されければ、山谷がいはく、是安樂の法なり、それよく少なとほざるは不伐の家なり、足る事を知るは極樂の國なりと感じてしたしく語りて、四休の心を得、三首につくりうたひ樂しみしとかや、其二首に

富貴何時潤一懶骸

守錢奴與一抱官囚

大醫診ニ得人間病

安樂延年萬事休

と有りしによく似たり、一休の心をとひて今其方の歌よむ事よと感じたまへば、彼人申すやう一休の二字をたづねて、四休の四字をなす事、求めずして得を幸と註したり、これ幸なりとよろこびけるが、かの四休のうち、三平三滿とはいかなる事やらんと申しければ、其方の内方よとのたまへば、合點まゐらす見にくきといふ心かといへば、いやさに

あらすおとこせのことなりとのたまへば、扱もめづらしきことかな、誠に三平は兩の類  
と鼻二滴は額と願よ、さてもおもしろき事也、さりながら女どもに聞せなば、一休さ  
まをつめり申すべしとわらひて歸りける。

○和尚幼稚きときより、常の人にはかわり給ひ、利根發明なりけるとかや、師の坊を  
ば養叟和尚と申しける、こびたる旦那ありて、常にきたりて師の坊に參學などし侍りて  
は、一休の發明なるを感じ、折々はたはむれを云ひて問答などしけり、或ときかの旦那皮  
袴を着て來りけるを、一休門外にてちらと見て、内へにしり入りへぎに書付立られ  
けるは、

一此等の内へかはのたぐひかたくきんせいなり若皮の物入るときは其身にかならずば  
ちあたるべし

と書付て置たり、かの旦那これを見て、皮のたぐへにばちあたるならば、此寺の太鼓は何

とし給ふぞと申ける、一休聞たまひ、さればよ、夜更三度つゝばちあたる間、其方へも太  
鼓のばちをあて申さむ、皮のはかきをさられるほどにとおどけられける、そのものうち  
かの旦那養叟和尚を齋によぶとて、一休も御供にと申し、かの返辭せばやとたくみける  
が、入口の門のまへに橋ある家なりければ、橋のつめに高札をかなにて太く書てたてけ  
る、

此はしをわたることかたくきんせいなり

と書付ける、養叟和尚齋のじぶんよしとて、一休をめでかの人の方へ御出あるに、橋  
の札を御覽じて、此はしわたらでは内へ入べき道なし、一休いかにと有ければ、いや此は  
しわたることかなにて仕たれば、まん中を御渡あれとて、真中を通り内に入りたまへ  
ば、かの者出合て禁制の札を見ながら、いかで橋をわたり給ふととめければ、いや我  
は端はわたらず真中をわたりけるぞと仰られければ、亭主も口をとちけるが、何かな不審



申さむとて、又いはく凡沙門の形といへば忍辱二體の衣を着、罪障さんげの袈裟を付けてこそ僧とは申へけれ、いかに小僧なりとて、俗衣の出たち心得がたく候と申せば、一休幼けれども、歌一首をよみて答へらる、

着てきたぞ本來空のくろ衣そでながうらで人こそしらね

とよみ給へば、旦那も養父も手をうち、口をあいて察さかれられりとなり、扱御寮を出しけるが、今一度不審せばやとおもひ、一休にはわざと魚類の膳をすへける、めづらしくやおぼしけむ、ひたもの喰ひ給ふ、ときに旦那のいへるは、人しれぬ衣召たる御僧の、したゝか魚をまぬることよとたはむれければ、一休聞たまひて、口は鎌倉海道なれば、貴きも行き、いやしききもすぐるとの給へり、こらへかれ、かゝる物もとほり候哉と刀をするりとぬきけるを、一休すこしもまほがす、敵か味方かと問ふ、敵なりといふ、しからば通す事ならず、いや見かたなりといへば、其まゝけへんくとのたまひて、くせもの

がとほるとて 只今俄に關がすほりたるはといひ給へば、旦那も和尚も此の小僧の口にはかたれまじとて言葉なく、舌の根をふるいてやみぬ。

○一休十二歳のとき、門前なる小溝にて中ぬき大根をあらひ居給ふ所へ、雲水の僧大徳寺に止宿を求めんがため來かゝりて、たはむれば小僧大根を洗ふかといひしに、一休やはに持たる中ぬきをふり上げて、なに出家をとらへて小僧といひ、小根を見て大根とはいかにといひさまの打てかゝり給へば、彼雲水の僧は、旬の答へもなさず、舌をまき足のふみ所をわすれ、應々みれさしてにげ行しとかや、

○十七歳の御とき引導し給ふ、或とき下賀茂迄を通りたまふ折ふし、途中に死人あり、一休たちより引導をさづけ給ふ、ときに或人見て悪かなり小僧、死人にむかつて何事をいひたりとも耳に入るべきや、いかんといふ、一休答へていはく、芭蕉無耳雷之音聞則自出す、此文のこゝろは夫はせをといふらのは、耳もなく目もなければ、芽を出さんとおも

ふときは、雷かみなりの音を聞きて、則すなはち芽をいたすと成なり、斯かくのごとくの非情ひじやう艸木そうもくのたぐひまで、因縁いんえん加合かがふのことばりあり、いはんや人間にんげんにおいてをや、彼是かれこれもつて同事どうじなりと返答へんたうしたまへば、このもの質しつもおもひけん、一言ことごとの答へには及およばず立たちさりけり。

○上京かみやうに宗むねや山右衛門やまゑもんといふ者あり、内々ないく一休いつきう和尚おしやうの答話たふわよきこと、古今ここん無雙ぶさうの由承うりたまはり、いつぞは紫野むらさきのへまのり何なににてもめづらしき事をうけたまはらん、左さなくば此方はうへ齋まをに申入まをへきと、かれく思おもふ折やうふし、和尚おしやう旦那だんなかたより歸かへりたまふに、途中ちちうにて行合ゆきあひさて一段いちだんの處ところにて御目おめにかゝり候まうらふものかな、序ついでながら明日あした少し志こころざしす日にさしあたり候まうらふ、御坊ごぼうさまへ御齋おときを進しんじ度たくまうらふ候まうらふ、兼かひ々く御寺おんじへ伺こゝろいたし申まをすべきとぞんじ候まうらふ處ところ、幸さい是はいにて御おめにかゝり候まうらふ、必かならず々くと申まをせば、和尚おしやう心得こころえ申まを候まうらふ、さりながら宿所しゆくじよはいかんといひたまふとき、此人このひと宿やどは室町むろまち通とほりそんじよ其所そのこなりといひてわかれぬ、一休いつきう心得こころえさて翌日よくじつ早さう天てんよりこしらへ、彼かのもの、宿やどを尋たづね行給ゆつたまふに、

此者このものもすこし心こころあるものにて、店みせにちひさき鉢なべをつりて置おきけり、小ちひさきなたを釣つりたるは、こなたといはん事ことなりと判はんじ、頓とがてうちに入いりたまふが、また座敷ざしきの口くちに犬いぬのかはを敷しきたり、和尚おしやうさしきへ通とほらるゝときに、亭主ていしゆ出合いであひさて今日けふは折やうふし路次ろぢあしく、御太義ごたいぎの御事ごんじなり、御足みあしよこれ候まうらふばん、洗足せんそくまぬらせんと申まをす、一休いつきういや、只今ただいまかはを越こえてまぬり候まうらふゆゑ、すこしも苦くるしからずと仰あやせらるゝに、亭主ていしゆ扱あつかこそ早はや一いつはいくわされたりと思おもひ、さて御膳ごぜんをこしらへ出いだす、和尚おしやうふたを取とりて見たまへば、何いづれにも小襟こなまを一いつはい入れたり、一休いつきうさあらぬ體ていにてぬたまふ處ところへ、亭主ていしゆ座敷ざしきへ出いづれば、一休いつきうさて今日けふの御志ごこころざしは、三七日みなのかにて候まうらふかと仰あやせらるゝに、亭主ていしゆいよいよ感心かんしんし、やがて和尚座おしやうざを立給たちたまはんとするとき、亭主ていしゆはなほもこゝろを引ひかんとて、錢百文ぜにもんをとし出いだし、これは今日けふの布施ふせにまぬらすなり、是これへよらずして居ゐながら御請おんけいあれと申まをすに、一休いつきうきくもあへず心得こころえ申まを候まうらふ、是このまゝにてうけ申まをへし、さ候まうらふば、授まをすにこゝへ賜たまはり候まうらふへと申まをさるれば、亭主ていしゆいよいよ感かん

じ、扱々御坊さまは、きよおよびたるよりは答話僧にてまします、凡人はしばらく思案して申出すに、いまだ舌も引入ざるうちに、早くも斯く仰らるゝ、古今まれなる御坊さまやとかんじける。

○和尚さる川邊を通り給ふに、女のほだかに成て居けるを見給ひ、陰門をめざして三度禮拜してすぎたまふ、折ふしありあふ人々是を見て、さてもあの僧は狂氣か、出家の身とし、女のほだかになりたるを見て、三度ふし拜みてゆかるゝは、いかなる事やらん、いかにさまにも狂氣なるか、さもなくばかゝる事はし給ふまじ、めづらしき事なり、いざ近づいて子細をたづねん、げにもつともなりとて我もくゝとあとをしたひ、やがて追付そでを引き、御坊たい今女のほだかを見て、禮拜し給ふはいかなる困縁やらん聞まほしく候、但し佛道修行にかゝる事やましますか、いかにくゝとせめかけて問ひければ、一休もむのりにもおよび給はず。

女をば法の御くらといふぞ實にしやかも達磨もひよいくと生む

といひすてゝこそ通りたまふ、いかなる坊主やらんとふしぎなすに、しる人ありて、あれこそ一休なりといひし人あり、さてこそ彼僧ならではかやうのこといふべき人ありとも思へず、殊勝やな、世の中の坊主ならば、女の肌を見たらんに、心ちよげにねぢかへりく、目もはなたで行くやらん、かく禮拜なして通り給ふこそ有がたけれ、實にも女の胎内より、貴人高位も出給ひ、諸宗の高僧たちも出らるゝぞかしと、人みな尤とかんじける。

○下立賢堀川邊に道意と申すものあり、ある時一休を齋に申入れ、よろづはなし終て道意申されけるは、和尚さま某は娘一人もちて候が、さんぬる春の頃隣町へ縁に付申候が、やゝもすれば姑とからかひて歸へ候、親の身に候へばなんぼうめいはくにぞんじ、色々意見申てはかへし候こと度々におよび候、和尚さまは習

者にてましませば、おもしろき因縁ばなし候は、そと御物語きかせたまへし、よく覺おき、娘の諫言のため申聞せなば、すこしは聞入ことも侍らん、和尙さま、それがしとせ修行のみぎり、關東にての事なりしに、是は姑女にあしくあたる女ながら、たちまち其むくひ歴然なりし事あらく、かたり申さん、下野にての事なりしが、しうとめ久しく病みてなやみけるを、其子深くなげきて、醫師をよび療治しけれども、さらに驗なく日を送りけるが、あるときいしや申すやう、此病にはぶたのきもを煮てあたへなば、忽ち本腹あるべしといふ、さらばとてぶたのきもを求め是をよく煮て母にすゝめよとて、妻にわたしてその身は他行しける、この妻つれづれに姑をにくみ、老病の事なればせんなき薬ぐひなりと思ひける、折節その孫嫁、子をうみければ、其ゑなを密にとりてよく煮て姑に勧め、ぶたの肝はかくしておのが薬ぐひにぞなしたりける、程なく赤いろなる蛇、かのよめの口へ飛入りける、尾四五寸ほど口より外へ残りける、その嫁なき

さけびもだへぬる事いふばかりなし、まことに奇代ふしぎの事なれば、聞傳へて見物の人おほくあつまりけるが、老たる人の見るときは、尾をうごかさず、若きものゝ見けるときは、此蛇尾を右左り、上下へうごかし、女の顔をたゞきけるこそおそろしけれ、ある人釘ぬきを以て蛇をばさみ引ぬかんとしけれども、尾のかたき事黒かれの如くにて、奥へ入るといへどもすこしも口へは出ざりけり、かくのごとく悩む事三日にして、つひにはむなしく成にけり、これといふも、つれづれに姑にあしくあたりしむくひなり、姑の口へ出れまじき胎衣をすゝめ、我口へくふまじきぶたのきもをぬすみくひける惡逆によつて、かくのごとく口へはいるまじき蛇の飛入ける事天罰なり、かたちに影のしたがふごとく、おそろしき事なりけりとかたりたまへば、夫婦ともに手をうちて、あら恐ろしやとかんじける、道意また申しまゐるは、和尙さまそれがし此ごろあたらしき枕屏風をこしらへ申候、これはむすめが方へおくり申す心得にて候、何にても一筆あそばし下されと申すに、一

休やすき事なりとて筆とりよせ、

萬一人事一口むやく總而壁に耳岩に口 姑夫唯 主おやとあふぐのみ

我男げにたいせつにおもひなばなどしうとめの見にくかるべき

むれの火のもえたつときの有るならばこゝろの水をせきとめてけせ

とかやうに書てたひけり、此屏風今に傳り侍るとぞ。

○一休人を殺すものに證據をひき、得道させたまふ事あり、こゝに早川治郎太夫と申も

の、和尙のもとへ行申さるゝは、それ人をころすに其理もつともならば、千萬人を殺

ともくるしかるまじ、又殺すまじき其理なくば一人なりとて、惡逆無道なるべしと申し

けるとき、和尙仰られけるは、それ殺生はもろゝの罪の根本なり、たとひ生ずる物に

おいては、のみ風にてもころす事あるべからず、同はた殺さざるにはしかじ、男たへ

申すやう、少もくるしかるまじ或は主命と申し、又はほうばひとにもたのまれぬれば、是

非なく殺す事あり、かくあるときは、其たのみたるものこそとかならん、我はまつたくと

がばきまじと、利口氣に自慢して申す、和尙舌も引入させずして、汝あの柳に雪つも

りたり、枝やもげに見え 候、ほらひてたびてんやと仰られる、心得申し候とて柳

陰に立より、ふりおとしければ、かしら袖のうへに雪ちりかゝりしをうちばらふとき、和

尙の曰く汝いかなれば雪をばらひ給ふぞ、某がたのみ申せば、某にこそちりかゝるべき

事なるにやと仰らるれば、此人はたと行當り、それよりしてかされて殺生をやめけると

かや、是に依ておもへばいかに人をころす罪科なりといふとも、朝敵をほろぼし惡逆の

ものをたいちせん事は、いく千萬人なりとも苦しかるまじ、一人半童なりとも、殺す

べき道理なくば其責おもかるべし、されば人を殺すにおいては、もつとも害すべき道理な

れどもさむらひの餘にすぎこのみてきるべき事いかにあらん、然ればころすべき道理の内

にまたきるまじき道理あるべし、よくよくころすべし。

○爰に木屋平次郎と申すもの、きはめて長ちいさきいろくるき男あり、世間の人々これをあざけり笑ふ事よの常ならず、まして他所へ用事をとくのへに行ことあれば、指をさし子どもあまた付したうて道をも安からしめれば、おのづから歩をなすことならず、あるとき少し心ざす事ありて、一休和尚を請じ、我身の不具をつぶさにはなし、今更これなくぬかなしむ、一休仰らるゝは、生質たる身をちいさきとて何とすべき、左やうの事をかなしむものにあらず、其子細は金はちいさきものなれども、天下のたからとなる、針はちいさけれども衣服をぬふ寶となる、墨はくろければ、佛經祖祿聖經賢傳の書をしるして、天道の助となる、漆はくろければ、諸道具を助けたり、山は高しといへども貴からず、樹あるを以て傘しとす、霜雪は白けれども萬民これをいためり、たとへ肥ふとりたる人がいかほど瘦細りたくねがひたりとてかなふまじ、しかるを強てやせ細らんとくひものをとめ、かたちをちいめたらばとて、必ず氣血をへらし、病を生じ身命あやふ

かるべし、又瘦ほそりたる人何程こゑ太りたしとねがふともかなふまじ、肥太りたらんと飲食物たくさんにして、寝仰居のびをせば、必氣血をみだらし、食傷して、うらしげく牛の糞のかさねくなるを寝所にも包おき、後には俊寛僧部の鬼界がしまに住し、ありさまになりなば、命もすてにあやふかるべし、されば薬師如來の出世し、耆婆へんじやくの再來して薬をあたへ療治する共、いかでその験を得ん、しからば天の黒白背の長短も又かくの如し、爰におもしろき咄あり、さる所に才かく利はつの人あり、此男いかに背がちんちくりんにて、我身ながらもうらめしく、悔かなしむ事せつなり、餘りむれんさにつくぐと思案しけるに、我身こそかくありとも是非子どもにおいて、背の高き子を持つべし、さあらばまづ女房をむかへんに好あり、みめかたちには少しも望なし、只背の高き女をと尋るに、其背六尺餘にて、無雙の悪女あり、いそぎこれをむかへとり、夜晝かせぎけるほどに、程なく此女懷妊して九月をも過て、程なく産月ひもとくとく、よ

ろこび取あげて見れば娘なり、あつばれ男子にてあれかしと願ふ處に女なり、捨べきにもあらで育てけり、かくて此度は是非に男をまふけんくとかせぐ程に、うむ程についけさまに女子ばかり五人までうめり、彼男あら腹立や無念やといかりおめきけれども甲斐もなく、つぶさうの捨やふのとどやけ共、流石さうもならず、養育するほどに、成人するにしたがひ、何れも母親に似て色黒く背高く鼻筋ひしげうつむきにころぶには、一ツの徳には鼻の用心いらす、まなこ細くちひさき驚などの如にて、六尺ゆたかの女なり、まことに嫁入ならざれば、何ともてあつかひたる有さまなり、何事もかやうの事を聞くからに、諸事悔かなしむ事あらじと、言葉に花を咲せて語りてこそ歸りける。

○さる人一休の草庵へ尋行き、和尚にあひ奉りて申すやう、我等文盲ふつゝかものに候へば、耳がたき事は聞てもきかざるがごとし、何にてもおもしろき事候はゞ御はなしたまはれと申すときに、和尚されば唐土に虎きつねをまつめ、すでに喰はんとするに、

此狐の申すやうは、いかに虎よくきけ、必ずわれをくらふ事なけれ、今日よりしてそれがしをもろくの獸の大將に天道より仰付けられたる、さる程に汝我をしてよくするならば、天命にそむき忽ち汝が命めつすべし、若此事いつはりと思ふならば、我あとにつきて供をして参るべし、もろくの獸われを見てかならず恐れおのゝきにげかくるべしといふ、虎ふしぎにおもひ、さらばとて此狐のあとに立てゆく、もろくのけだものども案のごとく、みならりぐにげかくれ、おそれおのゝきひねふす、其子細は此きつねを恐れにぐるにあらず、あとなる虎を見てもろくのけだものはにげかくれおのゝくなれ、されども虎はまことにかの狐に恐れをなすと思ひ、天命をおもんじ却つて守護をなしけるとかや、そも大きな化やうかな、されば世間の家々にかの狐こそ多ければ、化され給ふな、御用心く。

○爰に能勢小作といへる、わるがしこきものあり、時しも極月廿七八日ころの時の事なり

しが、借銭にこひつめられ、せんかたなく方々をかけまほりさいかくしけるに、我も人もめん／＼に用ある折からなれば、我用に立つべしといふものなし、しかるに粟田口邊に彦八と申して富さかえの町人あり、かれが處へ尋行き、からばやとおもひ、粟田口へといそぎける、此彦八と申すものいかなる前業のつたなきにや、朝夕の飲食とては黒米飯にみづしるにてくふほどの者なり、かれにかくといひけるが、くだんの如くつましきものなれば、我身にさへをしみ、朝夕食をだにも、ときに取りては一度もかんに入する程のものなるゆゑ、まして親類すら猶もつて他の用に立つべき事おもひもよらず、かつて取合申されば、是非なくして歸るとて、

たからともならぬたからは彦八が持たるければ我身きん玉とよみすて、こそかへりけれ、さる人の申しけるは、一休和尚へ参りなげき給はゞ、さだめて和尚はじひふかくまします程に、すこじは給はらん事はよもあらじ、はや／＼参ら

れよ、殊に其方のよろしきときは、相應の用事を度々かなへられし事なれば、其方の事は和尚かげにても、念頃ねんころに仰おほせられ候まうらふまゝ、御おうけあひ給たまはぬ事あるまじ、とく／＼と申せば、此者このものげにもと同意どういして、やがて和尚へ参る、打うちふし和尚に出合いであひ給ふ、先四方まづよものはなし二ツ三ツ仕り、序ついでよきときを見合せ申まをしけるは、いかに和尚さま、それ人間の四百四病びやうの其中そのなかに貧苦ひんくほどつらき病やまひはなしと、古人こじんも是これをかなしめり、されば御僧ごそうも内々ないくそれがしが年月とこつき持病御存びやうごぞんじなり、ことに此頃このころしきりにさしおこり候まうらふ、さる醫者いしやに尋ね候まうらふはば、此煩このわづらひは我等われらが療治りょうちにはかなひがたし、かやうの病やまひはつひに醫書いしょにも見え申まをさす、然しかれども替かつて病やまひの名なを申まをされば、醫者いしやの見立みだてをしらざるに似にたり、多分たぶん此わづらひは借金しやくきんといふわづらひなり、いか成なる者まじへんじやくにかゝりたりとも治ちしがたかるべし、妙藥めうやく金銀きんぎん丸がんをもらひてのみ給たまはば、即時そくじに治ちすべしとなしへられけり、もし和尚おせうさまに御持ごもちあらば、一包ひとづつ御ほうしやにあづかり度たくさうらふ候まうらふと、なみだをばらくと流ながして



申せば、和尚おしやうきつひたまひて、さればこそ其病そのやまひは年に二度づゝおこる病やまひなり、まづ當月とうげつ今こころ、秋あきは七月ななつき中ちゆう旬じゆん何れも遠國えんこくまでもはやり、わづらひ申まをすなり、さもあらば愚僧ぐそうすこし持もちあはせたり、一包ひとづみまぬらせんとて、奥おくに入いたまひ銀かね一つみ取出とりだし、上書うはがきには資命ぢいめい補身丸ほしんぐわんとかきつけ、もし再發さいはつのときはしらぬなり、早さうく歸かへられよ。

○和尚おしやういまだ小僧こそうにておほせしとき、師しの御坊ごぼうにつかへて物ものよみ手てならひなどして居ゐ給たまふふし、夜よさむのころなれば、師しの坊ぼうはからざけをあつものとしてたゞひとりまぬりて、一休いっしゆうへは豆腐とうふやうの物ものばかりまぬらせられけるに、一休いっしゆうこれを見て凡おほそ出家しゅつげはなまぐさきものなくはざるよしうけ給たまはりしが、師し匠しやうはからざけをまぬるはくるしからず候さうらふか、さあらば我等われらもたへ申まをさんと申まをされける、師しの坊ぼうをかしくおぼしめされ、なんぢがやうなる小僧こそうの身みとして、なまぐさき物ものくふときはたちまち忽たちまち罰ばちあたるなりと仰おほせられければ、一休いっしゆう肩かたをひそめ、しばらく思案しあんして申まをさるゝは、同人間おなじにんげんの身みとして小僧こそうにのみばちあたむや、老僧らうそう

こそなまぐさき物ものまぬらば罰ばちあたるべけれど、あざわらひておほしければ、師し匠しやうのたまふは、いとけなき身みとして心こころだけたるいふやうかな、さればよ、老僧らうそうとて御おゆるしはなければ、我等われらは引導いんどうをして喰くほどにといひたまへば、其その引導いんどうはいかなることやあらん、少すこしうけたまはりたしと申まをされければ、扱さてわこせはこしやくなる人ひとや、いで引導いんどうして聞きかさんとて一盃いっぱいもりたるからざけなまぐさけて、箸はしおつとりのべてのたまはく、

汝元なんぢげん來らい枯木かれきのごとく、助たすけんとすれども坐いて二度ふたたび水中すいぢゆうにあそぶことあたはず、愚僧ぐそうに服ふくされて佛果ぶつぐわいを得えよ。喝かつ

とのたまひて、ひたものまぬりける、一休いっしゆうつくづくと聞きて、又また肩かたをひそめてしあんして、夜よの明あるを侍まちかれで、いそぎ魚うをの柵たなへはしり行き、さも大きおほくしたゝかなる鯉こひを一いっ鱈ごん買かい取とりきたりて、味噌汁みそじゆをこしらへ、かの鯉こひをひんにぎり、ながたなおつとりのべて、細首ほそくびちうにうち落おさんとせられける處ところへ、師しの坊ぼうたち出御いでごらんじて、これはさたのがざりなり、

昨夜もしめし教しごとくに、いとけなき小僧の身として、からさげだにも無用といひしに  
 その生てはたらく物を害して食はん事、以の外の事なりといましめ給ふ、一休もさはがす  
 我等も引導おぼしますとて、去らぬ體におぼしけるが、師の坊もあきれはて、大にわらひ  
 て、それはいかなる引導ぞや、もし尤しからばゆるすべし、しからずはのがすまじとて  
 かの御家の一棒をこわきにかい込み、引導いかにとせめられける、一休すこしもさはがす  
 いで引導仕らんとて左に鯉の細くびひんにぎり右にはかたなをしやにかまへてはいはく、  
 汝元來なま木の如し、助んとすればにげんとす、生て水中にあそばんよりは、如じ  
 愚僧が蕪となれ、眼  
 とて、鯉の細くび水もたまらずうち落し、ぐづぐづと流してした、か喰ひて、空うそ吹いて  
 おはせしかば、師の坊これをみて、さてもよき引導ぶりて手がはりなる心得かな、昨夜わ  
 れらが引導にては、いらさげは佛果を得ずして蕪と成りぬべし、汝が鯉はくそとはならで

佛果を得たり、さてく活機なる人や、禪僧なるぞや小僧どのとて、彼の一棒をからりと  
 して舌をふるひての給ひけるは、三年になる鼠を今年生れの猫が取とばかりる事をや、  
 とかくに汝はたいものにはあらじと感したまひけるが、案のごとく程なく天下老和尚と  
 みづからのたまふほどの活祖師にて、一休とて名を千歳に傳へ給ひて、田をかへす筆、の  
 りをする尼までも物語の種と人にいひもてはやされ給ふ事、誠に凡人にてはましまさざ  
 りける。

○一休和尚は蛸が御好物にて、或日つれづれに蛸を買につかはされけるに、折ふし店に  
 きてなかりける、彼つかひの者、かしくと尋ねぬたる故、おそかりしかば待わび給ふ  
 まし、

此たびはいそぐといふにながそでのたこの入道みちのおそさま  
 とぞしける處へ、蛸四五はい買もて來りければ、一休よろこびて、此たこむざくと食ん

もむざんの事なり、引導の煩なくしてはとて、

千手観音蛸手多。斬懸ニ袖酢ニ拜ニ如何一 佐州一味天然別。他禁戒任ニ老釋迦一

やれ引導はすみけるぞ、火葬にすべきか土葬にせんか、いやいや水葬にせよとて、手とり足とり手にく沐浴させて、袖酢をかけてひた喰にくひたまひ、去る檀方へ行て酒などまぬりけるが、あまりに多く蛸をまぬりける故、吐却なされけるが、みな蛸なり、旦那衆これを見て大に驚き申しければ、一休和尚は佛のやうに思ひしに、蛸をまぬりけるかな、さてくなまぐさ坊主や、これはくにあざけり笑ひければ、一休すこしもさわがすいなとよ我は蛸をたべれとも口より出ればせんかたなし、さりながら我蛸をくひしにはあちすとあらそひ給へば、口より吐出したるもの食ぬとあらそひ給ふかや、いよくきこえぬ御坊やおどりがりて笑ひければ、いでくわこせ逢、たとへ口より蛸出たりとも喰はぬ證據を見せんとて、皆々引つれて百萬遍に行て、善導法然の畫像を見せて、あ

れ見たまへ人々、善導あみだなくひしことはなけれども、口より三尊を出し給へり、善導大師さへくはざる物の口より出ることを制しがたし、まして愚僧くはざる蛸の出るとさらせんにたなしと仰られければ、皆人よこ手をうつて、さても頓作なる御返答やと口を閉て歸りける。

○扱一 休和尚は生佛にて、魚を食して水中へ吐出し給へば、その魚たちまち元のごとく生かへると、洛中に此事を専ら申傳ふと或人來りてかたりければ、一休をかしく思して洛中の辻々に高札をこそあげられたり、其詞、

來る何日の日さがり、松のほとり紫野において、魚を喰て其まゝもとの魚にはき出し、水中におどらさしむる事なり、御望のかたぐ御見物に御出待たてまつる、

大夫は天下老和尚一休大禪師

とぞ書かれける、洛中の諸人は是を見て、うそか誠か、とばかり人々いひけれど實しか

らす思ひしに、扱はうたがふ處なし、正しく御自筆にて高札を立らるゝ上は、しるしなく  
 てはかなふまじ、いざや人々見物して末代のかたり句にせよやとて、しるも知らぬも見  
 しも見ざるも、其日の來るを待かれて、門前に市をなし、我見もらさじとこるぶまで、の  
 び上りて、洛中貴賤くんじゆせり、其刻にもなりしかば、大盥にて、水を入れ、なるは  
 ど魚をよく料理して、かのたらいのほとりに御膳をすへける、一休出たまひて、彼魚を  
 ひた食に食たまひて、扱はんぎりにむかひて、喝々とのたまひて、暫く目をふさぎなど  
 し給へば、見物のぐんしゆは御顔をまもりぬて、生たる魚をばき出し給ふは、今やくと  
 待居たるに、しばらくありてのたまひけるは、おのゝはるゝの御出なるほどに、いつ  
 よりも一きは手ぎはに吐出して見せ申さんとて、種々思案するに中々はかれそうにもなく  
 せひにおよばず羨になりとひりて捨申さん、はや各々御歸りあれとて内へ入給ふ、上下  
 萬人きもなつぶし、さてもおどけたる御坊と興をさまして歸りけるが、其中に心あるもの

いひけるは、只今参りたる魚は皆生て淵におどるなり、有がたき一言かな、誠に正法  
 にきどくなしと、そうけ給はりしに、人の餘りにいはんとて、ふしぎなる事をいひてほめ  
 んが爲に返てそしるなれば、其理をしめし給ふ、有がたしくと感じければ、昔人は是に  
 氣がつきて合點したるも、合點せぬもうなづきあへりて歸へりしとなり。

○或人和尙へ参る、折ふし和尙たいめんあり、諸事のはなしをばりて後、此男申すやう、  
 和尙さまわたくしは此ころ病中にて本服いたし、今日ういだち仕り、まづ和尙さまへ  
 御見舞申したり、さて和尙さまには御答話がよきと申す事、凡そ日本中に流布仕りて候、  
 あはれ何にても御はなし聞されたく、さりながら今程世間に高直なるものをもてあつかひ  
 候、先何々にて候や、一休きこしめし、されば高き物をいはんとならば、  
 ふじの山に、あさまのだけ、伯耆の大せん、高間のみれ、あたごさん、ひえいさん、東  
 寺の塔、天狗のはな、品こそかはれ、きだふの墨跡、大燈や、扱、貫之が歌書、

定家の色紙たんざく、扱あらかれの士のものには、まつほふりんのかたつき、丸壺なす  
 びかぶらや、はなのかぶらなし、鶴の一聲、せいしどう、さてわきさしや、太刀かたな  
 よしみつ正宗、國とし波、のひら行安、しらぬのうつばに、日でりの年の米の直と、ぬ  
 んすはなほも高きかねなり、かれうひんがのこゑたて、童のうたひこゑ、ばんしきらむ  
 けいかみむてう。

これまでなりといひおさめたまふところへ、旦那かたよりとて御衣を一衣、これは和尙  
 さまへ進上し参らするとして持来る、一休さのみうれしくもおぼしめさる氣にもなく、一  
 言の禮といふべき言もなく、たゞ狂歌をそへ給ふ、

から衣またからころも唐衣かへすくもからころもかな

かくいひて、是を返事にしておくり給ふとなり。

○又さる人一休和尙へたづね行き、さんとの望を申しければ、和尙き、給ひ、安き事

や其望ならば、先金剛の正體といふ物をあんど出し給へとおほせらる、この者聞て  
 取あへず、其こんがうの正體ならば、案ずるに及ばず、それはわらにて御座あるべし、仔  
 細はまづわらといふ物にてこんがうは作る物なれば、かくあるべきなりと申す、和尙をか  
 しきかぎりなくして、いやいやさやうの物にてはなし、金剛の正體と申すは音あつて目  
 にも見えず、手にもとられず火にもやけず、切てもきれず、水にもぬれず、色にもそまら  
 ず、かくては無ものかとおもへば、元來其ときにしたがつて、又あるものなりと、なし  
 へ給ふ、此ものきつて、こは六かしたづれものかな、こんがうならば、とかく葉ならで  
 は別に餘なるものにてつくる物あるまじ、さ候はゞぞんぞぬ事なりとて出けるが、門のほ  
 とりより又とつてかへし、御坊さま、たゞ今をしへ給ふこんがうの正體わかりました、  
 門前にてとくと合點いたし候ぞや、それは屁にて御座あるべし、仔細はまづ屁と申すも  
 のは音はありて手にも取られず、目にも見えず色にもそまらず、火にもやけず、切てもきれ

す、煮てもへ焼ても元來なきものかとおもへば、腹中はらうちゅうのときによりていくつもある物ものにて候まうらふ、とじまんがほにいへるはをかしかりし。

○或寺あるてらの門かどの破風はふかに、猿さるを三つ作り付けたり、一つは兩手りょうてを以て目めをふさぎ、一ついつのさるは兩手りょうてにて耳みみをふさぐ、今一つは口くちをふさぐ、あるとき三人さんにんづれにて、此門前このもんぜんにたちとまり是を見物これけんぶつす、折をりふし一休いっしゅうそこを通り給とほたまひて、立たちより是を見たまひ、うちうなづき笑わらひて過すざ行ゆきたまふ、三人さんにんのうち一人ひとりが申まをすやう、何いっれも三ツの猿さるのいはれを、さまざまなんじけれど終つひに合點あてんゆかず、只今ただいまこれにしばらくありて行たまふ出家しゅつがいの、うちうなづき通とほれしは、定さだめて合點あてんし給たまふならめ、いざ仔細しさいをたづねみると、追付おつて一休いっしゅうの袖そでをひかへ、御坊ごぼうに物ものたづね申まをさん、只今ただいま門前もんぜんにありつる猿さるを御ごらんありて、うちうなづき笑わらひたまふやうは、定さだめて御僧ごそうはよく御ごぞんじありつるものとぞんする、かやうに申まをす我われらは感痛かんちゆう文ぶん盲もうにして、何なんの辨わきまへもぞんぜざる者ものどもなり、仔細しさいをかたり聞きかせたまへや、宿やどへかへりは

なしにも仕つかまつらん、いかに〜と問とひにれば、一休いっしゅうさればこそ、其猿そのさるのいはれば、我等われらもくはしくばぞんぜず、去さりながら何いっれもれき〜の若わかき衆しゆうの尋たづねたまふに、しらぬと云いふもいかい、斯かくいひし事こともあるげに候まうらふ。

何事なにことも見みざるいはざるきかざるはたゞはとけにもまさるなりけり

とよみ聞きかせたまへば、三人さんにんの者ものども、さて〜尤もつともなる御歌ごうたのこころかな、是これはめんく〜の心得こころえになくてかなはざる歌うたなり、さて今いまの御坊ごぼうは佛神ぶつしんの化現りげんなるべしと、皆みな一同いっどうに感かんじたち歸かへりしが、一人いちにんの申まをすやう、いかにめんく〜此歌このうたの心こころをもつて、三人さんにんともに今日けふよりして見みざる聞きかざるいはざるの願ぐんをたつべし、皆みなもつともと同一どうじて、扱さてかたばらに立たちよりければ、折をりふ〜遠寺えんじの晚鐘かねかすりに聞きこえけるを、聞きかざるの願ぐんたてたる人ひと、何なんとなくおもひ出いでて、

今日けふの日ひもいのちの内うちに暮くれにけりあすもやきかん入相いりあひのかれ

とふるき歌をうそ吹ける處に、いはざるの願たてたる人のいひけるは、いかに其方聞ざるの願むなしくなりぬる事にあさましきよと、手を打ゆびをさして笑あざけるところへ、見ざるの願立たる人のいへるは、さて／＼かた／＼は何を聞き何をいうてともに大願をやぶり給ふや、おろかにあさましき事かなとがめらるゝ、三人の心をかし。

○又さる初心なる男あり、さい／＼一休和尚へ参り、萬うけたまはる、和尚此ものを見る度に、其方はたんきなる人なり、物事に随分かんにんせられよと仰られる、此もの答て申すやう、もつともかんにん仕候事、體身にこたへ過て覺え候、去ながら我何のかまひもなく、無異無事にまかりあり候とき、いたづらもの來りて、それがしが面にかすはきをほきかけ候をも拭てかんにん仕候と申す、和尚聞給ひて言語同断それほわるきかんにんの心得やうかな、かへす／＼も其かすはきをのこふべからず、もし其かすはきをのこひ候はゞ、ほきかけたる田夫もの、我等がかすはきをむさしきたなしとおもへば

こそのごひたれ、にくき仕かたなりと猶々いかり、かされていかなるめにかあはせすらんさるほどに其かすはきをきたなくとも、其まゝおきて干つけ置べし。それ何のとかもなき人の面へ、かすはきをほきかける馬鹿ものは、生有ものにあらず、ひとへに狂亂すいきやう、ばかたくらだ非人ともいふべし、それ蠅といふむしは、いかなる貴人高位の人のつむりへも、おそれずあがり。夫婦のかたらし事もなし、あるひは歳をひりかくる、されば其蠅はもとより虫なりとおもへば腹も立ず、眞そのことくはい同前のものに對するときは、人倫のなすさはふにあらず、堪忍のこゝろえ差ほどにもなくてはいかゞあらん。

○北野邊にて十二三ばかりの童女の、菜つみて居けるが俄にひれふし死に入ける處へ一休通りかゝり立より見たまへば、四五尺ばかりの蛇はひかゝりけるを、和尚杖にてほらひのけ童女を引おこし、仔細をとひ給へば、只今こゝに若ものゝ來りて、そこにふせ／＼と仰られて、其後むたいに引ふせられ候が、何とやらん頭のまはりをおそれおどろきたる

ふせいにて、左ながらりよりも付ずして、其まゝにげ去たまふなりと語る、一休ふしぎにおぼしめされしが、髪かみの元結もとゆひをとかせて見給へば、尊稱せんしやう陀羅尼たらにの書かきたるを引ひきさき元ゆひにしたりける、是におそれて近づかざるぞふしぎなれと、和尙わしやうあるとき旦那方だんながたにて此事このことをばなしたまふ、去私さるほどこのせんしやうに此尊稱せんしやうだらにの功德くどくにより、あまの命いのちをたすかりたり、扱さしこそまもりといふものはもつべき事なり。

○扱さし爰こゝに一休いっけい一大事いっだいじ因縁いんえんの御工夫ごくふうなされしとき、諸旦那しよだんなあるひは御友達ごんともだち家しやうまい毎日まいにちとむらひ來きましてさまたげとなりければ、かしましく思おぼしめしひて御心地ごんこちあしとて、一ふ人ひとに出會いであいたまはず、皆人みなひとこゝろもとなく、折々をり／＼に御見舞ごみまひ申まを付はれば、御長髪ごちやうはつばう／＼とし給たまひて、何とも色いろみへず御慥ごんじやうとのみ仰おほせられける、旦那だんなを先まきとして御智音衆ごちおんしゆもよりいひ、是は氣遣きづかはしき事ことなりと、ときの名醫めいいいを入いれかへ／＼掛かけまいらせ、御ごんいたはりはいかにと聞きけば醫師いしや申まをされけるは、御脈ごみやくはいかによし、不審ふしんなる御煩ごんづらひとどれ／＼も申まをしける、あるとき

旦那だんな智音衆ちおんしゆ衆しゆ寄集よりあつまり、此御このごんなやみの様子やうすはいかさまにも、しつ熱ねつの病やまいとは見みへず、若わかき御僧ごそうの事ことなれば、もしや戀こひなどをなされて、かく思おもひわづらひ給たまふ事こともやあらんと口くち々に申まをされけるが、いや／＼人多ひとおほしく知しりたりと思おもふばあかし給たまはぬ事こともや侍はべらん、ひそうによき申まをの知音ちおんのみ貳に三人さんにん見舞みまひて、そとうかう侍はべらば、誰たれと名なさしあるべし、しからば誰人たれひとにてもあれ、此者このものどもがか／＼りなば、などが、御本意ごほんいをとげられぬ事ことはあるべからずと、頼母たのいしく言合いひあせて、ひそかに三人さんにん参まゐりたり、一休いっけい出いあひ四方山よちやまの物ものがたりすみて、一人いちにん申まをし出いけるは、此間このあひださま／＼の御療治ごれうぢにても御脈ごみやくは常じやうにかはらずと醫師いしをの／＼申まをすなり、平生つねにはちがひて何なにとて心こゝろ深ふかくわたらせ給たまふぞや、定さだめて戀こひをなさるゝと見みつけ侍はべるはひが目めか、有ありのまゝに仰おほせられよ、かなへて参まゐらせんとうちつけて申まをしける、一休いっけいかにもうれしげなる御面ごんかほばせにて、此上このうへは何なにをかかくすべき、此日このひ頃ころ戀こひわびて、さてかくの如ごとくやつれば、候さうらふなり、能よくこそ仰おほせ出いされたり、何なにとやらん我等われらには似合にあひぬ事ことにて侍はべれ



ども、各々は日頃のよしみなればひとへに沙汰なくかなへてたべ、去ながら示ならなくに  
 心見だれてはづかしや、それと名をば面上にはのべがたし、一筆かきて参らすべし、門  
 外へ出給ひておのくひらき御覽じて、いそぎかなへたまはらば、我々が命はながらへ  
 て、おのく方へは其かわり、能き道教へ申さんとて、おくの問へすと入り、一筆さら  
 りと書て引むすび、彼三人に渡し給ふ、三人よろこび、御心安く思しめせとて、門外  
 へはしり出て、扱こそ申さぬ事はとて、いそぎ其名をしらまほしくて、彼文ひらきて見れ  
 ば歌に、

本来の面目坊がたちすがたひと目見しより戀とこそなれ

我のみか釋迦も達摩もあらかんもこの君ゆゑに身をやつしけり

とかくれだり、三人のものども案に相違して、横手を打て日頃の御心もしらぬ身が、あり  
 めわざを思ひけるこそをかしけれ、今にはじめぬおどけにたばかされけるこそおろかなれ

誠に有がたき御坊かな、盡にうつし木にきざめるは多けれど、わたもちの釈迦如來なり  
 と、おがまぬ人はなかりけり。

○嵯峨に丁意坊といふ道心者ありける、いつの頃よりか首に蛇まとぬ付てはなれず、  
 さまのの事をなして漸々とはなせば、又夜の間に元のごとくにまとひ付き、ことにひじ  
 り切たる坊主なれば、日々にさがより京へ出て鉢こひけるに、彼蛇をかくさんがため、  
 ゆたんを首にかけて見えざるやうにして出けり、此事ひとへに難義に思ひ、其頃二尊院に  
 一休おほしけるに、かの坊主たづね行き、わが身のやうすなくはしくかたりければ、一休  
 きく給ひ、いかさまそれは女のしうじやく成べし、汝是より高野山へ上り候へ、さもな  
 くば退く事あらじと教へ給ふ、よろこびて高野山へ登りしに不動坂より、彼蛇うせてなし  
 了意いよく有がたき事に思ひ、高野山に二三年も住みしが、今は早地の事も打わすれ、  
 過しふる里のこひしさに、又さがへかへりしが、二三日は何の仔細もなかりしに、又夜の

間に彼の蛇まとい付きけり、其まゝ高野山に住ならば綱めでたかるべきに、何ぞや古里へかへり、二度難義にあふ事定業の程こそかなしけれ、今に坊主のすみしあ蛇寺とぞみな申しあへり。

卷之二

○一休旦那衆三三人同心して東山邊へ遊参に出たまふ、ときしも春の中ばにて、梢の花さい中にして、こゝかしこにゆさん多し、さる片はらに五六人うちより、手を打たきおどりあがりて大笑ひしてあそぶ、何事かおもしろかりけるとときく所に、尻をひりておもしろがる、旦那の内一人の申すやうあまり、酒にてうじ、何がそれほど尻がおもしろかるべし、一休申さるゝはいやおもしろきこそことばりなり、よく昔よりおもしろき事なればこそ、諷にもおもしろのはるべや、あらおもしろの春べやとうたふほどに、扱ば

はるのへはおもしろきも道理と申されま

○一休和尚、いまだ十二三歳のころ、師匠粘つばを一ツ持ちて、たゞ一人ある小僧にいさゝかも喰せずして、汝是れなかりにもくふべからず、もし是を子どもがくへば、忽ち死ぬる毒なりというて、ひたもの我ばかり食ひては取置るゝ、一休おもはるゝは哀れ毒にもせよ、死ぬるとも師の出られなばくふべしと思ひて持ちける處に、折ふし師匠用ありて出らるゝ、一休やがて探し出し、棚より取おろしさまに、打こぼし、あたまへもさる物にも付ける、目頃くひたしとおもひけるまゝに、先二三ばいくひて、あまつさへ、師匠のびぞうせらるゝ壺をうちおとしみじんになす、かくする處へ師かへらるゝに、一休しみくとながるゝ、師何事ぞと問るゝ、されば大事のあめつばを打ちわりたるなり、定めて御たづねのときは何と申へしとおもひ命いきてもよしなし、子どもが喰へば死ると仰られ候ほどに、一盃たへ候得とも死なす、二三盃たへつれども、死なれず、あたまにも

きものにも付て死んどぞんじ候得とも、すべてしなれ候はずとの給へば、師の坊も言の葉なくて、うちわらひくぞ入たまふ。

○あるとき白河邊に住みける桑門に、名譽なるかる日の人侍りけるが、一休のかる口なる事をきよおよびて、いつぞは行て難句をしかけ心見んと、常々心がけられけるが、不圖おもひ當たる趣向ありければ、さらば参りて御知人にもなり、扱一句して見んとはるぐと白河邊より紫野へとぞいそがれける。折ふし一休も庵にましく御知人となり、とかくするほどに内々たくみし一句の句作も出来ければ、彼僧申されけるは、うけ給り及し御かる日を何にても一句遊せかし、何とぞ付て見侍らんと申されければ、一休仰らるゝは、客發句に亭主應とこそ申せ、先其力あそばせとりしあかば、内々たくみ置し事なれば、さらば申して見んとてなん句をこそは出されけるが、此處は何と申す處ぞ、一休むらさき野と仰せられければ、

紫野丹波近

とせられければ。いまだ息を引入ぬにはや付られけるは、こなたはいつくの人ぞ、白川のものなりと答へければ、

白川黒谷隣

とあそばしければ、かの僧肝をつぶし、さしも六かしき章句なり、一句のうち二つの色字、二つの所の名、いかなるひやうたんの川ながれなるかる口も、少しはしぶうこふうとし給ふべしと思ひしに、貝とる海士ならで息もつきあへず付たまふ、かゝる名對ある上は、はぢやこはしとて空うそぶきて尻をからげてにげられけるとなり。

○又畫書の土佐守に内々掛物の畫を一ぶくたのみたる人ありしが、終にかきてつかはさず、彼人心せきて直に土佐守が宿へ行て申しければ、折ふし太鼓うち殿にはあらねど、ひる寝してこそ居けれ、彼仁つねくしたしくつたる中なり、内々たのみおきし事なれば

引づり起しか、されける、土佐守れぶりにたへず、たとひ一夜ねずとなりとも、晩にのみき  
 て参らせんとておきす、しかれ共又晩といは、明日か川の淵瀬と心がはりもやせん世中  
 なり、ひらにといふに是非なく筆を取、ぐるくとまほし、はけおつとりさつと書きて、  
 これくるとてふせりける、望み足りぬとその書なとつてかへり、ひねくりまはしてよく  
 くみれ共、さらに何ともしれず、水をかきて其中に一筆ぐるくとしたるものあり、さ  
 らに見分られず、餘り合點ゆかされば土佐守方へ持行く、何なるぞと問へども我等もしら  
 ずといふ、かゝる書をもつて何かせん、引やぶらんとおもへども、三國一出来たり、と  
 やせん角やせんと思ひけるが、いやく一休和尚に賛をこひて掛物とせんするぞと、い  
 そぎ大徳寺へはしり行き、和尚に申きけるは、此の書は土佐守に書し候が、さらに此水  
 中の物しれず、いかが御覽あると申しければ、されば何とも見へれども、賛のぞみなら  
 ばしてまぬらせんと仰られければ、忝なしとて賛をかふ、一休筆とりて

水中に物あり、その一物をとへば、書し書工もしらす、持ぬしもしらす、賛する我は  
 猶しらす、

と遊しければ、これを見る人きく人毎に、さても真すぐなる御心ばせや、無二なし、三國  
 一の掛物なるべしといひしが、今におぬて、其いけもの、たゞ人の手にあらずとや、  
 ○或寺に五百羅漢を作りて堂供養しければ、貴賤群集の見物ありけり、法事やみてのち、  
 其寺の僧らかんのまへに香花など取りぬけるに、こびたる世俗三三人、羅かんを見物し居  
 たるが、餘の人は退けども、此仁一人つくくとながめぬて、傍の僧に問ひけるは、此五  
 百羅漢に一々名をこそおはすらん御僧はさだめて御ぞんじあらん、承りたしと申ければ、  
 此僧はたゞ三尊の外は一佛も名をしらすりければ、何ともいはずして、方丈のかたへ  
 にげ入りける、折ふし一休行合せ居給ひて、何事なるぞと問ひ給へば、しかくのよし  
 申されける、一休のたまひけるは、いらざる凡俗のどがめだてや、かゝて藝にもならざる

事、たれかは覺侍んや、されど望ならば云ひて聞すべしとて、羅漢堂へいざなひ、さらば一々とひ給へ、真中なるは釋迦牟尼、ひだりなるは迦葉、右なるは阿難、さて次はとへば、南無さんど、其次はとへば、すきやとや、其次はとへば、おらこちだと一々れんげ呪の文にて答へ給へば、五百らかんはさて置き、百子羅漢をとへ共、何かは答へ給はざらん、だんくと聞けば、さらくと答へたまひ凡百ばかりもどひしが、此俗人さて和尚にはよき御覺候かなと申しければ、和尚打わらひさもなく候、いとけなきより一巻ばかりは中にて覺えて候へと仰られければ、此俗人心附恥入てかへりけるとなりされば、時にとつて頓作なる御心入ときく人感じけるとかや、物ごと問ひて用になす覺えても用になすぬ事をばいはざるにまざるめでたし、よしなき事を問ひてあやつられけるぞ、すべて羅かんのみにもあるべからず。

○去るなまこびたる男、一休のいとへ雀を二羽もちて、いかに御坊、このすめめは生か

死か如何ん、和尚無と答へたまふ、此ものいとまもこはずさりけり、此心は生なりといは殺すべし又死なりといは放ちやらむとの事かしらす、一休其後かれが方へ行給ひてはいる口のしきぬをふみまたげて、亭主くとよばれけるとき、亭主出ければ、一休此敷居を出るか入るかといひたまへば、亭主なにの返答もいせず、唯だ手を打て笑ひしとなり。

○又或とき一休かつら川をわたり給ふに、何とかし給ひけん川中にて倒れ流れたまふに、折ふし川ばたには人多くあつまり居て、これはくといひながら、たれひとりあげんといふものもなかりしかば、一町ばかり流れて幸ひ川杭にかゝり、やうくにてあがり給ひしかば、人々よりつどひ、さてく御坊は運つよき人かな、何としてあがられけるやといひしかば、一休打わらひてされば、我川へはまりたればこそ、あがりたり、上りたればこそ生たれ、さまで珍らしき事にはあらざりけりと申さるれば、人々聞て、さてく口か

しこき坊主かなとどつと笑ひて打過ぎぬ。

○後に山里に或ものつま、さる男とひそかにかたらひ、互ひに情ふかく、ちぎりあさからざりけり、或夜のむつ言に、いつがいつまで斯はしのびなんや、いかにもしておつとを殺して思ふまゝに契りなんやと、互にうちとけて談合し、たくみ出して、或夜男に酒をしひて、ゑひ臥さしめ、夜ふけ人しづまりて後、まをこと二人して、なとこの頭針をうちてころし、さて家に火をかけ、焼死たる體にし、うたがふ人もなきやうにもてなし死たるかばねにとりつき聲をばかりになきさけびけり、折ふし一休通り合せ、此女のなき聲を聞き、不思議のおもひをなしたまひて、あたりちかき人になつれ給へば、しかどとかつたる、和尙き給ひて、此女のなき聲は、おそれたるてうしにて、更になしみの聲にはあらず、ふしぎなりといひて通り給ふ、あとにて今の修行じやは、人間にてはあるまじ、むかしよりいまにいたるまで、けんどん放逸の在處へは、弘法大師のきたり給

ふと言ひつたへり、定めて大師さまなりとおぼえたり、聲ばかりきつて、それぞとあがし給ふは、奇代ふしぎの御僧かなとて見な／＼かんじけるとなり。

○世に一休和尙は天下の活僧なりしとて、諸宗ともにおしなべて奪びけるなれば、何れの上人長老もあがめ給はずといふ事なし、あるとき黒谷へ御参りありしに、寺中の人々一休を見奉り申しけるは、今の世に活僧と人ごとに言るはこの禪師なり、よき折からなればいざや當寺に侍る善導法然の畫像に賛をたのみ申し、かの念佛無間とてあざける、日蓮宗に見せて、禪宗の佛心宗だにかく此方の祖師は奪み給ふと、高言にせばや、かるき僧なれば定て賛し給ふべしと申しければ、おの／＼此儀を然かるべしと相談して、やがて一休を方丈へ請し申し、件の畫像を取出し、賛をたのみけるに、案の如く易き事なりとのたまふゆゑ、則現と畫像を御前に出しければ、さらりとひらき一覽ありて筆をとりたまひ、先善導大師に賛していはく

末法出現名善導。

則是彌陀化身也。

濁世末代導惡人。

一切衆生易往生。

法然上人には

傳聞法然活如來。

安座蓮華上品臺。

尼入道同愚痴輩。

一枚起請最奇哉。

と即時にあそばしければ、さて社とおのく火きによるこび侍りて、此兩佛に淨土宗としてかく贅をいたさば、家の事なれば手狭なりとて、又日蓮宗があざけるべきに、かゝるうれしき事こそなけれど、かの贅を日蓮宗に見せて、大きに威言をぞ申ける、其頃は殊に日蓮宗と淨土宗とは中あしくて、犬のいがむが如く、牛のつき合ふが如く、眼をいからしければ、日蓮宗の贅を見て、大きにはらを立て一休をそれみにくみける其中に一人申しけるは、いや〜一休の御心はものにかざりのなき直なる御事なり、いざ

や日蓮大聖人の像をかゝせ、贅をこひて見ん、あれほどの褒美はあるべしと申しければ尤しかるべしとて、いそぎふためきて盡をかゝせやがて、和尙の庵にもち参りて、贅をたのむよし申しければ、元よりかるき御僧なれば、やすき事とのたまひ、彼の盡をひらき御覽じけるに、此像はさても少くかきてうそ黄なる衣をさせけるよと笑ひたまへば、人々申しけるは、さん候いかにもけつかうに大きにかゝせたく存候へども、實は先日淨土宗法然が贅をじまん仕候ゆゑ、口をし候ひて、とるものも取堪ず先ちりけにかゝせて参り候、いそぎ贅してたべと申せば、心得たりとて、先の法然の贅を所々を直して

傳聞日蓮活如來。

香座則是妙法臺。

尼入道同愚痴輩。

一遍題目殊勝哉。

となされ、其奥に、

ぼろぼろ／＼小坊主まめの粉にぬりばらす

と遊ばされけるとかや、其頃また永觀堂の住持黒谷の齋のよしなきつて、よき寺のかうかつなりと浦山しく覺じめし、かほどかゝるき御僧なるに、何がな此方にも齋たのみ申さんとて、まづ一山の人々を呼よせ談合せられければ、其中に一人申しけるは、何と申すまでもあるまじ先宗の祖師なれば、當寺に傳る半金色の善導大師の畫像に齋をたのまれよと申せば、各々申すやう、げに／＼是は代々當寺の重物なれば、これに増したる物あるまじ、さらば其方便僧に成り給へとて、彼の半金色の善導大師の畫像を持せ、一休へまぬり一休に對面して申しけるは、黒谷の齋のよし承り、あまりにうら山しく候ひて、是まで参りて候、あはれ此方の善導にも齋をあそばしたへと申しければ、それこそ安き御用とて、かの齋をひらき御覽あり、たちながら一筆さら／＼とかき給ひ、元の如くしたため、使僧にわたされければ、かたじけなしとぞ謹んでいたゞき、いそぎ永觀堂へ歸へり、しかじ

かのよしを申しければ、扱てもかゝるき御僧かな、本望とげたり、まづ一山をよびよせ齋拜見せばやとて、やがて人を廻しければ、各々よるこびはしり集る、さてかの畫像を方丈にかけ、拜見しければ、いかにも大文字小歌一首あり、其うたに、

くろからんころものすその黄になるは善導大師はこなたるらむ

とあそばしければ、みな人とつとわらひ、興をさます人もあり、感にたえたる人もありしが、今よまで傳へて、天下に一幅の名物となりけるとかや。

○正月元日より三日は元三といひて、歳のはじめ月のはじめ日のはじめなれば、一天四海の人々のかしこきも、愚なるも、愁あるも、愁なきも、貴もいやしきも、祝ひよるこばざるはなく、屠蘇白散にはどぶろこなりとも鬚につけ、御鏡すはるとて、尻もちなりともつきて、それ／＼にいはいませるありさまは、誠に昨日にかはりたるにはあらねども、空のけしきものどやかに霞みわたり、大路のさまも、松立わたし、家には長き代のためしと



て、しめ繩ひきめぐらし、昨日の夜半過るまでは、人の門打たきて何事にかあらんこと  
 事しく、足を空にまどひたるも、たゞ一夜あけぬれば引かへ心もゆるくと、又晦日の來  
 るべき心もなし、野邊の小松に千代萬世をいはひそめ、いつ死ぬべきものとはなしに萬の  
 事をいみおそれ、朝の露に名利をむさぼり、夕の陽に子孫を愛し、蟻が茶うすなめぐるが  
 如く、同じ事をぐるりくと、五百七十年七まがりといはひて、世の秋風の心は露ちりほ  
 どもなき人心を、一休おかしく思しめし、語におろかなるかな、朝がほの日陰待まもさか  
 り久しき花とながめ、かげろふの青天に羽をふるひてたのしむ間もなき世中に、叢に箔ぬ  
 る正月ことば、たゞ時の間煙となりなんと打見るより、いで物見せん人々よと、墓原  
 へ行て露體をひるひ來り、竹の先につらぬきて、正月元日の早天に、洛中の家々の門  
 の口へ、この如しくと彼されかうべをさし出し、御用心くと非行たまふ、皆人のいま  
 はしくとて、門さしこめて居けるより、今に正月元日は門戸をさしけるなりといへり、

しかるに一休を見参らせて或人いへるは、御用心とは尤しこくなり、たとひいはひかざ  
 りても終にはみな人かくの如く、されども世の習にてかくいはひよるこぶ折に、其むつ  
 けなきしやれかうべをば、家々へ出さるゝ事は御ちがひならずやと申しければ、さればよ、  
 我もいはひて此されかうべを各に見するなり、目出たしといふこといかい心得けるぞや、  
 むか、天照大神岩戸をひらきたまひしより、非おこるといへども、此されかうべより外  
 に目出たき物はなしとてよめる、

にくげなき此されかうべあなかしこ目出たくかしくこれよりはなし  
 是れ目給へ人々目出たき穴のみのこりは、めでたしとこそいふなるぞ、皆人かくとはしる  
 らめど、きのふも逆しかならひに、けふをくらしてあすか川の、淵瀬つねならぬ世なりと  
 は、目に見えはしに風の音にも、おどろかぬ人々に、用心せよと思つて、たゞ人はだにな  
 らねば目出たき事は何もなしとのたまへば、路人これを見て、さても賢き事とておがまぬ

人はなかりけり。

○一休のもとに犬あり、或とき子五つうめり、其五つの子のうちひとつを親いぬにくみて、乳をも自由にのまさずして、いがみくひふせけり、下人ども此親犬をにくみうちけるが、ある夜和尚の夢につけていふ、我身は前生にて、かしはといひし遊女にて侍りしが、五人の夫を持つ候ひしが、四人は殊になさけある心ざしにて淺からず思ひしが、一人はいつはる心多くして、却て、我をわづらはしくせし事たびく侍りしかば、心にくく思ひながらうち過ぬ、今此五つの子はかの五人の夫なり、四つはむかしのなさけ深きが故に、乳をのましめていとをしく思ふに、一つは我をなやめし夫なれば、乳をさへのまさん事心にくく候ひて、かく當り候なりと、こまやかに前生の事をありくとかたりしと、一休旦那のうちへはなし給ふとなり。

○七條邊に有徳なる町人あり、さるとき佛事供養のため諸出家は申すに及ばず、乞食まで

もかくのごとく、慈悲をしけり、あるとき一休を申し入れ、しゆく不審ども尋ね、次手に問ていばく、何れをさして善とし、いづれをさして悪とするや、和尚こたへていばく、善悪かぎりなし、只善悪をしらんとならば、其よし悪をなすみなもとにあるべし、かれに行て尋ねよと答へたまへば、亭主尤と感じける、叔和尚たち給ふ折ふし雨降りければ亭主暫く待て雨を止給へと申せば、一休申されけるは、

ふらばふれ降すはふらすふらすともぬれて行へき袖ならばこそ、  
と云捨て出給ふ。

○加茂河ちかき邊に、五郎右衛門と申ものあり、かれがうちへいつの頃よりか犬一疋來しが、打どもさばず、ある日人を頼り二三里外へやりけるが、又歸りぬける此度ばとらへうち殺しすつるに、また同じやうなる犬來る、ときならず夢見あしければ、いかゞ心もとなくおもひ、一休へ参りくだんの事を一々はなしけるに、和尚のいばく、ゆめく其犬にあ

らく當り給ふな、それは其方が前生にてその犬のものを貸り、つひにかへさずして、今  
 人となりいぬとなりてこゝに來れり、全くわたくし事なれば、すつるともころしたとも、  
 業力の犬なれば、其家をはなるゝといふ事あるまじ、實々うしなひたくば、かれに米一二  
 斗ほどあてがひおきたまへ、喰盡たらんはかへるべし、左なくば何となすとも歸るまじ  
 とぞ教へ給ふ、さらばとて歸りて米をあたへ置きけるに、ある夜の夢に汝われをなやます  
 事たびくなり、打ともころすともうせまじ、されどもうれしくも今はあの佛和尚にを  
 しへられ、我なほこくむ事まんどくせり、しかれば汝ももの喰盡す事やうく一斗ばかり  
 あり、其間は我につらくあたる事なかれといふと思へば夢さめぬ 此者いよくおどろき、  
 さては和尚のなしへに少もちがばざりけりと、我々じひなほどこしけるに、彼がいひし如  
 く、一斗の米なくなりてのち、くだんの犬がきけすやうにうせにけりふしぎ成りし事なり。  
 ○或人一休に問うて曰く、人は死て體なくなりばつれ共、魂はといまると申すがさやうに

てもあるまじきは、たましひが死なすにあらば體はなくとも矢はり其まゝ居て、物がたり  
 などもしさふな事にてあるまじきか、何れふしぎなる事にて候、我等が存るには、佛に成  
 たるものは、たのしみにはこりて、爰の事をば打わすれ、來べき心は露もあるまじ、又地  
 ごくへ行けば鬼どもにかしやくせられ、隙少しもあるまじ、又かやうにてもなきものやら  
 ん、世中に亡靈とて死したるものゝ來て、さまざまの事をいひなどすると承る、何れ是  
 はいかなる事にて候や、和尚のいはく、さればわれも其儀はしらす候へども、若きとき  
 談義などをちと聞たるが、誠かうそかしらぬ、たましぬと云ふものが有つて、佛とも鬼と  
 も成るげに候、そのくせものがゑんま王とやらんの前にて、公事奉行の手にわたり、しや  
 ばにて作る罪をくる鐵が赤かれかはしられども、帳とやらんに付ておき、鬼に見せて先づ  
 是程の罪人なり、急ぎ阿賈せよといふに、色々の鬼どもが受とりて、さまざまのせめにあ  
 はするよし、しやばにて作るつみほどせむるといふ、さりながら毒藥へんじて藥となると

いふ事あれば、さのみつみの多きもあながちになげくべき事にはあらじと見えたり、かくいひしときは、

作りおく罪がしゆみほどあるならばゑんまの帳につけどころなし

とあるときは、鬼といふものも鈍なものなり、釋迦が一代の藏經はみな、人間をかためんがためなり、あらつらにくの釋迦どのや、いろくのををつきおきたまへり、それはと問へば、一字もいはぬといひ給へり、又さふかと思へばしゆつさんの語には、一佛淨土くれんけんほうかい、艸木國土悉皆成佛、さう木も佛になるともいひ、あちこちとひた物に身ぬけばかりいひちらし、人間は永代まよひの身にちかうしてありとおもへば、又うたふも舞も法の聲柳はみどり花はくれなひ、あなおもしろのはるのけしき。

しやかといふいたづらものが世にいで、多くの人をまよはするかな

○去さしきの天井に蛇をかきておける、其座敷にて酒を飲みけるに、盃の中に給のうつり

しをのみて、それより煩ひけり、ある人きたりてわづらひのやうなしかくの事にて、それよりかやうにわづらひ給ふよしをきけりと問ふに、いかにも其通りなりと答へければ、或人の申さるゝは、左やうの事あらば、何とも氣分あしくて、おきふしも是のみ心にかゝりてわづらひとも成るべし、さりながらさやうの事は一休和尚へ行て仔細を御たづねあらばしかるべしと申す、さらばとて参り、しかくの事にてかくなやみ申すなり、いかなる事にて候や、和尚の御しめしに預りたくぞんじ是まで参りて候と申しければ、一休開給ひてやがてしめしたまふ其語にいはく、

まぼろしを知る即敵はほうべんをなさず、一切のしよほふは皆是まぼろしなり、何なれば水中影像をじつなりとおもふや愚なり、早くなんちが自心をあきらめよ。

とて扇をもつてうくはたと打給ふ、まづ右のこゝろはまぼろしとしりなば、方便は有るまい、一切もろくのなすわざは、何事によらずみななくうなり、水のうちにうつるふか

げをみて、實のじやなりと心得やまひとする、それおろかなる心なり、早みづからの心を納めて見るときは實が無かあらはるべし、其心納るときはすなはち病本復すべしとしめし給へば、此ものやがて得通して、誠によくくしあんするに、天井の糍のあるといふ事思ひ當り、それよりして心すきとなり、やがて本ぶくしけり、何事も善惡の源をたづぬるときは、心の一つより生ると見へたり、扱こと三界唯一心といへり。

○伏見深草の里に森本善共衛といふものあり、其内につかゆる下女、もとより伏見の女にて、朝夕の飯の残りをむさしとて非人にも呉ずして、皆堀へ捨しに、其ことくく皆蛇となりてはひ歩行き、家内へ遣入りしかば、家内のもの人々おそれ、いか成る事やらんとひしめきける、其折ふし一休其近所へ來り居給ふよしなきく、やがて使をもつて請じ奉り、ことのよしをかたるに、和尚きこしめし、扱々それは笑止なる事かな、是は此身上のくづる、瑞相なり、それは全く蛇にてはあるまじ、皆飯の残りを捨し勢ひなるべし、其

蛇をのこらす釜へ入てたきて見るべし、必らず飯となるべしとのたまふ、さらばとて教にまかせ皆あつめて鍋に入れ、一休經呪をじゆし給ひたいせ給ひしに、成程きれひなる飯となる、此飯をあつて女の女に残らずくひ盡させよ、少も残るならば身代あやうなるべしと仰らるゝ、さらばとてかの女に喰せけるに、皆喰盡す事ならずして、又かくしてすつる、此下女あるとき己が在所へかへるに、道にて蛇にさゝれ死けり、日をへすしていくほどなくして天罰あたりせしはおそろしき事なり、さるほどに一つぶにて喰残したるあらば、決しておろそかにすべからずとて、和尚旦那方にて折々御物がたりあるを今こゝにしるす。

○爰にはなしあり、某とかやいへる人の奥方相果られけるに、今端のときの遺言に、われら此年まで、佛とも法ともしらすしてかく成りはつるなり、ことに女はつみふかきよし、後の世いと心もとなし、承ればむらさき野の休さまは、今の世の達摩やらんいふなる間、我等が引導をば和尚さまへたのみ奉りて得させよと、怨にいひおきしかば、夫子

なく、一休の草庵へ参りて、其由をかくと申上げれば、其年まで佛とも法とも知らずば大かたの事にてはうかみがたし、去ながら我等が一句をさづけすくふべきなり、水葬にせし間、鴨川へつれ行けとて、其まゝ座を立ち、打つれ川のはとりになりしかば、其死人を出せよとて、和尚かの死人の首に繩を付け、ひつかたげて川岸に立ちてのたまはく、河ふれなとめてあふ瀬のなみまくら、うき世の夢を見ならはしの、おどろかぬ身のは

かなさよ

とて川へさんぶとなげすて、はやかへり給ひける、夫や子どもおどろきて、御氣ももしやそいろなるか、この一句は江口をうたい給ふなり、かゝる事にてはうかびがたしとてかの死骸を引あげ、念頃におさめてある寺の上人におん導たのみければ、其宵よりの夫も子もさんぐにわななき夢見けるは、一休の御引導にてうかみしものを、よしなき上人の引導にて引もどされて申有の旅にまよふよ、又一休さまをたのみて、我をすくはせ

まほすば、夫子をも取こらし、三途の川を渡らんと、まごくと夢まぼろしに見えければ、是はとおどろき一休和尚へ参り、其山をかくくと申上げれば、我よく引導せしに、又異人をたのみしゆゑなりとて、ふたゝびかへり見給はねば、親子のものさまぐになげきしかば、扱も不便の事やとて、うづめし死がいを掘出させ、また加茂川へかたげ行き、川岸に立て一首

大水のさきにながるゝとちがらも身をすてゝこそうかぶせもあれ

とて、かばとしがひた川へ投捨て歸れければ、其夜親子の夢に、有難や御引導にて今こそ浮みけるぞとて、白雲にうらのりて西の空に行ければ、皆人ありがたくぞ覺へけるとなり  
 ○一休和尚山婆のうたひをつくり給ひしとき、ひえひ山に中よきひとおほしければ、談合にのぼりたまふは佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もありといたしける此次をいかゞはせんとのたまへば、かの人もさすがの人にて、さだめて柳は緑りとなされつ

らんと有ければ、一休さてもよく推し給ふものかな、柳は緑り花はくれなぬの色々、扱  
 人間に遊ぶ事と仕らんとしたまへば、さこそと云ひて興せられ、誠に同氣相ともむる  
 心ざし、いとほづかしく思はれける。さてよき次手なり、えい山の堂社を拜みめぐり給ひ  
 しに、山法師ども是を聞て、一休はかくれなき能書なり、何にても書てもらわんと、手  
 にく硯紙を持ちたりてたのみしかば、一休思しけるは、聖道のあて字とかや、定て文  
 盲なる法師どもならんと、何がな書て取らせんと、いかにもよみ難き一句、さらりと一  
 筆に書ちらして遣されければ、一山の僧よりあつまり、かゝる能書の名僧此山へ來る事  
 は後の世までも寶物となるべき語をかゝせ置へしとて、其中の老僧のいへるは、先より  
 各々かきてもらひけるは一字もよめず、又詰も餘りにみじかくて此山の寶とも成りがたし  
 いかにも大文字にて長く書てたべ、よみがたきは有りても詮なし、いかにもよみ安き事を  
 たのみ奉ると、一山ともに望みければ、一休紙筆は候かとのたまひければ、中々古へ

大師のあそばしける、七八尺の大筆あり、紙は何ほどなりともつき申すべしと申されけ  
 れば、さらば紙つがせ給へ、御望の通り長々と大文字を書き、よくよめるを仕るべし、い  
 そぎ紙をつがせ給へとありしかば、何ほどなりとも紙は御のぞみ次第とて、ひたもの長く  
 つぐほどに、えい山の金堂の前より、坂本の人家までながくしくも紙をつぎければ、  
 さらば筆をそめんとて墨たつぷりとふくませ、べたと紙へかき付て、一さんかけて不動坂  
 まで一筋にひかれてよめるか法師たちとのたまへば、いや何ともよめずといふ、又墨つぎ  
 て不動坂より坂本まで一筋にはしり引に、ひきくよめるかくとわめき給へば、一山  
 の法師たち贈をつぶし、いや何ともよめずといへば、是はいろほのあさきのくだりにある  
 しの字なりながくとかきてよめやすきは是なりとのたまへば、昔人興をさまし扱も聞  
 及しよりおどけびと哉と、一度にとつと笑ひて興じけるとなり、今の世までも其しの字ひ  
 えい山の寶物となりて有りけるとなり、山法師たちも望みし事なれば、いやともいはれぬ

御作意とみな感じけるとなり。

○さて御目のさむる御はなし申さふ、さる田舎人ばじめて京都一見のために登りけるに、或人のいひけるは、その方京都へ登らるゝならば、文を一通ことづけ申すべし、處も名もしかとぞんぜず、定めて都は通りノ明らかにしれ、小路々々は猶しれやすきよし承はる、何方にて尋ね候とも心やすくしるゝと申し候間、此文まゐらす口上にても申しさす、たしかに覚えられとつけ給へ、即名はさにし秋北春南五百の浪の立ちかへるとたづね給はれ、もし口上わするゝ事もあらば、此文を見せて尋ね給へとて渡しける、此男文盲なれば、いふより早く忘れ、さて都へ登り文をとり出し、人に見せけるに、讀もの有ともことほりのことほりしものなかりける、此男申すやう、さてくきのとくなる文をたのまれしものかな、是をといけずして歸りたら頼まれじかひもなし、ふがひなしといはれんもはづかし、たづねんとすれば埒明す、とやせんかくと案じわすらひ

しが、ある人申すやう、此文を千日千夜たづねらるゝとも、合點するものありがたかるべし、所詮この文をもち、是より北西にむらさき野といふ處に、一休和尚とて、名智者のまします、此僧に尋ね見給はむ、發明にましますほどに、定て教へ給はむ、早く参られよ、先都ひるしといへども、是を合點し沙汰申ものほかつて覚えすとかたるとき、此男さらば其紫野とやらんをしへ給れといふに、くわしくをしへける、やがてたづね行き此よし申しければ、和尚文の上がきを御覽じて、是は都の烏丸通り、どこそこにて、雨や千阿彌とたづね給へとくばしくをしへ給ふ、此人さてくかたじけなしたづねまゐるべし、しかし此義理をとてもの事にときくかし給へと申しければ、さればよまづさにしあき北はる南といふときはみなあめなり、五百の波の立かへりといふ時は五百をふたつ合するに千なり、さてなみとかくときは、雨やの千なみとならでは、讀くたらずとをしへ給ふ。○又和尚御在世のとき、下京松原通中ほどに制札あり、其札のこしらへやうは、板を



丸竹にはさみ、其竹のように錢を一ぱい入れ札の書やうは、

一餅食たがるものゝ事

一酒すひたがるものゝ事

一茶のみたがるものゝ事

右之通くひたくは買て食べし只世中は皆錢也已上

年號月日

かやうに書付けたてありしが、一休折ふし通り見給ひ、さてくめづらしき制札かな、いかさま是は子細あるべしと立よりうかいひ見給ふに、世の常のせいさつとはかはり、柱を竹にてこしらへたりしは、心ありげに見えたりとて、供のものに汝はこの札を取てかへるべし、我少し思ふ仔細あり、はやとくくと仰るゝ、男申すやうは、是は和尚さまとも覚えざる仰られ事かな、かりそめにも是は定めて公儀よりの制札ならん、しかるをむげに

奪ひとつて歸らば後のわざはひいかゝあらん、我等に於ては御めんあれと申しける、和尚きゝ給ひ、尤も汝がいふは断なれども、去ながら子細をしらねば道理なり、先此札をばさみたる竹の内に錢あるべし、此札をうばひ取るべしとの書付なり、早くとりてかへるべし、若たゝりあらばなんじが身にはとがはかくるまじ、此一休が心にまかせおくべし、かつは我あたまをまん丸めし身なれば、半錢も身には付けじ、みな汝が穴一せにとらせん、早とれくとすゝめたまへば、きやつもほしくや思ひけん、さもあらば取るべきとてはしりよつて押たほし、まづかなめを引てみて、あつばれ和尚は神通にてましますと、よるこびいさみ打かたげ、それ世の中にぬれ手ではなつかむとはかやうのことをいふらんとて、ちどり足にてむらさき野へぞかへりける、其後公儀に此札を一休うばひとり給ふよし、ほのかに聞めし、和尚へ使を立られけるに、和尚かしくまつて、やがて目代へ上り給ふ、奉行のいばく、いかに御坊何とて往還に立し札をうばひとられけるぞ、一休さ

れば由札のおもてを見候に、餅酒はしくば買てくふべし、よの中に錢があるほどにと  
 候、扱も御公儀は御じひにましますかなと、ありがたくぞんじ、殊に貧僧の身なれば  
 取てかへりて候と申さるゝ、奉行聞しめし、根本これは君より御じひのために國々に  
 たてられ、此書付の面をよく合點いたしたるものは、此札をうばうべしとのしたくなり、  
 よしく歸へり給へ、かしこまりて一休はむらさき野へぞかへり給ふ、奉行の曰くさても  
 くあの坊主ならではかやうのふだを引ぬくべきものは覺えず、たとへ心を知りてうばひ  
 たく思ふとも、とやかくと思案し、あるひは世間をはかり、即時にうばふべきものはま  
 れなるべきに、何のはかりもなく、うばひしはきたいの坊主かな、末の世に至るともか  
 よふの坊主は二人ともあらじと感給ひけり。

○ある人牧溪和尚の御筆なりし靈照女の繪を持ちけるが、一休和尚の活機なる事をした  
 ひ、讚をたのみ申すべしとて、やがて一休の艸庵へまぬり、しひくのよしたのみ申しけ

れば、それ社安き事なれ、望の齎して参らせむと、筆おつとりたまひ、さらく書き  
 のものに渡されければ、ありがたくいたたまき、さてもかるき御僧かなとよろこび内へかへ  
 り、友だちをもよびよせ、日ころの繪に一休の御齎なされ下されしとかたりければ、おの  
 く拜見申さんと、やがて床にかけて拜見しければ、かなまじりに。

汝が親の旅作り、馬祖にだまされて、寶を海にすつる、阿鹿居士の娘  
 と遊しければ、昔人よこ手をうち、さてもたはけたる御事かな、鹿居士も靈照女も唐土に  
 ての賢人なりとみな人いひ傳へしほどこそ、定て左様の心をもあそばさるべきかとおも  
 ひけるに、格別なる御事かな、まことに天下の活祖師にてましますとみな人感にたへける  
 となり。

○又た一休和尚は金を山に捨て、玉を淵になぐべくもあらん御けしきなれば、元より一鉢  
 のもふげより養てたくばへなかりけるに、大晦日の暮方になりければ、一僕申すやう明

日は元三なり、なにをか参らせん、八木は堂合もなく、青き銅は一錢もなしとなげきければ、一休きへ給ひて、それは歎く事にあらず、いざ出よとの給ひて、一棒をふりかたげ、山家街道へ出給へは、折ふしかばらけ貸通りければ、のがすまじと追かけたり、彼者おどろき一荷のかばらげを捨てにげければ、扱こそとてめしつれし僕にもたせて、是をしろなし、初春をむかへ給ふが、はからず大名はて、給ひけるとて、和尙を引導に請じければ、いや参るまじとのたまふ、何とて御出なきぞと申しければ、錢をくれなば行んどのたまふ、安き御事哉何ほどが御用なと申せば、一貫八文はしくといへり、安き事と申す奉りければ、其錢をもらひて、彼おひはぎしたまひしところへ行て、かばらけ籠に錢をくくりつけて、札をたてられけるは、先月の大晦日の夜の土器の代、一貫八文但一枚に付、一せんツ、帳けし給へと書つけて、傍に一句

貧のぬすみは偷盜戒にはあらず、いかんとなれば、戀の歌も邪姪戒にあらざる證據

あり、慈鎮和尙とて貴き聖のよめるなり、

わが戀はまつなしぐれにそめかれてまくづがはらにかせさばぐなり

と侍りけむとや、しかればとて邪姪戒をやぶりたる人々とはいひがたし、我も貧の

ぬすみなれば、偷盜戒をやぶりたるとはいはれざるなり。

と書れけるとかや、さて引導に出給ひて曰く、

人は六道の錢とて六文出す、汝は引導とて一貫八文出す、さしひきかんじより、

さては汝は人に一貫二文勝されり、十方に道あり行たい方へつツと行け、成仰ま

さにうたがひなし、是いかんとならば有麻地獄のさたも錢がする。

とのたまへば、みな人さてもおどけ人やとて感ぜぬ人はなかりける。

○或僧一休の活機なる事を聞きつたへ、いか程なる道徳があるとして、大徳寺へ行てたづ

ねければ、折ふし一休は門前の酒屋が方へゆき、酒にたべよい、前後もしらす臥し給ふと

ころへ、小僧きたり、只今唐僧とみや見えし、大和尚の、一休はと尋給ふ、はや御歸りあれと引おこしければ、一休御めいまだ覺めず、うかくとしておはせしに、酒屋の亭主出て、御醉眠御心よく侍りたるかと申しければ、さてもよき氣味やとて、一首よみて亭主に取らせけるは、

こく樂をいづくのほど、おもひしに杉はたてたる又六の門

とあそばしければ、亭主大によろこびけるとなり、かゝるところへ小僧またきたりて、はや御歸りあれ、先に申せし和尚の御侍かれと申せば、答らなく又うちかへしていびきかいてそりかへりて寐給ひしかば、小僧かへりて何程おこしてもおきあがり給はずと申せば、よし／＼その寢入て何とも思ひよらぬとき、引おこし一間かけたらば、志いよくこれ侍るべしと、彼唐僧一休の臥たるところへさし足して行き、枕元へどうと座し、何ともいはず引ぶりおこし、日もいまたあき給はぬに、一聲々を上げて曰く、

西來意の祖師の話に俗語ありや

と問へば、その息もつぎあえぬに、一休も大音にて、

汝が俗よ

とこたへてつきこかし給へば、彼大禪師も舌根をふるひて立れけるが、さても活祖師や、き／＼には十倍せり、汝が俗よとは即時に出まじき答語なりと、感氣肝にめいじて歸り給ひけるとなり。

○或とき新右衛門、誰の話を参じけるに一休しめしていはく、釋迦みるくは是他の奴はらくいへ、他はこれ阿誰とひ給へば、新右衛門歌をよみて答へけるは、

たそといふことはの下にあらはれてたそを誰よたそはたれなり

とよみければ一休これをかんで此一そくにて千七百則をゆるし給ふとなり。

○一休和尚老年に及び給ふ頃、親をもてる若きもの、心得べき事、諸經の中にこれあ

りとして示し給ふには、人の子として親に一日も孝行の心わするべきやうなくといへども  
就中孝行の心おこすべきは、

正月元日 五百日の孝行に向ふ 同十五日 百日にむかう

二月五日 三百日に向ふ 同晦日 百日に向ふ 三月三日 百十日に向ふ

三月十日 千日に向ふ 四月十五日 五十日に向ふ 五月五日 百日に向ふ

五月晦日 九十日に向ふ 六月七日 二百日に向ふ 六月十八日 廿五日に向ふ

七月十三日 五十日に向ふ 八月十六日 五十日に向ふ 九月 九日 二千日に向ふ

十月廿九日 千日に向ふ 十一月七日 五十日に向ふ 十二月晦日 四萬六千日に向ふ

毎月朔日千日に向ふ

右の日、親に孝行の心を猶更用ゆるものは、それ／＼の日數に向ふと釋尊の經説に  
もあればうたがふべからず、勤よかしく孝行といふは左のみ六かしき事にもあらず、

たゞ親たちにかうもなしづくもいたしたならば、安心したまふか、何とぞ安心させ申し  
たきものなりと、することなすことに朝暮心がけるのみ、これ則ち孝行なり、さて勤  
めをほりたると前に申したゝとなりて、其子もまた孝の心父に倍増するものなり、主人  
に忠義といふも名目こそかばれ、心持はこれに同しと活にしめし給ふは、有がたかりけ  
る事なりけり、

卷之三

○爰に天台坊主に秀清とて、なまこびに悪こびたる坊主あり、多の人によこしまなる  
道をすゝめ、凡そ佛法はわが心にあり、身の外に佛なしなどいうて、あるひは宮社等の  
木を伐らせ、佛像を破却させ、先祖をもとむらはず、邪見放逸の坊主なり、内々か  
れが申すを承はれば、紫野一休和向と申す小法師は、何程佛法だてをして悟道は

つめいの僧など、世間にさたするとも是もつておかしきぞ、たとへば井の内の蛙が大海をしらぬに似たるべし、あはれこの坊主にあひなば、おそろく只一句を以てほい、み都の住居させまじ、あはれ途中にても逢たきもの哉とより、是をうかひける、ある日夕ぐれに、一休かへり給ふに、其頃は和尚眼病氣にて、一眼はあしき折から、彼坊主に大宮通一條の辻にてはたと行あひたまふ、秀清さればこそそれがふところの幸ひなりとおもひて、するく走りよりいかに御坊くといひかゝる、一休この方の事がと仰らるゝ、其とき秀清のいはく、汝一眼をてらし、歩行する事、もしあやまちある時は黒闇なり、あやうき事全く頼みがたし、一休やがて汝が兩眼より我一がん星まんくたり、一月にかへがたし、見物するときはんば明らかなる鏡の如し、かやうに答へ給へば、の坊主がされて一言に及ばず、尻からげて足はやに行方しれず飛うせぬ。

○或とき一休に問ていはく、何と和尚さま、つくぐ世のなが行あり様をみるに、人間

のきやう界をあんするに、皆我々が知音といへども幾人といふ數もしらす、大かた先だち行けるがつひにたれあつて言傳ありといふことも聞ず、いかやうの處に何とやうにして居るといふ事もなしこれのみ心元なき事ともなり、やうくあらちちとする間には、ひつじのあゆみ近づき、車の庭にめぐるが如く、我々が番に當り侍らむ、なげかはしき事ともなり、かやうにあるときは、死ては先なに成り侍るぞ、一休の曰、

死てのちいかなるものになりぬらんめし酒だん茶とぞなりけり  
 と仰られければ、此人また和尚のわる口れいを出し給ふとどつとわらひけるが、又そばなる人の言けるは、さりとて御坊、このうたの心面白く候が、また行もあり行さるも候よし、これはまたいか成る事やらむ、次手ながらきかせ給へ、一休

とらまるとおもはばいそにこくまれよ行とおもはばいそくといひけ  
 といひすて、歸り給ふ。

○洛陽に天文はかせ某といふものありき、あるとき一休の庵へ行きけり、和尚出合たまひ、その方は久々見えざるが、何方へ参られたるで、されば私は此ころさる人になたのまれ、南都にまかりありて候。二三日前に登り申候、和尚の曰く、何ぞめづらしき事もなく候や、博士こたへて曰く、されば奈良にてめづらしき事を承り候、それはいかなる事にやありけるぞ、博士はんにや坂の邊りに齒をぬくものあり、一つを貳文づゝにて取ると開きて、去もの、出くひ齒をもちて、時ならずいたむときには身體さへたへがたきとでもだへける者かれが事を聞きおよび、齒をぬきに行く、一つを貳文づゝなりと申す、此のいひけるは、それがしは聞き及び遠方より参りたり、壹文にまけてぬかれよといへば、いやく少しもそら直はなく候御用ならば何ときなりとも御越あれといひてまけず、色々ことばりを云ひつくし、せんかたなくかへるべきと思ひしごと、切角此事に参りてむなしく歸るべきにもあらずとやおもひけん、是非々々まけなくば二ツを

三文にてぬかれよといふ、先方のいふやう、扱々其方はこまかく直切たまふ人かな、まけておきまじやうとて、二ツを三文にてぬきとりけり、此男かしくも直ざりてぬきたりとおもひ、大きに自慢がほして歸りしを、あたりのもの、申すやう、扱々たい今の男はせんなき事をしけるかな、其ぬくべき齒をばぬかすしてぬくまじき齒までもぬくは、壹文の錢をなしてみて、ぬかでもくるしからざる齒をぬく、さりとは世にめづらしき笑も、これは小利大損ともいふべきかと笑ひける、かやうの珍敷ことをきつて歸りましたとてはなしける、和尚をかしくおぼしめし、ころくとわらひ、誠にそれはなもしろきはなしなり、されば世間の人、利やうに心ふかきは、事にふれて利ぶんをおもふほどに、因果の道理もしらす、當來の苦患をまわきまへざるが如くなと、四方山のはなしをばりて、和尚四の方の遺戸をあけて出らるゝ博士みて、やがてかくでいひける、

いかに西に朝日のいづるかな

一 休やがて心得たりとて、

天文はかせいかい見るらん

といひ給へば、博士手をうちて大に笑ひ、いとまもこはでかへりける。

○爰に一休和尚の庵ちかきほとりに、四十がらといふ小鳥を養ひける人のありしが、物のあたりには生ある者なれば死する間あつて、籠の内にむなしくなれり、朝夕愛し手なれし可愛さに、殊外不便に覺え、いとかなしくて、手にわかれたる思ひをなせり、凡非情無心のものだにも各々佛性を具せり、ましていはんや生あるものをや、死出の山三途の河めいどの間いかゞ有らんしかるべき智者を頼みて引導わたさばやと思ひ、一休和尚の庵へ参りてしか／＼の事頼み申したきよしなげきければ、折ふし和尚の弟子出あひいとやすき事なり、いでく成佛得させんとて佛前に向はせ、

むかし釋尊八十三ばつたい河においてればに入る今なんぢ四十から紫野に成佛をと

ぐとたからかにこそさづけゝる、彼者たのもしくおもひ、やがて葬りてかへりぬ、是を一休ものごしに聞しめし、たゞ今のぬんどうはよくでかしたる小僧かな風骨によると思しめし、大さによるこびたまひ、機嫌よき事なゝめならずとや

○蛇川新左衛門親當、その身いみじき才智發明の道士ながら、和尚のもとへ立入、禪法に参じられける、誠に佛心の妙具をつたへ、正法眼藏なきはむ、英雄の士といひつべし、和尚も心通相がなひて、ゆゝしくおほしめさるゝもことほりなり、されば定業期きたりて寂滅の室にいらんとす、胎下のむかしより是を待こと年久く、思ひまうけたる道なりとて快氣の望さらになく、既に一門はせあつまり、おの／＼今はのかざりに名残をなしみ、したひ歎くことよその見る目もあはれにて、しらぬ袖さへぬらしけるは、ことはりとそ見へにける、かゝる愁歎の折ふし、青々たる四の空より、紫雲たなびき空中におほひ、音楽きこへ、盤香薫じ、はな降り、妙なるかな三尊廿五ばさつ、赫々たる



聖衆を引つれ、間ぢかく、來迎し給ふは、ふしぎなりとも、申々有がたかりける瑞相なり、實つたがひもなく新左衛門は四方十萬億土極樂世界に往生せしめて、九品上剎の臺にいたらむことは、たなごころを見るがごとしと、をの／＼感にたへざるはなかりけり、されば落日にちかき老士まだ物なれぬ若輩のやから、天をあなぎ地に伏し、ともに死なんとぞくるひけるは、道理の至極とぞ聞へし、其中に嫡子は新左衛門がひさの元によりそひ、泪を袖に包みながら、いかにあれ御覽候へ、頼母しく思しめされて、往生安全にとげ給へと、指をさしてなしへける、其とき親當れぶれる眼を活と見ひらき、我子をばたとにらみて、それ弓馬の家に生れけるもの、たとへば安養淨刹にいたりて、九品蓮臺に座すとて弓箭をわするべきにあらず、書院の床に立たる重藤のぬりこめに、矢そへてもちきたるべしといふ、聞人驚かざるはなかりけり、こはいかにと見る所に、親當が弓箭勢何人ばかりとはしらねども、さしもつよがるらむと思しきが、やがて引くはへ引し

ぼり、暫しかためて兵とはなつ、其矢あやまたず、三體の中尊ひかりを放ちて立たまふ、阿彌陀のむな板をあなたこなたへ射とふしければ、空にあまれき紫雲のよそほひも、諸の聖衆とおぼしきものも、たちまち消る塵もなし、いかなる事ぞと了簡すれば、所に久し経る、むじなの化けかうを経たるにぞ有りけり、誠に稀有の次第なり、終に一首の辭世を作り残されたる

生ぬるそのあかつきに死ねればけふのゆうへはあき風ぞふく  
とかやうにつられ臨終なとげ給ふ、奇なるかな空寂の玄妙を會得し、邪魔の障礙をはらひ、其身は死門に入ながら、活人のねぶりをさまされければ、世の人の珍事とする所なり、その後一休を導師とたのみ奉り、御引導をこひければ、一休もこの新左衛門には、一かばりかばりて引導すべしとたくみすましておぼしけるに、はや新左衛門が亡骸を輿にのせて來りければ、一休たち出たまひて、かの新左衛門が乘たる籠をたゞきたまへ

ば、死したる者もの高たからかなる聲こゑを出いして一首いつしゅの歌うたをば一休いつきゅうによみかけゝるこそふしぎなれ、新左衛門しんざゑもんも只人ただひとにはあらじと、今いまの世よまでも人のいひつたへ侍はべるなり、その歌うたに、

ひとり来てひとり歸かへるも我われなるを道みちをしへんといふでおかしき

とたからになへければ、その詞ことばのおほらざるに返歌へんかをし給たまふこそ有ありかたけれ、

ひとりきてひとりかへるも迷まよひなり來きたらすさらぬ道みちをなしへん

とのたまへば、新左衛門しんざゑもんも實げにもとやおもひけん、そのゝちは音ねもせず成なりにけり、世人やじんこ

れをつたへ聞ききて一休いつきゅうは誠まことに人間にんげんならず、佛菩薩ぶつぼさつのいかにあらはれ、ひとり來きてひとり

歸かへるも道みちといへば來きたらすさらぬと即答そくとうなし給たまふは、所謂老子しゆわうらうしに死してもほるびざるもの

は命いのちながしといへるも、かゝるためしなるべし。

○又また新左衛門しんざゑもんが最愛さいあいの妻つま、いとけなきときより萬よろづに心こころみちかく武たけ々たしかりければ、かな

しき者ものにも慈悲じいひのめぐみなく、召めしつかふ童わらはにも哀憐あいれんのなきけ薄うすかりけり、されば人は似にる

友ともとするならひなるに、悟ごたうの居士こじになれそひて、益たふときをしへをしらざりける事こと、いささ

ま報むくひのばちなるべしと、皆人みなひとごとにさみしける、新左衛門しんざゑもんあけくれ不便ふびんにおもひて、もと

より道者どうしやの事ことなればたまひをくだき、柔和にやうわのをしへをすゝめける、しかれども露つゆばかり

もしたかふ氣けしき見えざりけり、あるとき儼あまりいたく制せいしければ、女房にようぼう顔をあかめてい

ひけるやう、

あさいとのながくみじかくむづかしや有無うむのふたつをいつかはなれん

とたゞかやうによみておともせず、親當ちんたうおどろき、日頃ひごろのふるまひに相違さうゐして、歌うたの心こころあ

まり殊しゆしやう勝かちなりければ、はづかしくおもひて、わが教をしへるに及およばずとて、きもに銘めいじて感かんじ

ける、ふしぎなるかな今いままでは、放逸はういつじやけん邪見みやみに身みをまかせ、誠まことにくらき人ひとなりと思おもひしが、

さても我われより先さきにさとりける物ものをと思おもひ、舌したをまきける、其後そのちは夫婦ふうふうのなさけあさからず、

ひよくの契ちぎりふかゝりけり、上うへしき水魚すゐぎよのこゝろ同おなじくむつびけるに、つらき者もののいひな

しにてやありけむ、密に異夫をかきわけて二ころあるよし、まことしやかに新左衛門に告  
 ける、新左衛門もとよりいつぱりを信ずるものにはあらざりけれども、實に思ひあたる事  
 あるとて、物に忍びぬをのこなりければ、暫の延引もなく離別して里へおくりける、女  
 房はをりふし懐妊の心ありて惱みけるは、恨みの心あさからずつるぎなのみほのをかし  
 むらんともだへかなしみけれども力なく出にける、無實の程こそあはれなる、然れども跡  
 方もなきいつぱりなれば、誠つひにあらはれて、謾言のしにきとしりけるより、新左衛門  
 後悔して、又よび迎んとて、我あやまりなるよしひつかはしければ、女房返事に、

秋かぜの人のころに立ならば見のらぬまきにいねといはさる

とかやうによみおこせて、二度かへらざりける、夫より女房のなさけ、たぐひなくいさ  
 ぎよきふるまひは、返てまさりけりと、褒ぬものなかりしとなん、或人かたり侍り、いみ  
 じくおもしろく覺えければ、かこ耳の底にとまり、忘れもやらず有りけるを、假初にあ

らばし侍る、さればかの歌にいづれもかげうたありとなり。

○爰に雲州大原と申す所に。ゆるりや藤太夫と申すものあり、久しく京都に住みける  
 が、元來山雲は生國なれば、又本國に歸りて住けるが、京より國へ下り、さまに契  
 をかたらひて下りける、此女京にてねんころしける男のかたより、度々たよりをうかじ  
 ひ、互に文のかよひありけり、此よしさる者ひそかに知らせば、男あるときあまたの文と  
 もの有けるをとりかくしけれど我はひとつも讀めぬ無筆なれば、力なく、たれにか是を見  
 せばやとおもふに、頼むべき人もなく、打過しが折ふし一休、この藤太夫が近所にまし  
 ますに、やがて和尚を請じて、よき次手なりとおもひて、件の文を取出し、御坊さま内々  
 ながら御ぞんじの通り某は、目を持たながらの明めくらにひとしければ、此ふみ少し仔細  
 あることにて候ゆる、一々よみて給はれと申しける、一休安きことなりとて、此の文  
 どもをよみかへて、只尋常のふみによみなし給ふ時に此男、さては苦しうなき文ども

なり、餘人の讀たらんには、疑ひもあるべきが、殊に和尚のよみたまふ上は、さらにいつはり給ふとも思はず、さては人の云ひしは皆いつはりなりけりと、不審をばらしけり、此女和尚の悪みあまりのうれしさに、ひそかに禮ふみをつかはす次手に、

しなのなるきそぢにかけし丸木ばじふみ見しときはあやふかりけり

とうれしきのまゝかきてつかはしける、一休返事に、

見しときはいかなる事とふ大夫よみをばりてはこゝろゆるりや

これよりかの女、ふつく身を慎みけるとなり。

○都に口痺の妙薬を覺て秘藏しける者ありけり、一休効能をきこし召し、いかにもして知らばやと思召され、やがてたすれ逢ひ給ひてしかくの御薬を知らせ給ふよしを承り及びそふらう、天晴この愚僧に御相傳被下たく、はるく是まで尋ねまゐり候と申されける、彼人うけたまはり、中々の事に候、この妙薬と申すは、我等代々つたへ來り

一子相傳の秘方なれば、他にもらす事思ひもよらず、去ながら貴僧ゆゑしき御僧と見奉れば、否がたくこそ候へ、ふかき御執心にてわたらせ給はゞ、他に口傳あるまじき、御起請をかゝせたまへ、然らばゆるして教へ侍らんとぞいひける、和尚聞しめされ、わが身の大事一代一紙の誓文なれども、愚僧になしへてたび候はゞ、心得侍るとて、墨ぐるにこそ書かれける、やがてならひ得て庵にかへり、あざわらひて宣ふやう、人の病に薬となるべき物を秘藏して、獨覺えたらむは、慈悲のうとき心なり、是等の事を秘藏とせば、おそらくは秘してもひしがたき一大事の因縁をばいかゞせむ去ながら佛神の冥罰ぞらおそろし、さらば札を立て世に知らせんと、

一口痺のくすりの事、もし口痺をやむものあらば、かならず蜜柑の實を黒くやきての

むべし治る事すみやかにして、ふたゝび發ることなし、これ奇代の大妙薬なり。

と出付たてられける、さて教へける男これを聞、以外に腹に立て、せぼねをいからして、

いそぎ紫野にはしりゆき、一休をたづね出し、いかで御僧破戒無愆の賣主坊主かな、何とて大事の秘薬を習ひ得て、他に口傳せましとて起請を書きながら、あまつさへ高札を立て萬人の目にさらす事、いかなる曲事ぞやと、打はたしても忍びがたしと眞黒になつて怒りければ、さしもの一休なれども、おめき殺すかとぞ見えにける、されども驚くけしきもなく、そらさぬ顔にもてなし、あらことごとくの有さまや、何事を斯くばのたまふらん、起請をかきしも誠なり、しかるに札を立てしもいつはりにあらず去ながら口傳せまじと書きぬれば、口傳は一人もせざるなり札をたてじと書かざれば、立たるがあやまりか、起請に少しもそむかざれば、佛神のばちもおそろしからずとて、そらうそむひてまし／＼ける、彼者あくまで罵しり怒氣におかされ、方寸にせまりけるが、一言のぬけ句に返答をうば、れ歸りける。

○一休和尚とひとしき沙門ありけり、我が繪像をみづから書てうつし、心づがら一入よく出来たるよとうれしくて、さもあれ、一休に見せばやとおもひ、急ぎ紫野にもて行きける、和尚この繪を一目見給ひ、あな見ぐるしやとて、目を閉ぢ大きに嘲り給へば、いかなれば所存をまかへり見す、かくわらひ給ふぞと、打腹だちの／＼しりける、其時繪像を取て庭上へ投付け、土ぞうりをばきながら、散々にふみにじり、一筆かくぞかゝれける、

世をすてゝかたちをすてず、びんはつをきりて瀆惱をきらす、かりに繪像をかきておのが悪業をあづけ置く、繪像大きなめいわくなり。  
と黒々と糞をかきて、わたされける、沙門つく／＼と感じ、やがて懷中して歸りける○

○五月雨のふりつき、はれ間も見えず打しめり、四方のけしきうるほび、梢も見えわいたぬ徒然わびしく思しけん、柴の戸をさし込み、たん然として在します處へ、六十あまりの男と見えて、破笠をかむり、いかにもおもひ餘りうれひに沈みたる有さまにてしづかに物申さむとうかゞひける、一休たぞやこなたへと宣ひて、柴のあみ戸をひらき給ふ、彼

男いふやう、我は近きあたりに待る者なるが、明日はさる心ざしの目に相あたり候へども、智識なたのみ奉つるかたなく候へば、恐れながら和尚を請じたてまつり、おろそか成る瘡をまぬらせ上たく候て、是まで頼み來り候なりと、おもひ入りて申しける、一休いっけう聞しめこもとより、出家のいとなみいとあきことなり、何處のほどと問ひ給へば、男をとここたへてさん候わが家居と申すは、にこり川かはとほり通そこぬけびしやく町と申して、かくれなき所にて待るなり、尋てわたらせたまはじ、門かどにしるしを置き候へし、必らずまち奉り候とて、いとま申して歸りける、一休いっけうあつとにてつくぐと案じ給ひ、菜さいはふしぎなる教へやうをいひつる物かな、さらば了簡れうけんして見ばやとて、懸やがぎりて義理をぞひらかれける、抑々おさくにこり川かはとは今出川いませがはなるべし、底そこぬけ柄杓ひしやくといひしは、ふがわ町ちやうといふなるべし、いでいでたづね行きて見んとて思ふ當あてとなとひ給へば、案あんにたがはず、ふがわ町ちやうといふ處ところに行あたらせ給ひける、印しるしといひしは何なるらんと見給へば、表おもてに杓子しやくしをぞつりたりけり、これ

ぞしるしなりとて、やがて内うちに入りて見給へば、きのふの男にあひ給ふ、目度めどたかりける事ことなゆめならず、我等われらのおるかなるたはむれを申し参らせ候へど、一々いちやくにとさわちち、道みちをもまよほせ給はず、御入候おいらひまらふこそいつはりもなき天眼通てんがんつうにておはしますとて、ひとへに釋迦しやくかのごとくに思ひける、男をとこもくせものにてむつつかしく難問なんもんをかけんと思ひけるが、法事ほふじも過ぎぬれば、膳ぜんを出しすえたりける、其そのとき和尚おしやうせん膳ぜんにむかひ、殊ことには亡者もうじや法味ほふみのためふかうをなして三界さんかいに手向けんと蓋ふたをあけ見給へば、飯めしにはあらで小ぬかなり、ふしぎに思めされ汁しるのふたを取見給へば、是これも同じく小ぬかなり、残りかこの物もみなくぬかなりければ、よこ手を打て、あらいたはしや、さては亡者もうじやの三七日さんじちやみなかにあたり候よとて、かぶりもふらずのたまひける、男をとこはいよいよよきもなけし、恐れをなして敬うやまつひける、そのとき男をとこいふやうは仰おほせの如く、それがしは父ちちをうしなひ候て三七日さんじちやみなかになり侍る、佛果ぶつぐわにやいたりけん、もし地獄ぢごくにやおちぬらむ、生なまの事おぼつかなくて、かなしく候さうらふと問ひければ、一

休仰きゅうがほせられけるは、何事なにごとがあるべき、たゞ存生ぞんせうのふるまひなば、他人たにんはよしとほむるや、  
 悪あくきとぞしるや、いかゞいふぞとひそかに宣のたまひければ、されば平生へいせいは常じょうによこしまなるこ  
 と候さふらはず、ひとへに正直せうじきにて、まつたき性しやうなれば、他人たにんは佛ほとりにてありつるとほむる者多ものおほ  
 く候さふらと申しければ、一いつ休聞きゆうきんし召めし、しかれば氣きづかひなる事ことなく、是これあみだにもあら  
 ず、觀音くわんおんにもあらず、則すなはち正直佛せうじきものなり、佛果ぶつくわうを得ること疑うたがひなしと、事こともなげに仰おほせられ  
 ける、男をとこつくぐと承うけたまはり、さては心安こころやすく候さふらふ、又またそれがしが兄あににて候さふらふもの三年さんねん  
 已前いぜんにむなしくなりたりしが、常つねに佛道ぶつだうをもしらず、徒いたづらにあかし落くし、はづかしながら天てん  
 性愚鈍せいぐどんにして人の口くちにぬかりものと名なを得候事えさふらふこと、くちおしき次第しだいなり、たゞし罪つみもつくら  
 ず候さふらへば、佛果ぶつくわえさふらを得候えばんやと問とひける、一いつ休聞きゆうきんし召めし中々なか／＼つみとがなしといへども、  
 佛ほとけにはなりがたし、左様さやうのものは愚僧ぐそうがゆるしても人がゆるさざれば、其落そのおつるところの地ぢ  
 獄ごくを則すなはちあほう地ぢごくといふなり、但たゞ今生こんじやうのごとくに後生ごしやうの事ことも侍はべれば、佛果ぶつくわえさふらと地獄ぢごく  
 と少しも疑うたがふことなしと仰おほせられる

○さるところに何なにともならざる邪氣じやきなる男をとこあり、あまつさへ身みをよろしくして、萬よろづ不足ふそく  
 なく殊ことに下人げにん多くもてり、あまりわがまゝをいはんとて、表おもての入口いりぐちに、法度書はつとがきをしてけり、  
 其札そのふたに、

- 一 へつらいあつて奉公ほうこうはしがちの事こと
- 一 つかひたほしの事ことくひたほしの事こと
- 一 おんほとりがちもらひかちの事こと

とかやうに書かきて立たておきけり、あるとき一休いつきゆうを申し入れ、萬よろづの咄はなしをほりて一休いつきゆう申まをさるゝは  
 何なんとこれの表おもてにはめづらしき札ふたをかきて立たて給たまふ、あれは下々しも／＼への法度はつとがきにて侍はべるか、  
 亭主ていしゆながくことたふ、一休いつきゆうをかしく思おもひ給たまひ、やがてかへりさまにかくがきをへらるゝ、  
 へつらいひてたのしきよりこへつらはでまづしき身みこそこゝろやすけれ

かく云てひそかにおしはかりて歸られけり。

○或人一体にとふていはく、世の中の人の申す事にて候、人の人たるといふ事はいかなる事を申し候や、一休答へていはく、されば此坊主はしらす、足らん身にて候ゆゑいはんや人の人たる事をしるべきや、さりながら若き人の心ざしあつて、やさしくも尋ね給ふをしらぬといふもいなものにて候、むかし物しりたる人の咄した、ちと聞はつり置候ほどに申て見候はん、まづ人に入たる人と、又人たらぬ人と候がゆゑに、人たる人を、人と申すげに候、たとへば鷹などの鳥をよく取るは、鷹の鷹たるに候、鳥を得取らずして鼠などをとるは、鷹の鷹たるにて、鷹とはいひがたし、猫の鼠をよく取るは、ねこのねこたるにて候へ、もし又鼠をば得とらずして、肴なんぞを盗みくらひ候は、猫の鼠たるにてこそ候へ、ねこの猫たるとはいひがたし、人の人たるとは、人の道をしりたる者を申すげに候、又問うていはく、學文にうけ賣と申す事の候、いかなる事にて候や、一休

答へていはくされば是れは是れしかとは知らざる事ながら、申して見候はん、まづうけ賣と申すは、あるひは四條五條の辻に、こまもの店とて棚ひとつに、いろくさまくのものを取りあつめおき、人の川次第に賣るもの、候、此者に一いるにてもあつらへ見給へ、何れにても我が職にあらずして、皆上手の仕置たるを請賣にいたし候間、御用なれば其人にあつらへて参らせんといふが如く、學問にもうけ賣の人こそ多く候へ、あつらへて行はん人はまれにこそ候はめ、ことに老子莊子諸子百家のさたまでも、取まじへて評論し物知りとの、しるは、皆こまもの店に似てこそ候、買手の爲には用にこそ立こともやあらん、賣手はさせる商人にても候はじ、一言一句にても我ものにして守り行ふ人は、はるかにすぐれてありがたかるべしと申さるゝとき、この人つくぐと聞き居て、さても理りかなとてあつと感じける。

○頃は七月十五日の夜、若もの、飛上りの、あと先しらすの男、一兩人申すやうは、い



ざやかたぐ一休のかたへ行き夜すがらなぐさまんと申す、一人が申すやう、されば我等もさやうに存する處よく社申し出されたり、かの坊主もうきにうきし坊主の事にしあればこよひはことさら十五日、いざく往てうからかさん、尤とてうちつれ行くほどに、折よく知尙寺にまし／＼て、何れもよくこそ参られたり、祝義なりとて、はや酒盆を出されて、舞つうたいつするまゝ、一休たちてなとられける、竹の切よのたまり水、すますにこいらす、出す入らず、人とちぎらばうすくちきりて、末までとげに紅葉をばみよ、うすいがちるが、こきで先ちる物で候、おどれやく人々よ、若かふたゝびある身かや、只何事もかことも、わかき時にはたれもかも、いたづらくるひはあるものよ、それもくるしいものでもおじやらぬ、どく變じてくすりとなり候、なにをなげくぞ川ばた柳、みづの出ばなをなげき候、それをなげかばなげこうまでよ、うらゝか身にかゝる事にてあらばこそ、牛はうしづれ馬はうまづれ、あだなうき世はどんなものじつと、破れ扇のひやうしを取

て、うたはうたへまは舞へ、釋迦のおかゝはやしゆだら女く、よい人々とおどりをさめ給ふ、みなこれを見て、扱々御坊のおどりを久しぶりで見ました、歌のせうが一だんおもしろしとて、一度にどつとわらひけり、いざ／＼此おもしろさに、町へ出ておどらん御坊も同道申すべし、一休心得たりと太郎次郎と申す下人をつれ給ひ、已上四人の人々おもひ／＼にいでたちしが、先和尙のしようぞくには、かつたいかきの布、なげづきん、紙子のそでなし、羽をり、こしには九寸五分にひようたんを、ぶらりしやらりとさげられけり、わきざしは門前の彦六が一子お竹がしやうぶかたなを、かれひらさしにひらめぎわたして出たまふ、さておどりは五條の橋より四五丁西にありとて、こゝぞくつきやうのおどり場なりとて、うちまじはりて浚をせんぞとをどらるゝ、二人のつれも見うしなひ彼たゞ主従にこそ成な給ふ、何としたまふらん、足らともしどろになり、若き女のかたへ、へらへらとこるびかゝり給へば、女もともに士つかむ、彼おつとが是を見て、そつじ

なる曲者かな、のがすまじといふまゝに、大こゑ上げてはりかゝる、一休も心得たりといふまゝに、大はだのきにはだぬいで、大手をひるげてかゝられけり、五人三人取つきて、あなたへはむらく、此方へはむらくと、おしかゑし、おし戻し、しばし捻あふ其ひまに、頭巾早やぶれとびければ、紙子はうしろのすそよりも、ぼんのくぼまで、引やぶり、前後ふかくにひしめきけり、かゝる所へ、太郎次郎は見るよりも、まかせたりといふまゝに、大はだぬきて、相人のすねかと思ちがへて、おぼんのすねをむすとり、曳やつというて引くほどに、おぼんもついに打たふれ、腰に付たるひやうたんも微ぢんに成て失せにけり、大勢打よりろうぜきはさせまじと、我もくとはしりよる、やがて御坊はおきあがり、東をさしてにげらるゝ、下帯はづれてけつまづき、命からくしのびて寺へ歸らるゝ、なかしかりける事ともなり。

○都にて大富家なるもの、大事のとむらひをしける事ありけるに、折節導師には、いか

なる人なを請じ奉るべきと、思案まらゝに暮しける、其頃名だかき智識あまたおはしけれ、中にもむらさき野の一休和尚に、しくはあらじと、明日は法事になりければとて、いそぎ人をぞ遣しける、折よく和尚艸庵のちりをはらひ、庭のさうじゝておはしましけるが、少もなづまぬ御僧なれば、心安く領掌し給ひけるが、思しよる事のあらにや、やがてこつがい人に身をやつし、手足にすゝなにじり付け、くさり衣をまとひもくづの、中より出たるやうに身をやつし、彼門にたちたまひ、乞食のすることく、御供養の御施行をたべ、御慈悲を下されよと、とりくにのたまひける、あるじ邪見に腹を立て、見ぐるしき奴原おひ出せよと下知しければ、其とき下男二三人はしり出、供養は明日の事なるに、今日来ておめく曲者やとて、元よりそれとはつゆしらす、いたはしや一休を、たゞき出し、牽り、さんぐにうちこらし、ふみたをしてぞ入りにけり、一休はからき命をやうくに助かり、無さんのしわざと思しめし紫野へと歸りたまふ、明日にもな

りければ、昨日のさまに引かへ、あらたに湯あみし給ひて、衣を改め召されつゝ、七丈の御袈裟をすそながに引かけ、金襴まじりに取つくらひ、もとよりしゆしやうに見へ給ふ、一休御こし給ふぞといひ込ば、旦那大によるこび、佛前へこそせうじける、されども和尚すゝみ給はず、いやそれまではまぬるまじ、愚僧はこれに候とて、いしうすになり、にじりたまはず、旦那はもだへて是は何ことにておはします、あらいまはしやこゝは下郎の筈なり、こなたへとふらせ給へとて、手を引たて奉れば、一休御らんじて、しからば此衣に料供を給はるべし、愚僧がたまはるべき仔細なしとて、一首の狂歌を、かく、

わうばくの三十棒をあてられて身にはれきたる蟬のぬけがら  
とよみ給ひて、こつじも愚僧も同じ火と水なれ共、きのふは棒をくらひ、今日は御齋をたまはる事、偏に此衣の色が光るゆゑなりとて、ぬぎ捨てこそ歸り給ふ。

○扱て一休和尚は活佛にてましましけると、世上に風聞しけるが、あまりにいほんとして、去人申しけるは、この間一休へ参りければ、よく來るとのたまひ、虚空に座し給ひて、御庭のまつ枝に御腰をかけられ、御すゝみなされしより、不思議なる事にあらずやと、しかくとかたりければ、昔人それは偽にこそ、人間と生をうけ、かゝる自在のなるべしやと取沙汰しける事をほのかに聞めし、一條の辻に札を立られし書に、

佛法の修業すでに道なり、天眼通を待たり、虚空に座せんとすれば、即ち座し、座せましとおもへば、則座せず、通力自在を得たり、若うたがう人あらば見物すべし。

とかゝれたり、昔人は是を見て、此間人の評判しけるが、かく書せらるゝ上は、更にうたがう所なし、去ながら魚をくひて生して吐くと仰せられしも誠ならず、尤なる事にてやあらむといふ人もありしが、いやくそれとは品かほりたるとて、すこびたる人二三入つれだち一休の庵室へ行き、御札の表うたがひはあるまじけれど、直々おがみ申し度候て、

これまで参りたりと申す、一休出あひ給ひ、中々の事天眼通を得申し候と仰られければ、其中にすくひたるものす、み出、申しけるは、是はいつはりにてあるべし、虚空の事思ひもよらず、先この扇の上にあがりて御覽あれと申しければ、いとやすきことなり、去りながら、其あふぎの上へものらんと思ふ心出れば乗る、今日は半天よりのらふとおもふ心なし、虚空へものぼらんと思はればのぼらす、重ねて御出あれ、のぼらんとおもふとき、上りて見せんと仰られければ、皆人あきれて歸りける、其中の人申しけるは、いかにしても一休なり、人のあまりにいほんとして、天眼通を得給ふといふをわかしくおほしめし、いませめ給ふなりと感じて歸りけるとなり。

○或旦那きたりて申しけるは、この御寺へ出入いたし候人々申けるは、話則の一そくもぬけたるかななどとして、われらの愚痴なるをあなたどり、何とも迷惑いたし候間何にても一そく御じひに示し給へと申しければ、安事なり、さらば参じられよと有りければ、

参ずるとはいかなる事にて侍ると申す、いや何なりとも佛の道にて合點の行かぬことを尋られよ、かしこまつて候とて、佛殿さしてはしりいづる、和尚をかしく思し召し、見ぬかほしておぼしける、せつなの方に走り歸るを、いづくへ行かれしやとのたまへば、佛の道に不審あらば申せと仰せられしにより、佛の道とは佛殿へ行く道なりとぞんじ、一走見て参りましたが、いかにもがてんのまゝならぬ事こそ候、あの山門の通りの松に葉を掛けて候が、何の葉とも更に合點まゐらず、大方鷲の葉とも見えて候得共、しかとわきまへず候と申しければ、いやくからすこそ、今時分に葉をかくれとのたまへば、いやとても御事に、御慈悲をたれて示し給はれと申しければ、其儀ならばはしこを持つてのぼり見給へと仰られければ、かのものいそぎのぼりて、彼葉をおろし見れば、なにかの鳥の子もななく、何とも見えぬなり、一休何なるぞとのたまへば、何も中にも御ざなく侍ると申せば、鷲の葉をおろしてみればからすにて

これにつけて見給へ、茲に二そくなるはと仰せられければ、彼ものなか／＼何ともつけ申すべきころはなくと申しければ、一休仰られけるは、そこなるは我も汝に一則さづけしらすべき心はなしとしめし給へば、かのものおどろき、さては一休和尚さまも仰られがたく侍るかと思しければ、自心自佛と答へたまへば、よ／＼手なうつてかへり、終に自得しけるとなり。

○洛陽にある遁世しやありけり、あるとき一休の草庵へたづね行き、はじめて見参に入り奉らんよし申しける。折ふし和尚御病氣にて、此間はたれにても御目にかゝる事まかりならず候、御用の事も候はゞかされて御出あるべき山申出さるゝに、此坊主かされて申すやう、御病氣のよし御尤なり、しかしながら立ながら御見参に入たきよしたつて申しけり、一休かゝるき御僧ゆゑ、あはまじきといはゞ、さて臆したりとおもはれんもいかゞやと、やがてたち出たまひ、たいめんしたまふ、此坊主申しけるは、某は洛陽にまかりある

坊主にて候、天台の法門をも、かたの如くうけたまはりて候、しかれども御坊にすこし不審なづね申したくぞんじ参り候、一休いかなるふしんば致候や、我等は愚僧の身にて候へば、いろはの講釈もしらぬべら坊にて、返答申さんもおもひもよらざる事なりとのたまふ、其とき僧の曰く、いかなるなかこれ草木成佛、一休答へて曰く、草木成佛よりなんぢが成佛をしるや、又とんせいしや、その成佛はいかなる所にかある、一休なんぢが心にとへと、答へたまふとき、やがて此坊主閉口して歸りける、自らの成佛をもしらすして、なんぞや外なづねる事愚なり、たとへば盲目が黒白をあらそひ、ゑんかうが人のぞむにさも似たり、それ道人といへば生死の一大事を心にかけて、無始の輪廻をたゞむとするをこそ、道人とはいふべきに、おのれが心をさへ悟らすして外を求るといふぞなかしとて笑ひたまふ。

○一休和尚ころしも春の牛の事なるに、花にころるをよせ給ひて、幾枝もあつめ、花籠

にたてまじへて、酒など参り、こゝろもわが／＼となりて、おほします所へ、一休の旦那の奥がた参りける、よくこそ来り給ふとて、さけなどすゝめ、なかしきことなど御はなしありて、ひたぶる酒のみて遊ばれければ、日もはや西山に、おちこちのたつきもしらぬ御寺に彼女房も、べん々とはなし居ける、和尚いかゞおぼしめしけん、こよひは御とまりあれと仰られける、女房の申しけるは、かりそめに参り永あそび仕候さへ、なにとやらん似合ぬやうに侍るに、一夜とまり申さば、うき名やたち申すべし、其うへ夫ある身の事に候へば、いかに心ばさはおもひかなひ難く侍る、まづ御いとま申すとて立ちへりしな、一休袖にすがりひらに、こよひはとまり給へと、引といめ給ふに、女房申すやう、いまうでは、一休さまは、生釋迦のやうに思ひしが、わらはに御心ありてといめ給ふや、狂がるおほせかなと申しければ、一休笑ひたまひて、其方へ心なかくればこそ、愚僧も是非にと留め申せ、心かけぬ者が御とまりあれと申すものかと仰られければ、沙汰のかぎり

や、夫ある身が／＼る事侍るべきかと、ふり切て輿に乗立かへりける、さて夫にあひて一休は佛のやうに思ひ、そなた様もおぼしめさんが、いたづらなる坊なり、わらはに酒をすゝめ給ひて、今まで引とめ剩さへこよひは一夜とまれとせひに仰られける、かならずあの寺へ参り給ふなど、二心なきいけんをくりかへしく申しける、夫はさるものにて、手を打てわらひ、さりとば佛なり、汝がかくいふも理なり、よく思ひ見よ、いかなるものにて、我をたのむ旦那の女房に、なれ／＼しげに一夜とまれとは、中々出家の身にていひがたし、よし一休和尚と枕をならぶれば、今生後生のうつつたえ成るべし、我等をかれ侍らす、急ぎ行て一夜遊びたまへ、なに／＼の誓言ぞ、我等のれたみ心はなしと申せば、左あらば引かへし参るべし、御よろこびあるべしと申しければ、急ぎ参りてゆるくと和尚をなくさめ給へと申しければ、女房よろこび、一間の處へたちこもり、おしろい口紅、きつねの化たるが如く、引つくるひ、衣裳をかざり、急ぎ輿にのり一休へこそ参りけ

る、一休は口懸給ひこに、門ほどくたゞく、おどろき立出給へば、かの女いかにも細々としたる聲にて、さきには是非に一夜とまれと仰られけれども、夫の心うかいはしく、ふりきり立歸りしが、餘り御残り多くて、夫にいとまな乞候へば、苦しからんと申ゆゑ、おぼつかしながら、とまりに参りたると申せば、一休いやくもはやいやにて候、御かへりあれ、先程は、こなたへ心かゝりたるが、はや心かゝらす候、はや御かへりあれくとて、門をかたくしめ音もせず、さりとは御なぶり候いと申しけれども、あへて音もせず、是非なくかへりて夫にしかぐと語りければ、さあらんと思ひけるとて笑ひて、天下老和尚なり、心うこくときは動かし、うごかさればうごかしたまはず、もはやいやとは、誠に水の水の如き御心や、いさぎよしとかく凡人にてはなしとて、いよく奪みける。

○扱一休和尚の二代までは、方々の寺々より七月十四日には、大裡へ灯籠をさへげける、大徳寺にも開山大燈國師より、ゆゑありてさへげしかば、後々まで例になりやめがた

くありければ、一休こむすかしくや思合しけん、あるとき大裡へ燈籠をあげるるとて、狂詩を一首つゞり、燈籠にそへさへげ給ひける。

性靈 今日 出来 迎  
しやうらいこんにちしゆつらいかう

雨露 直供 萬葉 棚  
うる ちきにくうすまんえんたな

掛得 燈以 大上 月  
かひえたりとうめうてんじやうのつき

松風 流水 讀 經 聲  
しやうふうりゆうすうどくきやういこ

と遊しければ、帝親覽まし〜て、まことに一休の詩なるものは、やうなき燈籠をもとめけるなり、自今以後大徳寺よりも、何方の寺よりも、七月に燈籠をさへぐる事あるべかずと仰出されけりとなり、世の人これをきき、さても〜名僧かな、かゝる御心さしにては定めて御寺にも性靈祭りはあるまじ、若あらば、さこそかはりたるにてやあるべし、いさ々人一休の御寺へ参りて見物し、末代の語り句ともなすべしと、四五人つれにて参り、一休へ御目にかゝり此禁裡へさへげ給ひし燈籠の詩、洛中にて是のみきた 仕候、定めてかゝる御心さしにて候は、性靈まつりも遊し申す間敷候と申しければ

いや〜われらは三界の衆生をおもふゆゑに、有縁無縁の悪鬼をまつりてしゆく〜の物を手向候ゆゑ、廣大無邊なる性靈まつり仕候と仰られければ、皆人案に相違して、此御寺には見へ申さず候が、何れにて御まつり候ぞと申しければ、これより四五町わきをかりて候と、仰らる、皆人申しけるは、とても御事に見物仕度候、御人そへられよかしと申しければ、きとく成る事をいひ給ふ方々や、人までもなし、我等同道すべし、水むけし給へと、誠しやかに仰られければ、皆々よろこび、御跡に付て行きければ、東の河原へ御出あつて、これ〜見たまへとて兩手をひろげ給ふ、皆々〜とにて候ぞとうと〜しければ、一休は見給へとて、くる〜と舞ひ、手をひろげたまへども、皆がてん行ざりければ、おの〜は見物はなるまじきぞといてきかすべし、只耳にて御聞あれと仰られければ、皆人あきれて立居たり、一休一起調あげて仰せられけるは、

山城のうりやなすびをそのまゝにたむけになれや賀茂川の水

開給ひけるが、是大なる性靈だにてはなきかと仰られければ、皆人さてもいや〜ともしはれぬ御意やとて感にたえてかへりける。

○或るとき蜷川新左衛門來て、佛法ばなしなどしてあそびけるに、一休の仰らるゝは今どきの出家心さしうすし、佛は五百戒をさへたもち給ひしとかや、せめて其のす取の五戒をばよくたもつべきなりとのたまへば、新左衛門申されけるは、眞に沙門は申すにおよばず、俗のうへにも、せめて五戒はたもちたき事に候と申すに、一休いや俗は是非もなきことなり、出家にはもたせたく思ふなり、去りながら目に見て耳に聞ゆるもの五戒をたもちがたし、わづが一尺の扇さへ、五戒をやぶるうへは、まして僧俗生としいけるもの、たもちがたきはことわりなり、新左衛門これをきつて此扇子さへ五戒をやぶり候や、中々破りたり、これまた和尚の出來口にて侍らん、いで一々とひ申さん、答へてきかせ給へ〜いつもの御願作の御かる口うけまぬらせんとまをしければ、さらば一々とひ給へ、新



左衛門とて曰く。

如何是殺生戒 答て曰 竹を切て骨とはなきや

如何是偷盜戒 答て曰 虚空の風をぬすまざるや

如何是邪淫戒 答て曰 かなめとくあはせずや

如何是妄語戒 答て曰 給そらことなかくざるや

如何是飲酒戒 答て曰 開てざらんさいはざるや

これ扇の破戒ならずやと仰られければ、今にはじめぬ御口なりけれども、一入ありがた

くぞんじたてまつる、さりながら五戒のうち偷盜戒のおん答に不審申たく候、和尙の曰

く、いかなるふしん候ぞや新左衛門のいはく、古語に。

扇是日本扇。 風不日本風。

ときくときは、扇こそ日本のあふぎなうこかしめ、風は日本ばかりとはかぎらず、千里同

風とあるからは、ぬすむところいかたとおどけて一句申しければ、一休、新左衛門とのた

まふ、やあといふ。

音もなく香もなき人のこころにてよべばこたふるぬしもぬすびと

とあそばしければ、さてもよき御口や、先ほどよりの問答を御六かしながら一筆あそばさ

れとて、書てもらひて、そのまゝ掛ものにせられけるとなり、此かけもの都の中に持たる

人あり、これを寫す。

○或人一休にとふて曰く、何と和尙さま、世の中の化ものは人毎にきどくふしぎと申すも

のと覺え候、さうやうにて候や、一休答て曰く、いや只中にぶらりとこたへたまふ、こ

のをとこ大にはらなたて、さても御坊は聞ふ申さぬ御返事かな、それ人の物をとひかくる

に凡そ法こそ有るべきに、中にぶらりといふあいさつはつひにうけたまはらず、それ人を

なぶりまふか、御出家には似合ぬことかな、是非とも此うへは仔細なたづね申さで置まじ

坊主ぼうしゅとはいはせまじ、諏訪八まんも御示現ごしげんあれと大おほいにいかり申しける、一休いっしゅうこの有ありさまを見給みたまひ、さてもく其方そなたはたんきなおそろしき人ひとかな、そなたのやうなる人ひととはもの、咄はなしもならぬ、仔細しさいは其そのはなしくはふといふ氣きぶんなり、先まづよく合點がてんしておみやれ、そなたはもの、不思議ふしぎをとふゆゑに、そなたへ幾度いくたびも申し聞きかせる事ことなるに、同じ事おなじことをまたはいひまたは云いひやめさるに、がてんのゆかぬ人ひとかなとおもひて、只今ただいまのやうに返事へんていたす事ことなり、それもの、ふしきを立たればふしぎ、不思議ふしぎもなしと思おもへば、ふしぎ成なる事ことは一ツもなし、また佛ほとけも神かみも有ありとおもへばあり、なしとおもへばなし、さればあるにもあらず、無なきにもあらず、扱さてあるときは中ちゆうにぶらりといふ物ものではなきかといはるれば、此人手このひとてを打うてかんじけるなり。

卷之四

○一休いっしゅう和尚おしやうの御弟子おんでしに雲知坊うんちぼうといふ者ものあり、江州かうしゅうに住すまけるが年月としつとを経て、師しの御おんもとへとむらはんとて、紫野むらさきのへ参まゐり寺門じもんへ入いらんとするに、小法師こはふしを棟むねをもつてうたんとす、こは

何事なにことぞといはんとすれども、物ものもいはれずじけ去さりぬ、是これはいか成なる事ことやらん、はるく思おもひたちて来きたりしかいもなく、むなしく歸かへるべきかとおもひて、又また行いくときに小法師こはふし此このうしはいかさま思おもふ事ことのあるやらん度たび々々来きたるといひて、まづかたはらに引ひ入れつなきおく、其時そのとき我身わがみを見れば牛うしなり心こころうき事こと限りなし、是これは日來ひこころの信施しんせのつみふかきゆゑにこそとおもひて、羣勝ぐんしょう陀羅尼だらにこそしんせのつみをせうめつする功德くどくあれど、さすが聞き置おて誦じゆせんと思おもへども、ならばざる事ことなればかなはず、せめて經きやうの名ななりともとなへんと思おもへども舌したこぼりていはれず、只ただそいめくばかりなり、此牛このうしは病やまひのあるにや艸くさもくはず水みづものますぞいめくと人ひと云いひけれども、心こころうきに食物じよくぶつの事ことをもうちわすれて、三日か三夜さんやそいめきしが、心こころさしのつもるにや、羣勝ぐんしょう陀羅尼だらにといはれたりけるとき、本もとの法師はふしになりぬ、さて

つなをときて和尙の御前に行きぬ、和尙仰らるゝは、御坊はいつきたれりといひ給ふに、三日以前に参りたりと答ふ、いづくに今まで有りつるぞと、ひ給ふに、馬屋にさふらひつるとて、有りし次第をかたりける、和尙不便におぼしめして、袈裟勝たらにをおしへたまへば、いよく此坊主得道しけるとなり、淺ましき事なり、恐るべしはづべし。○(江州しやうれん寺に)一休おはしましけるとき、ある夜ふしぎの夢を見たまふ、其隣家に角助と申すものゝ親喜助といふもの、三年以前に死しけり、今生に居るときは、まさしく片目にて有りしが、一休へ夢中にかたり申すやうは、われは死して雉子になりたり、いつ幾日には地頭より御狩に出たまふ、さらば我命はたすかりがたし、此寺へにげ入る事あらばかくしてたべ、生々世々にうれしとおもはん、我もとより御ぞんじのごとくかた目しいたりしが、其折からなれば定めてきじのかすも多く飛入る事あるべけれども、片目しいたるをしろしにたすけたまへと、ものおもひたるすがたにて、なくくかたるを見

て夢をめぐめぬ、あやしく思しめす所に、次の日あんの如く地頭たかゞり有りける、しかるにきじ一羽寺のうちへ飛入りぬ、和尙御覽じて扱はかの夢に見つるきじは是れならんと、取て見たまふに、彼がいひごとく片目なし、やがてかまの中へかくしてふたをなし、さあらの體にもてなし給ふところへ、かり人うち入りて爰かしこ見けれどもおらず、力なくして出けり、和尙此きじを取出して、今の世繼角介にしじうなくはしく語りたまへば、角介なみだを流し、此鳥をもらひ、伺ころしたると聞きはべる、ふしぎなりし事どもなり。○江州に竹林寺といふ寺あり、此住持生質脊低しくて三尺ばかりなりけるが、さる方に思ひ入りたる美少年ありしを、ひそかにかたらし、折々寺へよびよせねんころせられしが、何とかしてうちたへ、久しくきたらざれば、此住持大に氣をくさらかし、何事もうちすてぬまにうちふしけるに、下人少しのぶちやうはふありしを、腹だちまぎれに枕をなげうちしてさんぐに悪口しける所へ、一休もとより竹林寺はしたしければ、はからず來

られて、此體を見て、是は何事をいひて腹立し給ふぞ、まづくかんにんめされよ、何  
 飛しいたされしやと申されければ住持ひそかにかたりて、かやうくの仔細あつて、此  
 ころは打たへまぬらす、何とぞしてよび度候が、親兄弟の前をしのぶよし承るが何  
 ぞ夫となきかこつけして、うちたへきたらざるはいかなる事ぞと、とひやり度候、御坊  
 には才覺人なればよろしく頼むといふに、一休うちわらひ夫は何より易き事なり、此  
 ろ澤山にある菜と錢と小糠となすこしつゝ紙につつみて遣り給へ、竹林それはいかなる  
 事ぞ、一休申さるゝはなせにこぬかといふ事なり、竹林きつて一だんおもしろく候、  
 さらば、明日はこれをもたせやるべし、今日は雨中にて猶さら心きびしき坂本より珍  
 酒をもらひたり、一つまぬられよ、我もたへ申さんとて、たがひにさしつさくれつ酒宴な  
 かばに、一休たつておどられけるが、せう歌に、  
 君がこぬとてまくらがしろが、統ななげぞとがはなし、ちくりんくちんちくりん、さ

なちくりんじやほどに、きのそんよな、などりはなんよさで、ちやせんやころさ。

とうたひかなで、かへられけるけ、をかしかりし事どもなり

○其頃江州鳥山村といふ所に、六條なにかしどの、御領分にてありけるが、久瀬又右  
 衛門と申す家老、どうよく心のもの成るがゆるゑ、百姓をひたものせぶりとり、あまつさへ  
 農具までもとりつくすにより、百姓おのづから耕作もならず、在所に住れずして一人づ  
 づ行方しれすのく程に、やうく残る百姓わづかになり、何れもこれをなげき、いかゞ  
 せんとひしめきあへり、其中に一人が申すやうは、いかに百姓なればとて、是はあまり無  
 道なるしやうかな、耕作の道具まで、とられては、何を以て作りをせん、しかれば在所に  
 ありても詮なし、とても死する命なれば、此事を一先うつたへて、其後はともかくもな  
 らんとおもふばいかにと申しける、この儀もつとものと一同し、さて訴状を認むるにおよん  
 で、たれかれといふといへども、皆一文不知のものどもにて、たれか書んといふものも

なし、折ふし一休托鉢に行き給ふな、幸のことなりとて皆々立よりて、訴状を書て給はれといふに、一休き給ひて、何事の訴へにやと問ひ給へば、しがくのよしをかたるに、一休聞て、いやくそれは訴状までには及ぶまじ、是れをもちて六條どのへさづけよとて、歌を書きてやり給ふ、

又もまたとりてもきかぬ一村ののふ具残らすくせやとり山

とよみて、是れをつかはされければ百姓ともかゝる事にては中々とり上候事思ひもよらずと申しければ、一休いやくこれにてよし、是非これなきげよと仰られて歸り給へばいづれも如何あらんとおもへども、みな土百姓のあがりどものより合なれば、論ずれどもめづらしき分別も出されば、是非なくして彼のうたをさし上げければ、六條どの御らんありて、めずらしき訴状かな、百姓の分としてかゝる事は思ひもよらず、定て人だのみて書きつらん、有のまゝに申すべし、若陳じなばくせ事なりと仰せらるゝ、よづて一

休をたのみしに一休これにて事足と申せし趣を申上げければ、こそ其おどけ僧ならでは、かゝる事ははんもの有りとも覺へずと興じさせ給ひて、其のちは農具をもかへして、百姓になさけふかゝりしとぞ。

○さて一休江州にましますとき、ある寺の卒都婆が化て、八尺ばかりの入道よなくそとばの影に立そうて居ける、下部のものども是れをおそろしがり、用事をとのへる事もならず、況てあたりへ、猶参らす、いかなる子細ぞと知人もなし、或人礼向にかくとかなる、一休その卒都婆を見たまひけるに、文字のうがひあり、さてはとてやがて改めた書たてられける、或ときくだんの妾繼夜半のころあらはれ、一休の前にひざまづきて、なみだをばら／＼とこぼして曰く、我地獄の中に入りてさまざまの苦を受くる事たへがたし、あはれ和尙すみやかに救ひ給へと、たいしほく／＼とくときける、和尙のいはく、汝圓通より出て圓通にいたる 何れの所にか地獄ありやと仰せあれば、入道こたへて曰く、い

やごくちうを論ずる事なけれ、たゞ此體を見よ、利尙のいはく、此體まつたく、佛性同體にへだてなしとのたまへば、又入道申すやう、しからば名を付てたべといふ、一休のいはく、本空道人禪定と申さるゝとき、其まゝ靈きえくとしてうせにけり、其後は二度出ざりけり、一休にとむらばれんが爲に來れりと、皆人申しあへりける、あはれなりし事なりけり。

あるとき一休痲氣にてこしをいたため、のびかゞみも自ゆうならず、迷惑し給ひ、いろく養生し給へども、いたみやみがたし、さる人來りて申すやう、其せんきには鹽風呂がなによりもよく候、其いたむ所をいく度もふき付れば、やはらぎて即時によく候、私も此頃せんきさしおこりしを、風呂にてふき候へば、其まゝやはらぎ、あくる日はゆるく立ち立ぬも自由にいたし候間、御内の次郎太郎御つれなされ、かれに其いたむところをよくふかせ給へとおしふるに、さらばとてやがて鹽風呂へ入り給ひ、次郎太郎もともに入りけ

り、さてかのいたむところをふけよとてふかせらるゝに、二人のもりやがてふきにがゝりける、其ふきやうに、ちくしやうくくというて、ひたとうちたゝひてふくときに、一休つくくくとき給ひて、何とか合點し給ふやらん、そのまゝ返答に不奉公くくくとこたへ給ふ、太郎次郎もふしんにおもひけれども、主人の事なればいかゞと問ふこともならずしてうち打ぎぬ、ある人湯よりあがりかたすみにおて、つくくくと聞きてはらすぢなよれり、此人わざとだまり居て、あくる日和尙のもとへ行き申しけるは、利尙さま夕べ風呂へ次郎太郎をつれさせられ御入りなされ候や、されば此中はせんきにてめいわくいたし居る所へ、ある人のをしへにて風呂へ行きてそのいたむ所をよくふかせよと有ゆ点、夜前湯へ参り候、其方は何として知り候ぞ、いやさる人のはなしにて、夕べうけ給り候、しかれば世には風呂をふくものも多く、ふかるゝものも多くふかるゝものもおほきに、なんぞちくしやうくくとふけば、ふかゝる者不奉公くくとこたへ給ふは、さてくめづらしきふま

やうふかれやうと風聞仕候、さやうにふき又こたへ給ふはいかなる事にて候ぞと申しければ、一休それは次郎太郎がちくしやうくといふは合點まぬらす、拙僧はもとより畜生にてもなし、またちくしやうといはるべき覺えなし、しかしちくしやうなるしわざがもしあらば、彼らが奉公のしやうがめしきゆゑならん、さるによつて不奉公くこたへたるなりとのたまへば、此人おどり上り手なうつて感じけるとなり。

○江州堅田の浦に彌五郎といふ船頭一人ありける、おのがわざながら、いやしきいとなみにやつれば、一生がま摺の襖掛の枕をそばだて、眞の道にうとくして、心ざしきながらあびすの九重の花にあそぶともがらにははるかおとり、おのづからいやしきになれて、いみじかるべき事を露しらす、かたくなに奪きおしへをほぢくやまざれば、いとあさましきよすがなりけるがつめに身まかりて死にける、妻子したひなげく事りぎりなく、さてあるべきにあらざれば、火にやせん土にやうづまんとかなしみける、せめていかなる智識

をも頼みて、後世のくげんをたすけたきと思ふ折から、一休風雲の行衛を思しめして、浦のかたにれまりぬて、四方の致景をたのしみにおはします所に、妻子これを見て、衣のすそにすがり、たゞ今がやうのあさましきもの、相果候が、あはれ御じひをたれて、彼もの後世のくるしみを導きてたまはれかし、生々の厚恩にて候べしとかなしみける、一休ふびんに思しめし、何より安き事なり、引導さづけ得させんとて、此家にきたり給ひ、其志給ふ様こそふしんなれ、先々死人を米こもにつめよとて、たばらに入て繩をかけ、丸太舟にかきのせ、湖水の波にうかべける、おきにいたりて聲をあげ、高らかにのたまふやう。

此はこれ元來米俵にもあらず、豆俵にもあらず、

汝はかたの彌五郎俵なり、江河にしづんでうろくづのゑとなり、

佛果を得よ、喝。

との給ひ水の底にぞつき入れける是成佛の引導なり。

○又一休堅田の庵におはせしとき、海はたへ立出給ひては毎日つりをたれて魚をとりてまぬりけるに、御弟子兄弟の僧達、これは不律なる仕合なりとて、一休を一問のとこへよび入れ口々に意見しければ、一休の曰く、各たちは學門をすると何事をいし給ふや我等はいにしへの祖師の眞似か禪宗の學問と心得たり、しかれば例なき事は仕らず、いでく古の例を知らずば見せんとて、もとより給はきやうなり、蜺子の海老をつり給ふて喰ふ處をありくと給に書き、一首の歌をかゝれける、

いにしへのかしの祖しは蜺を釣し我はあほうて魚をつりてくふ

と遊し、かの僧たちにさし付、さわらぬふりにて居られける、みなくかの給を見て、さても奇容なる給や、見事なる歌の事ふりやと感じける、其中にての老僧あざわらひ古の祖師の蜺を釣参りしとて、貴僧の若きなりにて魚をつりまぬらん事、鶴の眞似して鳥の水

なむといひし類なり、さて貴僧はこの蜺子和尚のゑびつりてまゐりし、御心根をしろしめしけるが、中々及びなき事やと笑ければ、一休少しもさはがす色をもかへず、さてく貴僧の愚なる心にては、蜺子海老を喰し心根がてんはまぬるまじ、それ人は若にもよらず老たるにもよらず、道におめては老若はあるまじ、老たるが悟道せば門外のむく犬も悟道すべし、世尊は三十成道とつけ給はる、我等が祖達摩大師のいにしへを承るに、ある時般若多羅尊者の來り給ひて、光明かくやくたる壁をさくげ、三人の皇子に見せ給ひつゝ、心をためさんとて、おのく此玉を寶としたまはんやと問ひしとき、御兄二人はこの壁にまさるたからは又あらじとの給ひけるに、達摩大師は七歳にて一の乙皇子なりけれども、此玉は世寶にて寶にあらず、智光の珠こそ又なき寶なりとて、彼玉をなげうち給ひければ、尊者おどろきかゝるいとげなき身にして、ふしきなる人かなとて、則御名を達摩と付られける、はじめは菩提多羅と申せしとかや、達摩とは萬事に達し通じて見



がき立たるやうなる人なりとの心とや、しかれば悟道は老若にはよるべからずと、一休  
 手を打て彼老僧が意見の拙きを笑ひ給へば、老僧は人中にて込付られ、赤面して申さ  
 れけるは、かる口にまかせて申されけり、如何に口にてはいふとても、心はさもなきもの  
 なり貴僧は實正蜺子のふびまぬりし御心根をしり給ふか、一休答へて曰く、中々存知  
 たり、老僧申さるゝは各いかに思しめす、それ禪宗は以心傳心なり、いかで蜺子の御  
 心が知るべき、蜺子の心は蜺子ならずばしりがたしとあざわらへば、皆々尤もと打わらひ  
 て、蜺子の心はなかく凡人のしるべきにあらず、しかし一休は蜺子になりて御覽じける  
 か一休少もおくせず、扱々おのゝはおるかなる事をのたまふものかな、我等は蜺子にな  
 られども蜺子の心はよく知りたりと宣へば、みなくそれはうけがたき返答ならん、一休  
 さればとよ、おのゝは此一休が心になり申されれば、愚僧が蜺子の心になりたるかなら  
 ざるかしれ申すまじと、大に笑ひ給へばおのゝ藤咲門にてにげられけるとかや。

○爰に一休の時代に蜷川新左衛門尉親當といふ人ありけるが、禪法に身をやつし心を  
 なやましけるに、一休の發明なる事にきゝ及びて導師とたのみ奉るべしとて、あるとき  
 一休の草庵へたづね行き、柴の扉をほとくとたたくに、折節和尚出たまひて、いかな  
 る人ぞと問ひ給へば、いやくるしうも候はず、佛法修行の大俗まぬりて候と申されけれ  
 ば、一休はやとひたまはく、

なんぢはいづくの人ぞ

答曰く和尚と同國

國には何事も侍らぬか

鳥はかうく雀はちうく

こゝはいづくとかしるや

むらさきに染たる野邊

いかんとしてか染けるや

尾花朝がほ紅菊紫蘭

ちりての後はいかん

宮城野がばら

原には何事も侍る

水は流れて沈々風は吹て颯々

よき哉これくと請じ、茶をまぬられよとて、

なにながなまぬらせたくともおもへども達摩宗には一物もなし

返歌

一物もなきをたまはるころこそ本来空の妙味なりけり

と申されければ、一休のたまひけるは、聞及びしより蜷川どのには道心者なりとて感ぜ

られける、さて四方山のはなし過て親當申されけるは、少し承りたき事あり、邪正一

如といふ心得はいかなるがよき侍るや、一休聞給へとて邪正一如の心を、

生れては死ぬなりけりおしなべてしやかもだる摩もれこそ杓子も

又問ふ、空即是色とはいかん、答へて、

しら露のおのがすがたは其まゝに紅葉におけばくれなるの玉

又問ふ、色即是空の心は、

花を見よ色香もともにちり果てころろなくとも春は来にけり

又問ふ、世法はいかに、

よの中ぞくふてはこして寝ておきてさてそのうちはしぬるばかりよ

又問ふ、佛法とはいか成る心得をよしとし侍らんや、

佛法はなべのさかやき石の髭給にかく竹のともすれの聲

と一々問ふ言葉の下に歌よみてこたへられければ、親當舌をふるはかして聞及びよりたけ

き活僧かなと頼もしく思ひければ、いよく道を示したまはれ、いつまで語るも濱の真

砂のかすくなれば、光御いとま申すとて、しほり垣の邊まで歸りけるが、手をばたとう

ち歸りて一大事の安心はすれたり、佛にはいかにして成りけるぞと申しければ、一休きや

つばくせものかなと思しめし、それはいと易き事なりとて、ふんぞりひへりて目口をひる

げて、かくして佛にはなるよとのたまへば、親當おどろき、活大禪師かなと心空及第

してぞかへりける。

○一休和尚は奈良のたき木といふ處に、折々おはします、其邊の村々は近衛どのの御領地にて有りけるが、左近尉といふ家老、百姓をひたものせぶり取りけるに、百姓ども之れをなげきて、いかせんとびしめきあへり、其内老人申しけるは、いかに百姓にあり、きつしとても武家とははるか違ふべし、御公家の長袖なれば訴へ申して見んとて、訴狀をたくみける所へ、折ふし一休鉢をひらきに出給ふ、百姓ども一休を請じ、この訴狀を御聞き下されよとたのみければ安き事なり、いかなる事ぞやとのたまふに、しがくの事よし申しければ、長々しき狀までもなし、是をもちて御館へさぐげよとて、よの中は月にむら雲はなに風近衛とのには左近なりけり

とよみて、是れをさらくとしためつかはされければ、村々の百姓がゝる事にて免多くたまはる事、思ひもよらずと申しければ、一休ひらさら此歌のみさぐげよと仰られ

て歸り給へば、せんかたなくこれを御館へさぐげれば、これは何ものよみけるぞと仰出されける、百姓申しけるは、薪木の一休の作にて候と申せば、その放者ならでは、かゝる事いはん人今の世に覺えずと興じ給ひて、多くの免を下されける。

○一休丹波路へおもむき給ふ、ある山里に二三日とうり有りけり、在處のもの申しけるにいかたびの御僧、この郷境に二町ばかり南郷に天臺の寺の候が、此寺夜るになれば、すさまじき家なりして、色々ふしぎなる事ともあるにより、我すまんといふ坊主なし、其仔細は去々年たびの僧たのみおきたるに、去方より三年忌の卒都婆をたのまれ、此坊主の書きたるが、其より時ならず火燭もゆる、其火の高き事一丈計りあり、郷内ば申すに及ばず、りん郷二三里の外までも、其かくれなし、されば其坊主も、さまざま經多羅尼を修しとむらひしかども、しるしなれば、いつの頃か此事はづかしくや思ひけん、夜ぬけして行方しれず、故にこの里の女わらへ、よるにもなれば、恐れて門せとへ

も出られず、其のち或坊主を入置きしに、是も三日とこらへずして又出られ、其より我住  
 せんといふひじりなければ、おのづからあき寺となりくちばてんこそ惜う候へ、是はいか  
 なる事にてや候らん、一休聞給ひて、さやうの事はいかほどもある事なり、それは別の  
 事にてはあるまじ、定て卒都婆の文字の書ちがへしゆゑならん、それがし我なほし參らせ  
 なければ別の義あるまじ、さらば同道申さんとて、くだんの寺に行き見給へば、法華經の要  
 品なり、あんの如く文字ちがひあり、あらため書き直し給ふ、其文字にいはいく、十法佛土  
 中唯有一乘法無二亦無餘佛方便説とかき、これを立おかれよ、かされて仔細はある  
 まじとて、和尙はそれより西國方へころろさし給ふ、其後は此寺無事になりけり、ひと  
 へに和尙を神佛の化現なりといはぬものなかりけり。

○又丹波のそのべより三四町南の在所に、かめといふ女あり、母一人にぞ有りける、そ  
 の三四軒となりの喜八といへる者の方へ、かれて縁付のやくそくありしに、或者いかなる

意趣やありけん、さまざまいひさがして契約返かへさせて、隣郷よりあるものゝ娘をよび  
 入り、此女これを無念におもひて病となり終に死たりしが、かの喜八なるものゝかたへ、  
 亡靈よごときたりて恨のべ、善八の首をしむる事たびくにして、其恐さかざりな  
 し、さながらかのむかへし女もおそろしとて親里へにけ歸れり、喜八が親類此事をなげ  
 き、神子山ぶしをたのみて、さまざま祈禱をなすといへども、さらに止ざりし折から、一  
 休園部にましますよしなきとて、此よしをねがひしに和尙、破地獄の誦をかきてこれを喜  
 八が首にかけれるべし、また家のうちにはるべしとのたまふを、教のまゝになしければ、  
 其後ふたび亡靈きたらざりしとなり。

○又讃州三木の郡より二里ばかり奥の山里を修行し給ふに、在所のめいゝく申しける  
 は修行者には何國より來り給ふ人ぞ、此邊は草ふがき山なれば、元より佛なくやうする  
 事なければ、況て御僧などには、一鉢の慈悲をほとこすといふ事もかつてしらす、誠は今

生なまの罪人ざいにんといふは我々われわれが事ことならん、あはれ是こゝにしばらく逗留とらうりゅうましまして、一語いちご一句いっくの道理だうりをもうけ給たまはり、活佛いさまとけにこそならずとも、せめて死佛しにほとけともならばなどいひて、四五にち日にちこゝにとりめ置おきけり、一休いつきゅう申まをさるは、是こゝより北きたにあたり松林せうりんの見みへ候ないか成なるところにて候なが、在所ざいしょのものこたへて、御尋おたづねなくとも申まを上あがたき事ことにて候な、あの林はやしにつきて御物おんものがたり有あり、抑おさへくはやし古寺ふるでらあり、しかるにむかしより變化ばげものありて、其形そのかたち何なにとしれぬもの三人さんにん出いでて、よるくおどりくるふ、いか成なる法師はふしにても三日かも住すませずして立たちくなり、此寺このでら古來こらいより由來よしある寺でらにて、本尊ほんぞんは一刀三體いつたうさんらい春日かすかの作まとやら申傳まをへ候なり、尤もつとも什物じつものつもあまたあるよしなれど、かの變化ばげものにてたれか住すませんといふものなし、御僧おんそう貴たつとくましますば、あはれ變化ばげものをもしりぞけ給たまひて、此寺このでらに住すましたまは、これにすぎたるよるこびなしと、くはしく語りければ、和尚おせうき給たまひそれこそ一だんの望のぞみなり、佛道ぶつだう修行しゆぎやうもさやうの寺でらをとりたて、こそ、本意ほんいと申まをすべけれ、何れもおたのみ申まをすはやく

肝煮きんじられ給たまはれとのたまへば、いづれも大おほいによるこびて、やがて同道どうだいし、彼寺かのでらにともなひ、和尚おせうひとりを残のこして、皆々みなみなにげかへれり、しかるに其夜そのよ五更よなかにもなれば、聞きしにたがはず人音ひとおとして、三人さんにんの變化ばげもの出いできたりおどりくるふ、一番いっぺんに出いでしはげものがうたをまきけば、東野とつやのはづはいとしい事ことや、いつをらくともおもひもせいで、せばねはそんじあしうちをりて、終つひにはのへのつちとなるく。

又二番目またにばんめの化ばりけものうたに、

西竹林さいちくりんのけい三さんでくは、あるかひもなきかたわにうまれ、人ひとのなさを得えかうむらで竹たけのはやしにひとりぬるく

又三番目またにばんめの化ばりけものうたに、

南池なんちの鯉魚りぎよはつめたい身みやな、みづを家いへともじきともすれば、いつもぬれくひやくしとく。

と歌ひ、ひたものおどりける、一休一々合點したまひ、何様きやつらなしりぞけん事やすかるべしと思ひて、さて夜を明し、所の人々をよびよせ、變化のやうなかり、先一ばんに東野のぼつといひしは、是より東の野原に馬のされかうべあるべし、又二番に西のやぶのうち三足にはとりあるべし、三番はこれより南のかたに池ありて其うちに鯉すむべし、これを取あつめ給へとのたまふほどに、人々ふしぎにおもひ、それぐさがし求むるに、其のみなくありしかば、一休其品を葬りて讀經し給ひしかば、夫よりかつて怪しき事なく、一休すなはちしかるべき僧を住持せしめ、和尚はなほ一奥へと心ざし給ふ、よつて今にいたるまで一休を權者といはぬものでなき。

○さて又讚州に楠原兵内と申す武士あり、久々わづらうて醫術を盡すと雖も、さらに其しるしなし、殊に重病なれば最期近づきぬ、折ふし一休郷内にましますよし、其かくれなく内々殊勝なる御坊のよしき、及ばれ、いそぎつかひを以て、此度りんじうの一大

事をもきかせ給ひて、すぐなる道へ引入たまはる有がたかるべしと、申つかはしける、一休聞しめし、それこそ易き御事なりとて、其まづつかひとつれて参らるゝ、和尚取つくらふ事もなく、やぶれ衣にやぶれ紙子の所々はのりはなれ、さながらとびの身ぶるひしたる風情も、これよりまだましならんといへる風體にて、病人の間近くより給ふ、家内の人ども日頃き、およびし僧なれば、如何さま成佛安心至極のむねを聞くべきと、我もわれも次の間につめかけ、かうべをかたづけ耳をすましてきく所に、一休なにとなく病人の耳に口をあて、大音にて曰ふは、

汝すでに末期や、我も行きて、人もゆく、只これ一生は如夢 如幻

かくいひすて、かへりたまふ、何れも勝手には一門家の子あつまり、扱もくめづらしがらぬ一休坊主のすゝめかな、夫りん終をすゝむるといふ事は、成佛かんじんないひきかせて、心安くおぼらするをこそ、りんじうの一大事をすゝむるといふものなるに、かゝる

語は坊主のいふ迄もなく、皆がんぜんに入毎にいふ事なり、さても一狂の坊主かなと口々に申しあへり、かゝる處へある出家きたり、此よしなき、いや／＼それは何れも不都合なり、一休ほどこそ候へ、かやうの語こそいかにも、殊勝におぼえ候、總じて禪宗悟道の坊主などいふものは、餘宗などのやうに、あるひは念佛題目をととなへ尊ぶところへ御参り、やれありがたき事あおほするなどいふ事は、禪僧などは申さぬなり、いかにもく右のすゝめ、しゆしやうやと申しければ、いづれもはじめてさもこそと得とくなし皆一同にかんじける、さて御内に恩を深くかうむりたるものども、御さいこの殉死の面々たれ／＼なるぞと、其用意とり／＼にひしめきけるを、一休ほかにかき給ひて、其夜門前に一首の狂歌をたてられける、

世の中に生死の道につればなしたゞさびしくも獨死獨來

明れば御内のものこれを見付て、さつそく老士へもち出て、何れもうちよりいかなるもの

立つらんとせんぎしける折から、又かの僧申さるは、この作者別人ならず、一休禪師に必定せり、實に尤の狂歌かな、此のうたはみな人はひとり來てひとり死する身なれば、たとへ誰かれ冥途の供をすればとて、便にはなるべけんや、五十人百人殉死するも自樂自得果なれば、めい／＼の罪障により、百人が百所へわかれ行きて、主人に付従ひ行くものにあらず、さればあたら若者どもを殉死なさせんを歎きて、此歌を立たれたるならん、今殉死せん命をもつて、世繼の君を守護なし給はんこそ御家長久ならんと、理を盡して申されければ、みな此理に同じつゝ、かされて殉死のさはなかりけり、されば死するに定りたス面々は、一休を活佛と尊みしは理りせめて道理なり。

○爰に一休津の國の山里を通り給ふに、二人の山がつ有り、一人は伏倒れてあり、今一人は畑をうつ、父子なり、よりに見給ふにむすこ毒蛇のために刺れて俄に死したり、父なげくけしきもなく、一休にむかつて、御房其おはする道のほとりに小家有り、これ我等

の内なり、それよりめしな持きたるべし、只今息子は俄に死したり、さすれば一人の食ばかりもちて來れと申してたべといふ、一休ちかくより給ひ、それ父子の別はかなしかるべきが、いかなれば汝はなげきの色なきぞと問ひ給へば、男こたへていはく、親子鳥夜林明方々如飛去と答ふ、此意は親子のちぎりは鳥の夜、はやしにより合て夜あけては方々へとびさるが如く、わづかのちぎりの間なれば、なげく事なしといふ心なり、一休それよりをしへの家に行き、くだんの通りを女房につぶさにかたならるゝ、扱はとて二人のこしらへ置き食物を一人分さしおき、只一人のばかり持て出る、一休とひ給ふは、其死たるはなんぢが爲にはいかにと問はれければ、わらはがためには夫なりと申して少しもなげく氣色なし、一休仰けるは、それ世の中に死するといへば他人の身としてさへ、あはれをもよふすに、まして夫ならばかなしかるべし、殊に女性にはかなきものなれば、いかゞあるべしと、ひたまへば、女こたへていはく、夫婦契市人行合要事過方々如散とこたへ

て行き過ぎけり、この意は夫婦のちぎりは市により合ひてようじをととのへおはれば、めいく方々へちるがごとし、ながらへそふべきものにあらずといふ心なり、一休もふしぎの思ひをなして、さてもかやうなる山家にかゝる生死無常のことはりをよくあきらめたる男女もありけるよと感給ふ。

○一休伊豆の國にてある山人、猿を一疋とらへ、柱にしばり付なさせなくもうちたゞき、すでに打殺さんとすべきところへ、和尚行あはせ、ふびんにおもひ乞ひ取て、はなしやり給ふ、折から夏の頃なりしが、或夕ぐれに、くだんの猿いちこといへるものをふきの葉に包みもち來り一休へさし出しける、一休かはゆく思しめし布袋に豆を入れてとらせらるれば、とりて歸りかさねて又其袋に粟を入れてきたり、みぎの如く和尚にさし出してかへりけるとなり、畜生といへども命を助けられし恩の程をよくしれり、然れば人間の身として是非のわかちを知らぬは猿にも劣れりとかんじ給ひ、此事を旦那がたにてかたり



たまふ、すこしもいつはりのなきことなりけり。

○又其ころ猶右衛門といへる百姓あり、常に百姓の業をなさず、殺生をこのみ大酒博奕はいふに及ばず、其外わるき事のこりなく大いたづらなるもの有り、常々猿をかひ置ける、然るに猶助といふ一子あり、嫁をむかへしの子姪にて七ヶ月といへる頃、右飼おける猿何やらんすこしいたづら致しけるとて猶右衛門大にいかり、猿を柱にくり付七八日も食をあたへずせめければ終は飢死なしけり、かくて此嫁十月に滿て出産する處の女子目つき面つき猿の如くにして、全身しかも五六部ほど毛生てさながら猿のごとき小兒なり、これ全く親の邪見孫にむくふ處にして、和尚まのあたり見給ひしとの物がたりなり、おそろへし、

○一休初發心するとき、越後路へ修行に下りたまふに信濃上野のさかひ近きところに湯澤といへるところにて、はや日の西山にかたむくゆき、宿をこひ給ふに、在所のもの

申すやう、御坊宿を求め給ふならば、むかうに見ゆる山中に古き堂あり、これへ行き一夜を明し給へ、さりながらかの堂には天狗住むよしいひて住持するものなく久しき空院なり、その心して行き給へ、和尚それこそ望む處なりとてやがて行て見給ふに、此邊すへて山多くして陸奥の方へ峰つきにて、駒ヶ嶽坂戸山清水白峰松ヶ嶽などゝていづれも高山ありて物すこき土地なり、和尚かの堂へ行きて佛だんの上にあがり、隱形の印をむすび心なしづめておはしけるところに、夜半のころうへの山より、人ならば二三十人許りの音して、さうめきはたり来る、一休すはやと思ひ見給ふ所に、堂のうちへむらがり入るを見れば、色白きけなげなる法師を手こしにのせて、小法師ばら二三十人前後をかこみて來りしが、此法師小法師ばらを庭になひ出して、なんぢらはあれにて遊び候へといふ、かしこまつてばらくと外に出て遊ぶ、ときに此僧一休を見て、それにかくれ居給ふ御房これへ出られ候へといふ、一休さては見付られたりと思ひて、何の用に候やと申さるゝ

いや御坊の隠形の印のむすびやうのあしきゆる見え申すなり、是へおほしませ教へ申さん、さらば物見給へ、所詮なきやつばらに見せ申さじとおひ出したり、先印むすびて見たまへ、さらばとて一休むすびたまへば、よし／＼只今は見えたまはぬぞといふてそのうちは主従ともうちまじはりて舞あそび、あかつきがたに奥山へかへりけり。

○一休關東心外寺にしばらくおほせしが、此住持もそのかみ同學なれば、むかしのよしみを思ひ種々馳走したまふ。あるとき一休とせんのみより客殿に出て四方をながめておほする折から地侍と覺しき人供四五人をつれ來りて一休にむかひ、いかに御坊、此寺の寺號山號はなにと申すぞ、一休こたへて山號は別法山寺號は心外寺と申す、貴殿はいかなる御方にてましますぞ、某は矢奈木雪折と申して、此邊近き在所ものなり、此寺はかれ／＼承りおよびしまゝに參詣申すなり、しかるにめづらしき寺號山號なり、それ三界唯一心外無別法にして心の外に法なし、いか成をか是別法心外寺と

たづぬるに、一休とりあへず答へていはく、それ柳の枝に雪折なく、いか成か雪折とこたへ給へば、此侍大にかんじさても／＼答話かしこき坊主かな、我等は内々たくみてさへさしあたれば失念する事あり、又はかつて出さる事多し、そく時にかやうのへんとうせられし事あつばれの御坊かなとかんじける。

○又御雲水のころ駿州富士郡大石寺に知音の僧おはすとてたづね給ふに、互になつかしう思召し、しばらく足を留め給へとて、少しの滞留ありしより、近村の凡俗を集め、寺僧の法談などし給ふを助講などありし折から隣り村の村山といふに喜兵衛とて大百姓あり、常に隙なる身なれば殺生のみ樂みとせしが、庭先の柿木に鳩二羽來りとまりしを、得たりと鐵砲とり出したらち一羽をうちおとしけるに一羽の鳩おどろき飛去りしが、また元の枝へきたりとまりしを、又も玉をこめかへ同じく打落せしが、ふと一休和尚の法談を思ひいだして、鳩に三枝の禮ありと聞き、此鳩はつがひのはとに

して、雌をさきへうちしや雄を先へ取りし事や、残りの鳥の元の枝へ來りしは、死を共に  
 せんと我が玉を待ちし事うたかひなし、扱々鳥だにも夫婦の約あるものを、まれに  
 人間とうまれながら、殺生をこのみ、是まであまたもの命をとるを樂しきと心得し  
 樂田のほどこそおそろしやと、たちまち發心して、一休のもとへはしり行き、若きより  
 の我があやまりをさんげして、御かみそりをさづけさせ給へとて、其座にて剃髮染衣の身  
 となり、全證居士と法號をうけ、明くれ念佛三昧に入り、八十有餘の年齢をたもち子  
 孫榮へけるとなり、其とき法名を下さるゝとて、

こころよりくびにかけたる傀儡師鬼をださふと佛出さふと

○越前の府中に長野銀助とて、馬上の名人あり、一休福井より上り此府中に二三日と  
 うりうして萬をとり行ひ給ふに、彼銀助きよおよび、御齋も上げ申したしとて和尙をむ  
 かへ、御齋もすぎて四方山のものかたりのころ、さる方よりはね馬を曳きてきたり、御六

かしながら此馬を只今一馬場せめて給はれと申すに、やすき事なりとてやがて馬引よ  
 せのせられしが、此銀助と申すは元來せんきの病にて陰囊大に腫たりけるが、鞍の前輪  
 につかへて事のほかのりにくきやうすな一休見てをかしくおもひ、

はね馬のまへわにかゝる大ふぐりきんふくりんとこれをいふらん  
 とよませられければ、銀助大に興じけるとなり。

○又下總國相馬郡を通り給ふ頃、和知川といへる水上に大ぬまあり、此近村にある  
 もの、妻十二三歳なるまゝ子むすめを右の大沼のほとりへつれ行きて、此沼のぬしに申  
 しけるは、此娘を其方へ参らせ簪にし参らせんと、たびくいひけり、あるとき又件  
 の沼へつれ行き、かくの如くいひけるに俄に空すさましくなり、雨風しきりにして、沼の  
 水立、すさまじき事かぎりなくいそぎ、家につれ歸りに物のあとより追くるようにおぼ  
 えければ、いよくおそろしく思ひ、かの娘父に取りつき、日頃我等を沼へ母のつれ行

きいひし事をかたるに、其夜大きな蛇来りてくびの上へ舌をうごかして、此むすめを見  
てはしばらくありてはうせぬ事度々なり、爺親此事なんぎに思ひいかいあらんとな  
げきかなしむ、其頃、一休同國にまします事、國中にうくれなければ、知識と聞き  
づれ行き、因果の仔細を語りあかしなみだを流して頼みければ一休さても不便の事やと  
て猶もくわしく尋給ひ、さらば我文を書て得させん、かされて蛇きたるとき、此文を  
となへ聞かせよ、二度きたるまじとて其文にいはいく、

此女我女也母繼母也無我免争可取

かくとなへきかすべし、重て来りまじとかきてつかはさるゝ、此文の心は此女めは我子  
なる母はまゝはゝなり、我がゆるしなくてはいかかかるとるべきといふ心なり、男よろこび  
くだんの蛇の来るを待ける所に、又れいの如くすさまじくして来る、さればこそとおもひ、  
さづかりし文を一々となへ聞かせしうば、たちまちさへて失せにけり、畜類といへども

物の道理を能わきまへ、二度来らずと申し傳へ侍る。

○こゝに常州徳念寺と申す淨土寺あり、住持の長老の旦那にて有りけるが、いかい  
おもひけん、先祖より代々淨土にて候が、不斗禪寺へ参り久しくわづらひて程なく死し  
けり、其子すなはち禪寺の住持にぬんどうを頼むよしを、かの徳念寺ほのかにききて、中  
々先祖よりわが旦那にまされなし、しかるをなんぞや禪家へわたしてぬんどうさせん事、  
前代見聞の耻辱なるべしたとひ、此事に於てはすくびに、おほふとも、わが引導せん  
ものをと思ひ定て在所のもの其外あふれものを二三十人ばかりかたらひ、みちんになさ  
んとひしめくを、此よし禪寺に聞へしかば、いやくさやうな六かしき死人を、取をかざ  
るとても何かは苦しがるべし、入らざる事なりとて打すてぬ、三十五日のとぶらいすぎで、  
此徳念寺俄に狂亂して狂ひ出で色々の事を口ばしりけるを、何れも旦那衆めいはいく  
て、座敷牢を作りおし入れおけば、牢をやぶつて出で、尿をたれては手ににぎり、あるひ

は顔にぬり又は己が食する飯器に入れて在所中をもて歩行き丸裸になり、着ものすんく  
 にくひさき、家々へとび入り、人の妻子をおし付うち倒しなどして、さまざまの悪わるく  
 くるひけるほどに、終にくるひ死にしける、やがて火葬にしけるに、石などを打くべた  
 るやうに、黒くはなりけれども、灰にもならず、ふしぎにおもひ炭木を山のごとくにつみ  
 て焼ども少しも焼ず、弟子もこれを見て大におどろき、これ只事にあらず、いかゞはせん  
 と評議なす折から、一休和尚其ころ常州にましくけるが或人の申すやう、上方  
 より一休和尚といふ知徳の僧下りぬたまふ、此和尚に仔細を尋ね見たまへかしと申  
 しける、弟子坊主幸ひの事かな、さらばとて弟子一休へ参り、しかぐと申しける、一  
 休き給ひて、そは不便のことかな、それ佛法と申すは人我の相をとめて、心を納るな  
 もつてせんとす、まして僧法師は大慈悲心をもつて専らとして人をおしゆるものなるに、  
 愚痴放逸にしてかばねをあらそう事、生ながら大に似たり、あさましき次第なり、それが

したちまちら灰にして参らせんとて諸行無常の四句の文を書たまひて、是を死人のうへ  
 へなげかけ給はゞ、即時に灰となるべし、早とくくとあれば、忝なしとてとりて歸り、  
 彼ふすぼりたる死人の上へなげかけければ、あぶらをかけてやくが如く、へらくと焼き  
 忽ち灰とぞなりにける、ふしぎなりし事どもなり、さるによつて和尚を佛の再來といは  
 ぬ人こそなかりけり。

○一休北國より京都へのぼり給ふとき、越前敦賀の宿をうち過ぎ、かいつの山中に一  
 宿し給ふが、何ものかいひけん、今よひ此宿にとまりしは、都に名高き舞まひの大かしら  
 にて、いまは入道して世間をすて、諸國を修行し給ふと承る、いざう方々みな参  
 りて一ふし所望せんはいかゞ、皆々是は一だんの事かなとて、大勢旅宿へ詰かけて、  
 一休に對面し、御坊はうけたまはり候へば、都がたにて舞の大かしらどのよよし、遠國  
 遠里までも其沙汰くれなし、幸これに一宿し給ふこそ、後のかたり句になし申さん、一

ふし舞てきりせ給ひ候へとせめかけて申しければ、一休は大に迷惑し、これは思ひもよ  
 らぬ仰かな、見給ふごとき坊主なれば、經陀羅尼などは少しぞんぢたるが、其舞といふ  
 ものはさらにしらすと断られければ、在所の者ども、いや／＼なにとのたまふもたゞ一ふ  
 しの所望に候、せび／＼御舞なきならば、今宵の御やどはかなふまじ、いかに／＼とせめ  
 かけて所望す、一休さて／＼それは迷惑千萬、さだめて人ちがひなるべしとさま／＼  
 わび給へども、皆もんもうなる里人なれば、更に合點せず、是非とも／＼と所望すれば、  
 しばし案じて、愚僧けつして其舞まひにてはなく候へども、一ふし舞はざれば御がへりな  
 くばせんかたなし。愚僧わかきときに、高館といふ舞を少し見覺えたるが、御ぼつかなく  
 候へども、一ふし舞て見申さん、先鈴木三郎が紀州藤白より奥州衣川まで着し所  
 を少しまひ申すべしといふに、在所もの、高だちが何やらんしらすれども早く／＼と云  
 けるに、一休座をあらため扇をてうとうちて、さる程にすゞきの三郎しげ家は旅のしや

うぞくめされつゝ、藤白を立山で、奥州さして下られけるほどに、くだられけるほどに、  
 く／＼、と凡二三十へんくだられけるほどにとりくりかへしく申されれば、里  
 人等はふしぎして、いかに御坊さきほどより同じ事をくりかへしくのたまふは、いかに  
 の事にや、早や舞をまうて見せられ候へ、一休さあらぬ顔にて、三郎が紀州より奥州ま  
 で、七十五日が日數をかゝりて衣川へつかれたる事なれば、先くだられけるほどにと三  
 十日も五十日も申しつづけにして、それから衣川に着しての舞をまひて見せ申すへし、お  
 の／＼にも此處に入九十日逗留して衣川の處を見たまふべしと宣ひければ、いづれ  
 も顔を見合せ大にあきれしづらくの間さへ、くだられけるほどにてたいくつし侍るに、い  
 かでか七か五日が間さく事はなるまじとて、皆々家にぞかへりたるとなり、是も一時の  
 才智なりと人申しあへり。

○今出川道によしや如齋といふものあり、兼て和尚とまじはり厚かりしが打つゝき用

事しげくて、久しく和尚のもとを尋ざりしうば心にやうりけん、文をしたゝめて此頃  
 は用事つどひ候ゆる、御見舞も申し上げず、御ぶさた申候、いづれ近々御見舞申上ぐる  
 など、断りの文をつかはしける其返事に、

見舞とて見まふてくれで見まはずとよしやじよさいと思ふ身ならば

とよみてつかはされける、如齋これを見て御坊の今にはじめぬかるき御事かなとかんじ  
 けるとぞ。

○一休和尚高野山へ登り給ひ、四方の山々をながめてさても聞しより尋きけしきかな  
 と、ながめおはしけるに、高野ひじりども立いできて、「休を見ていかなる人ぞと尋ねけ  
 れば、愚僧は名もなき道心者にて侍るが、此山はじめて一見仕候へば、餘り風景が  
 面白く侍れば、こし折の詩が歌が一首つかまつらんとぞんじつくぐとして侍るとのたま  
 へば、ひじりども一休とは中々おもひがければ、しほらしき事をいふ御坊かな、ことわ

さにいへるめくらの垣のまき、すぐちの嘘で心なぐさむとや、その身はかゝりみてこそと  
 て、うそさむげなる形ふりにて、誇は此山の名産高野がみそりの双よりもうすきふり付  
 にて細首のいとあぶなき體にて詩歌を案つるとはできたりと、口々にいやしめ笑ひける  
 に一休耳にもかげす空うそぶきておほしけるがやうく一首仕りたり、硯紙たまはれ  
 と申されければ、何一首出来たとや、さらば拜吟仕るべしとうち笑ひ、硯紙を出した  
 れば一休筆をとり、彼東坡居士が經山寺の詩を山がたに作りしを例として、

七山秋葉落

五山春開花發空

三山迎連峰報下佛心亦

一山高近都卒内院土進空

二山閑表華藏世界地醒寂

四山平幽臨化佛一悟一亦

六山夏涼風煩一寂

八山冬素雪

かくのごとく即時に筆をとり、さら／＼と認め給へば、一山のひじり大におどろき、さて  
も形容に似合ざる見事なる筆跡といひ、又目なれぬ詩の體かなと、明たる口をふさぎかれ  
扱／＼先刻は皆々よしなき事ともないひて、御僧をばづかしめ候事かへす／＼はづか  
しうこそ、いかなる人を御名をなのり給へと口々に申しければ、其詩の下に候とのたまへ  
ば、まことに小文字候が何一とが申すぞとたづねける、其中に一人のひじり眉をしげめ  
此詩の筆跡をよく／＼見るに、京紫野なる一休和尚の書なり、さるから一としる  
されたり、さればこそ曲者なりとふり歸り見るに、和尚は彼方へ下向したまふ、ひじり  
たちそれと認めまゐらせて、過言をあやまれとてはしり付て引と認め、一休和尚とも

存せずして段々無禮を申たり、御免ありて先々坊中へ入らせ給へとおんぎんにのぶる  
に、一休いやく／＼何も断はり給ふべき事にはさら／＼なしとて、きげんよく坊へ歸り給へ  
ばひじりたちさま／＼馳走をまゐらせける、さて厚く禮をのへ下向し給ひける跡にて、一  
人のひじり申すやう、かゝる名僧また登山し給ふ事まれなり、願くば大師の御影に贊を  
たのみ申したらばいかにかといふに、いづれも尤とも同じ、さらば今一たびよびかへしま  
わらせんと、又追かけ奉るに、一休は何事にやと仰らるれば、しか／＼のよし申すに、  
一休わらひ給ひて、夫ほどの事また立歸らすともなることなり、御影を急持きたれよ  
とて、道なる茶屋に、休ておぼしける、人々おどろき大師の贊を請ふに、立ながら思案  
もなくなさるゝ事聞きしより大博學の祖師かなと、舌の根をふるひけり、扱大師の御影  
をもち來りければ、

弘法大師活佛死れば野はらの土となる



ひと筆にさら／＼とした／＼め給ひて下向し給ふ、人々ふかき事もありといそぎ登山して  
學匠に見せければ、格別のおどけ事なりしがば、またひじりども口を得ふさびざりける  
となり。

卷之五

○さて一休和尚能州蛭川村の草庵にまませし頃、泉水のきしに水の上へおよん  
で横ばひにれたる松のありける、弟子衆をあつめて、此松を真直に見たるものやあると  
たづね給ふ、皆々立かほり入かほり見られけれども、横ばいの松なり、其とき蛭川新  
右衛門参り合せて、われらいかにも真直に見て候と申されければ、さては如何にと仰あれ  
ば、まこといかみてこそ候へと申されければ、和尚手をうちてよく見られたりとて、五十  
則をゆるすと仰られける。

○和尚熊野山へ御参詣まし／＼て本宮へあがりたまふ、ころしも春の半なれば、山々  
谷々の櫻、都三月の頃よりもいと目出たかりければ、拜殿にうちのぼり、四方の風色を  
ながめましましける處へ、社僧一人まかり出て客僧はたゞ人とは見参らさずと申しけれ  
ば、中々われらはたゞ人にては候はず、御らん候へ出家にて候と申されければ、彼僧は  
きもなつぶし、こは興がる御僧かなとひとつふたつと物がたりし給ひて、和尚この僧は少  
しはなせる者とおぼしめし、高野山の詩の事をおぼし出させ、此山にても一首を作りて  
なぐさまんと矢たてなとり出し、さら／＼と書て彼僧に見せ給へば、其ま、神前へそな  
へて、さて／＼御筆跡見事に候、都人と見申すはひがめかと申しければ、和尚答へて  
よく社察しられたり、われは都紫野の一休といふものなりと仰られければ、さては  
かれてきつたへし和尚にしてましますかとて、かの神前にさ／＼げおきしなとりきたり、  
とてもこの事に御名を書付給へとれがふに、さらば後の代かたり草ともなりなんと、一休

老人偶題とぞ記し給ふ、其詩に、

七山一里放光

五山一瀧吟落碧三

三山一海浪高船片雲社

一山一廟等一扶桑神片漲景

二山一客成群數萬人輪塵春

四山樓鐘動月輪惱宮

六山一谷洗流煩木

八山一花猶瘦

一休老人偶題

さて彼僧は一休和尚なりとて自宅へ招し、横植で庭をばき、杓子で芋をすり、御馳走

申事おろかならず、折ふしむのさかりなれば、庭前のほなをも見たまへとて、酒肴を  
いだしてなぐさめ申す、さてかの僧申しけるは、此山へまた御越なざる事もはかりが  
たし、末代の寶ともなすへければ、何にても一筆遊ばし給れと申しければ、御望みあ  
れとのたまへば、さても拜殿にての御作の詩體はいにしへよりもかゝる體の侍りけるかと  
いふに、いかにも古へよりありし事なり、唐土の東坡居士が徑山寺にて作りし詩體とな  
りかたり給へば、さてくめづらしき詩や、されどかゝる山奥に住みて、ことに學問も  
なき文盲の我々が目なれ耳なれず候、相成べくは愚なる我々が耳なれ目なれたる事を  
ねがふなりと申し上げれば、和尚うちうなづき給ふ折から、春風ふきて櫻のぼらくと  
ちりければ、貫之のうたを思ひ出されて、

櫻ちる木のした風はさむからで空にしられぬ雪でふりける

これはいかにとのたまへば彼僧いや走もいまだ、耳なれ申さるゝ處なりといふ、又さくら

の花の風にちうされ、さつくとみだれければ、其まゝ、

雪やこんこあられやこんこ御寺のかきの木に一ばいふりつれこんこ

是はいかにと申されければ、彼僧大にうちわらひ、さてもおどけたる御僧かな、いかに  
耳なれ目なれしものとても、それはあまりと申せば、一休もわらひ給ひて、實にもつとも  
なり、いでく其望の目にも耳にもなれしことをかきてまいらせんとて、かく

きれが鈴海山木こり谷のこゑ入あひのかれに庭前のはな

とあそばしければ、かの僧さてもよき御かる口や、實に見なれ聞なれしものをのぞみける  
こそ悪なれとて、御口のかるきをかんに侍る、かくて色々馳走申しければ、次手なれば  
かの東坡が詩を書おくべしとて、

七山僧

五山鳥菜來

三山雲飛片	僧問	山花發茂林	一片	食道	山僧來問	道	山客還相尋
二山遠路幽深	沈吟	尋	四山水碧	沈抱	相	六山猿樹還	八山客
山花	發茂林	一片	食道	山雲	飛片	々々	山鳥菜
山	遠路幽深	沈吟	尋	山	鳥菜	僧來問	道
山	水碧	沈抱	相	山	僧來問	道	山客還相尋
山	猿樹還	八山客		山	花	發茂林	一片
山	雲	飛片	僧問	山	花	發茂林	一片
山	遠路幽深	沈吟	尋	山	雲	飛片	々々
山	鳥菜	僧來問	道	山	水	碧	沈
山	猿樹還	八山客		山	鳥	菜	僧來問
山	客	還相尋		山	僧	來問	道
山	客	還相尋		山	客	還相尋	

かく書あたへて、いとま申してぞかへり給ふとなり。

○爰に堺にての事なりしに、一休和尚へ常に参りて、御心安く御意を得たる又次郎と  
いふ町人ありける、あるとき河豚汁をしたゝか食ひてけるが、殊の外に酔ひ、終にその  
日のうちに死しけるが、今は時に申しけるは我世にありしときは死る事はいつの頃ぞや  
と思ひけるなれば、後世とて願ひ置し事もなく、されども一休和尚へ常にしこり申し御物

がたりとも承りし結縁あれば引導をもたのみ奉れ、かゝる不慮の死を仕けり、さこ  
 そ哀れとも思召すらめ、かならずといひ聞て終にむなしく成りにける、妻子眷属なげき  
 かなしみ、遺言の通りつぶさに一休和尚へ申し上げれば、いとやすき事なり、扱々ふび  
 んの仕合と仰られける、しかる處へはや時分もよく候間和尚様御出をあふぎたてま  
 つると再三人をおこしければ、一休仰られけるは、いや〜われら罷出るにおよばず、  
 引導つぶさに書てつかはすべし、誰にもよみあげてほふむれよと仰られければ、妻子な  
 げきて遺言にて候間、ひらに御出下されよ御慈悲なりとさまぐれがひければ、一休  
 のたまひけるは、いや〜我等が出ればかへつてかれがまよひとなるなり、則書してつか  
 はすべしとて、

海 中 有 三 毒 魚 一  
 名 云 三 河 豚 魚 一  
 面 腹 白 背 斑  
 人 不 食 此 魚 一

嗚 呼 痛 哉 又 次 郎 食 之 忽 死 來  
 彼 歳 五 十 四  
 彼 歳 五 十 四  
 合 て 珠 一 連 百 八 煩 惱 の ま づ な を ふ つ と き づ っ て 行 たい 方 へ つ っ と ゆ け。  
 木曾十七寅の年角のないこそ添よけれ。  
 とあそばしてつかはされけるとかや、しかればおの〜肝を消しけれども仰なれば其如  
 くにおこなひけるが、其引導の書きたるを、其子供秘藏して今に傳へ、其家のたからと  
 し、又もなき墨跡にて代々所持仕りて有りけるとなり。  
 ○扱一休和尚の御袋は浄土宗にて有りしとかや、一休常にかな法語をかきてつかはし、  
 又は水かじみといふ雙紙を送りて道をなしへ給へども、しか〜御さとりもなく、明暮た  
 い念佛のみにて過し給ふ、一休聞しめし一段の御心入なり、念佛にて佛にならせ給はん  
 事はうたがひなければども、此所より愚僧が庵へ御出あらむに何のうたがひなく御出あるべ

し、是よく常に道しり給ふゆゑに、苦もなくうぐ／＼とありき給ひても、庵へは御出有るなり、又かた田舎人がわが庵をたづね來らんには、いか程道にまよひても我等が庵ある上は何れたづねあふなり、そのたづねるまでの心苦しきあいだがまよひなりと仰られければしからば何にても示し給へと仰られける、一休さあらば一句申て見まぬらせんとて、  
 目なしとち／＼聲についてまませ

皆人のさとりとやらんいふことを悟る、其ならひはじめに父母もなく、とつと巳前の我身は何なるぞといへどもといふものを知らずと／＼がむるものもしらす、然ば釋迦彌陀はよし日のはすがたりやといふものはとすがたりかといひければ一黙しておりける、此心を見給へと仰られければ、御袋のいはく、

いへはいはいはねはむねにさはかれておもはぬさまや仰なるらむ  
 とあそばしければ一休よろこびたまひてとりあへず、一首をよみたまひける、

いまは／＼や／＼るにかゝる雲もなし月のいるべき山しなれば  
 とよみ給ひて、御工夫尤も／＼とてよろこびてかへり給ひける。

○一休和尚の旦那に狗子佛性の話をさづけ給ひしに、この人狗子とは犬の子なり、これに佛性とは何とも合點まぬらすと申しければ、聞て見給へとて仰られけるは、  
 犬の子にあやかる人のしわざこそほとけともなり地ごとくへも入れ

むかひどのゝゑのころはまだ月があかねおつばにまゝを入れてころ／＼や  
 と仰られければ、いま目があきて狗子のところはやう／＼わかりて候が、超州の有無の處は、千年工夫仕り候へども愚痴の我等は得道仕る事はなりがたしと申しければ、歌よみてきかすべし、此歌を常に吟じて心得て見られよとて、

なしといへはなしとや人のおもふらんこたへもぞする山彦の聲  
 ありといへはありとや人のおもふらんこたへもなき山びこの聲

とあそばしければ彼ものしばらく工夫して、しからは有ともなしともしれぬものにて候かと申しければ、

有無をのする生死の海のおまをふれ底ぬけてのち有無もたまらず

と仰られければ、彼人此うたにて得心して、一首、

有無ぞしるなにおもひけん趙州もなかりしさきの犬の一聲

と申しければ、一休きよたまひて、おつぼのまゝを、一くちまぬりけるよとてわらひ給へ

ば、旦那禮拜して歸りけるとなり

○さて爰に頃しも八月下旬なれば、大風大雨しきりにして洛中の家堂社塔もそこね

ければ、蜷川新左衛門取る物もとりあへず、一休和尚へ御見舞申して、御坊御内に御さる

か、何となくこの外なる大風大雨、御寺はいつくもそこね申さす候やと申しければ、一

休出合たまひてよくこそ御心付候ものかな、誠にめづらしき大風にて候、さりながら常

寺は何事も候はずとて、

わが宿ははしらもたてすふきもせず雨にもぬれずかぜもあたらす

と仰られければ、其御庵はいつくのほどにて候ぞと申しければ、一休わらはせ給ひて、さ

ればこそ大事のことをおたづねあれとて、

わが庵は都のなつみしかぞすむよなうち山と人はいふなり

と仰られければさては、喜撰法師と相住なされ候かとたはふれければ、いや喜撰法師に

かりて居るなりとありければ、さては借家どのにて候かと申してわらはれしかば、一休ま

た一首をよみ給ふ、

かりの世にかしたる主もかりぬしもかすとおもはずかるとおもはず

とよみ給へば、新左衛門此歌を感じて扇子にかき留め、かりそめに参りても得道の徳侍

るとてよろこびて歸りけるが、門より立かへりて、さてくをかしきたはふれ事仰られし

にうかいひ申すべきと思ふ事を打わすれかくすでに歸らんと仕り候。此心はいかゞ心得申すべきとて、

吹ときはものさはがしき風なるがふかぬときにはいつらなるらん

と申しければ、そのまゝ御歌ありける、

吹ときはうべさわがしき山風もふかぬときにはふかぬなりけり

と仰られければ、新左衛門ものなもいはす、うなづきて暫く禮拜をなして歸りしとなり。

○爰に西の國の大名身まかりける、今端のときに申されけるは、我死してのち、種々の

佛事をもつとむべからず、紫野の休禪師を請じて引導を頼み申せ、是より外に望みな

しとて死したりける、人々なげき御遺言なればとて、急ぎ都へ使者をたて一休を請じける

一休折所在庵にて易きことなりとてかの使者とくもにうち速で下り給ふ、既に葬送の日

限きはまりしかば、音に聞えし紫野の休こそ、此國の某どの、御引導の爲とて御

下向ありしとて、國々島々より聞ほどの人足を空にまとうて貴賤くんじゆし、御引導を

聽聞せむとぞひしめきける、葬禮の儀式天には花をふらし、地には錦を散て其よそは

ひ詞にのべがたく、其日になれば數萬の見物、かの一休の引導をぞ聞くべけれど、おしあ

ひへしあひける、扱玉のこしをかきすへければ、一休立出たまひ籠の前に一黙し給ふ、諸

人すはや今やくと耳そばだてゐるに一言をもいひたまはず、天を仰ぎ口をくはつとひら

き、地を見て口をふさぎて、其まゝつと退き給ふ、彼大名の御れん中きん達をばじめ一

門家來のともがらまで是はいかなる御事やらん、せめては一句をしめし給はれと、御衣

の袖にすがりつゝ、諸人の見物も興をさましければ、一首の歌をよみおき、都をさとして

上りたまふ、人々是非なくその歌を見れば、

我はたい後世のをしへをしらぬなりあうんの二字のあるにまかせて

とありければ、皆人これをきつて、あともうんともいはれざる御僧かなと、黙して感じあ

へりしとなり。

○又一休塚へ御下向のとき、淀の河瀬舟に、乗りたまひけるに、乗合に山伏ありける、御坊は何宗ぞと同ふ、一休われは禪宗なりと答へられければ、禪宗には我等が如きと多くはあらしといひける、一休申さるゝはいかにもきと多く、其方は何にてもきとくあらば見せたまへと仰られければ、いで我等が法力にて此船のへさきに不動をいのり出して御目にかげんとて、一にこんがう二にせいたかをはじめてもみにもんで祈りければ皆々のり合のものも目とめを見合あるところにあんのごとく、舟のへさきにたちまち不動の像火えんをばなつてあらはれたり、其時山伏ぢうめんを作り、おのゝおがみ給ふかと申しければ、皆人ふしぎの思ひをなしけれ共、一休はさらにふしぎにもましまさぬふりなり、いかに禪僧かゝるきとくは如何にし給はんとせぐりかけて申ければ、我等が奇徳には身より水を出して、あの火焔をばなつ不動尊をけして見せん、随分のり給へとて、かの不

動の像の火えんに小便をしたゝかしかけ給へば、火焔はそのまゝきえて山伏の法力つきけれ、皆人一休を禮拜して奇異のおもひをなしけるなり、さて舟よりおりて陸路をうちつれ行處にむかひより、なるほど大なる犬の山河にもひくばかりにはへてかゝりければ、山伏申すやう、いかに御坊さきの行くらへにこそまけたりと、あのおそろしき犬のいかりを止め、たゞ今是へよび寄る法力をあらはさんが、御僧はいかにと申しける、一休はいと安きことなり、まづ祈りて見給へとのたまへば、山伏いらたかの赤木の數珠をさらりくとおしもんで、一いのりこそいのりけるか、一切犬はほへやます、手元へ來るれんもなかりければ、たつさまやよこさまかけて、十文字犬ののんどめよ、あびらうんけんそわかゝといへども、いぬはほへやます、一休をかしく思しめし、そのき給へ某はそれほどの事は、あびらうんけんもそわかも入事にはあらず、あのいぬのいかりを止め、たちまちこゝへ來らせんと、ふところより晝飯のやきめしなとり出し、かの犬に一目見せて



ころくくとのたまへば、さしもいかれる犬なれども、やきめし一目見て、くんくんとて尾をふり来りければ、山伏もきもなけし、皆人さても格別なる心得かなと、感ぜぬものこそなかりけり。

○爰に一休和尚の末期の句とて、世の人の口にまかせけるば、その數多し是が實なり是は嘘なりといふも不實なり、いかにとならば彼も御影を書付て賛をもとめ、これも賛をもとむは其賛には、出るまゝにあそばしけるとなり、ある處の御影の賛に、

朦々而三十年。 淡々而三十年。

朦々淡々六十半。 末期勝選捧梵天。

此句々もあり、又の語には、

借用申昨日昨日、

返濟申今日今日、

借置し五つものを四つかへし、

本來空にいまそもとづく。

又ある末期とやらんに遊しけるとて人のいへるは、

生や死や、 死や生や、

柳はみどり、 花はくれなひ、

喝。

柳不緑花不紅、 御用心く。 一休題

○又ある人一休の御寺へ用事ありて参りけるが、或夜沙彌小喝食をこまづけて、一休の御遺言どもをおがみ侍しに、一々名譽を極めたる事ども多かりし中にも、自語自賛の御影を拜し侍りしに、かうへはいかにも長髪にして眼をきつと見出し、うす赤き衣をぬし、丸竹の柱杖をつきいにこしなかけ侍りし賛に、

柳は緑花は紅。

行脚事畢。今日時節。

折主丈子。燒六月雪。

虛堂之再來天下老和尚一休宗純末期書之、

○又ある舊家に所持せる自畫自賛を拜見せしに、是は蛇川村の艸庵に居ませし頃、  
是も髮長くまし／＼卓にかゝり給ふ山居の御影なり、

山居窮僧聽松風。

不須臨濟德山禪。

一箇住山三十年。

公案工夫了畢後。

長松風破罷參眠。

虛堂七世龍寶門客東海純一休老

齋與詩一筆印

とぞ有りけれ、見る目もすさまじくて身の毛もよだつ事なり。

○一休の御ころさしをおもひ見るに、寒山子の風相にかはる事なし、寒山寺の詩句に、

我心如寒月。秋水清無底。

とありしが、一休の道歌に、

我ころそそのまほとけいきばとけなみをはなれて水のあらば

とよませたまふ、これ寒山寺の詩の心なり、寒山は文珠なりといひ傳へしが、一休は定めて普賢なるべし、されば狂雲集に其詩文多しといへども、たゞの人の目には見へぬをにくみて、其中より金つんぼの耳へも入れやすき詩を書きぬき盲の目にも見あきらむべきひらがなにしてしぱりつゝ、子供にも覺へさせ、大人にも未だしらぬ人に見せ侍らんと、かた

ことをかへりみす、反平さくひやうをわきまへす、人の事ひとかきあやまりをもつてわがあやまりとす、我われあやまりても苦くるしからず、かくなん出いしむ、

一休和尚狂詩二十首

題鉢敲

我われ不ず笠かさ兮や夜よ不ず齒は。

東東西西南南北北自自山山身身。

瓢瓢箆箆扣扣罷罷有有何何益益。

花花開開十十方方淨淨土土春春。

題影法師

元元來來有有物物不不離離身身。

揚揚手手同同揚揚伸伸足足伸伸。

全全體體分分明明無無而而目目。

起起居居動動靜靜似似侮侮人人。

彼岸

今今日日彼彼岸岸欲欲開開鉢鉢。

餘餘身身貧貧乏乏雨雨晴晴稀稀。

無無簑簑無無笠笠又又無無杖杖。

結結句句食食犬犬引引腰腰飯飯。

梅法師

往往昔昔江江南南沒沒落落時時。

起起青青道道心心成成法法師師。

欲欲問問橫橫斜斜疎疎影影古古。

伊伊勢勢壺壺底底暗暗敲敲眉眉。

虱

獨獨臥臥寒寒衾衾患患幾幾千千。

餘餘身身貧貧極極有有誰誰憐憐。

夜夜深深依依被被半半風風食食。

天天至至曉曉鐘鐘未未作作眠眠。

男根

一一生生忍忍衆衆動動焦焦身身。

八八寸寸推推根根尙尙勝勝人人。

入入道道修修行行若若時時事事。

須須臾臾老老去去革革頭頭巾巾。

女媵

元來有口更無言。 百億毛頭攤丸痕。  
一切衆生迷塗所。 十方諸佛出身門。

宿少人三首

紅顏綠髮冠沙喝。 況忘御年十二三。  
若有貧僧憐愍志。 寮前吹味致推參。

其二

少年十五月如出。 一笑紅顏花似開。  
本石無心多世上。 嗚呼是此玉段哉。

其三

若衆天然好富貴。 摺切爭可入御意。  
無酒無茶又無餅。 山僧風流只文字。

贊兒文珠

看盡忽忘七佛師。 雲鬢霧髮少年姿。  
手中經卷是何字。 定有愁人小豔詩。

贊阿彌陀佛

汝是桑願。 一人不救。 我無一願。  
萬民平泄。

贊大黑

大黑奪天其面鈴。 諸人信仰置棚陰。  
平生愛鼠是何事。 足下平蕪無用心。

贊布袋

菩提煩惱。 睡裏乾坤。 寤寐恒一。